戦国魔神
ゴーショーグン
AM JuJu
首藤剛志
なにわ♡あい

戦国魔神（せんごくまじん）ゴーショーグン

首藤剛志（しゅどうたけし）
1949年
福岡県生まれ

昭和24年８月18日、福岡県博多生まれ。血液型Ｂ型。シナリオ研究所卒業後、実写の脚本を書く。「まんが世界昔ばなし」が初のアニメ作品。以後「ミンキーモモ」などを担当。

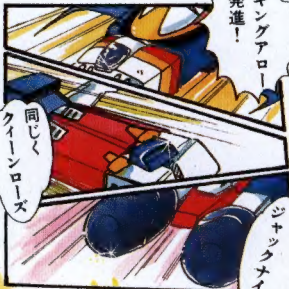
なにわ♡あい
1958年
東京都生まれ

昭和33年11月18日、東京都に生まれる。血液型Ｏ型。大妻短大国文科卒。在学中、マンガ誌「プリティ・プリティ」で商業誌デビュー。以後「ＯＵＴ」などでアニパロを描き活躍中。

似顔絵/なにわ♡あい

なにわ♡あいの ゴーショーグン バラエティ

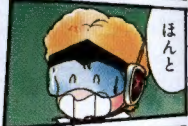
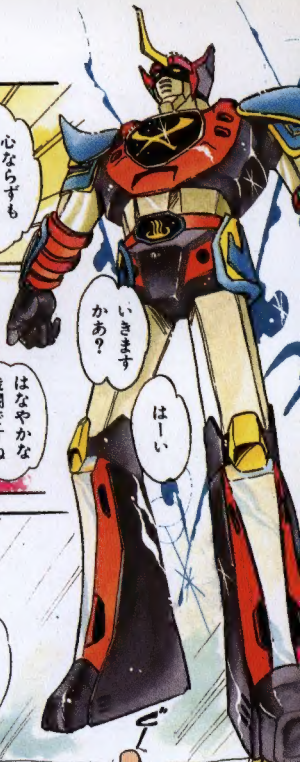
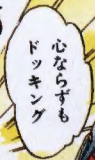
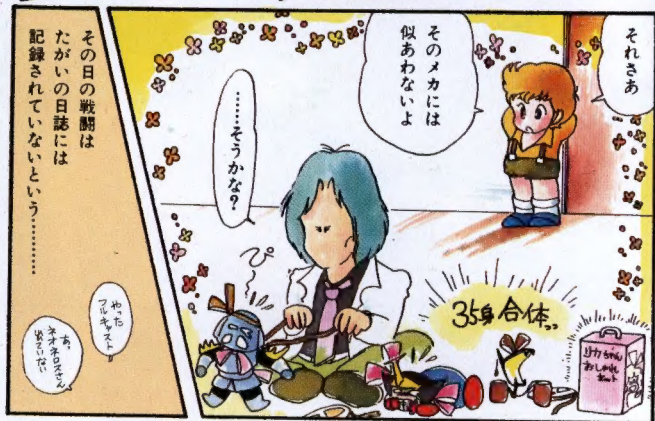
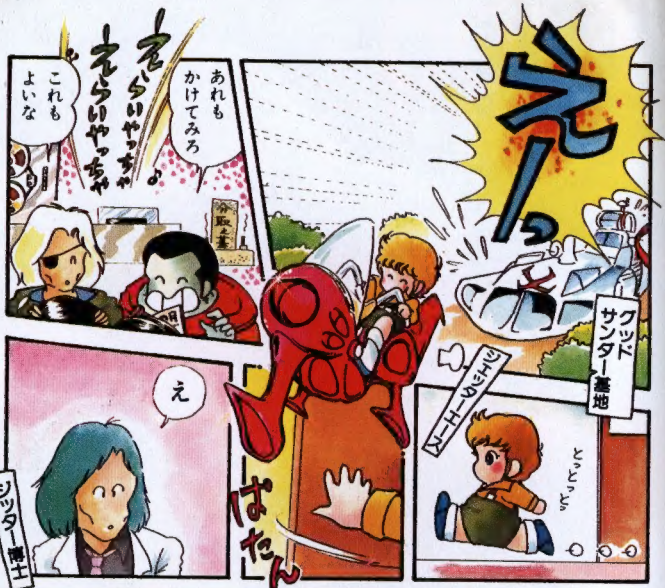
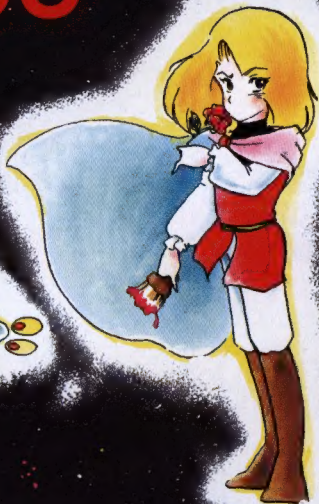
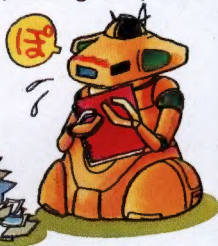
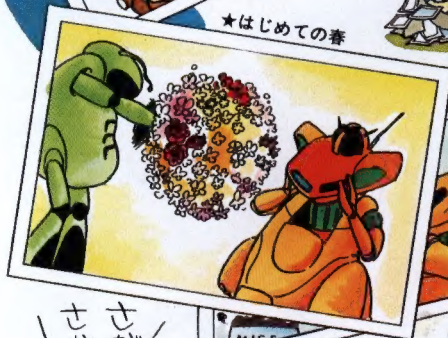
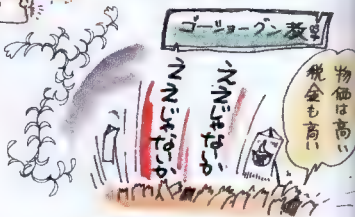
とーとつですが、まんがです……

番組を知らないひとのために

専用テープ紛失の為
今後 戦闘曲が変わります
お知らせまで
…と英語で書いてある
L. M. B.
キングアロー発進!
同じくクイーンローズ
律義なお人…
ほいジャックナイト
ブ
月がー出たでた
月が出た
あヨイヨイ
すちゃちゃちゃちゃん
ぐわっしん
トライスリー
…ブンちゃんらしい
ほんと
こんなのにプロポーズされたわけ
?
…これは心外な
どこからこんな曲持ってきた
さのヨイヨイ
うーむよい
父の形見だ

いきます
かあ?
はーい
あ〜らえっさっさーい
心ならずも
ドッキング
頭痛が…
はなやかな
戦闘ですね
……
OVA
ケン太君
ねえ
メカは
友だち
だよね
ぼくちょっと
いってくる
え?
ドクーガ
まで

えーっ
グッドサンダー基地
あれもかけてみろ
えらいやっちゃえらいやっちゃ
これもよいいな
シェッターエース
とっとっと
ぱたん
え
シッター博士
それさあ
そのメカには似あわないよ
……そうかな?
ぴ
35身合体っ
リカちゃんおしゃれ
その日の戦闘はたがいの日誌には記録されていないという………
やったフルキャスト
あ、ネオネロスさんぬでいない

5:00

天国行
なんだ このアニメはっ 誰も こないじゃ ないかっ
フン
天国
P.—

OVAのアルバム…
ぽ
★このあと出られずに30分泣く
★はじめての春
★みんなのために
間移動3分前
とびこんできたゴキブリを追
さがって
さがって
MISS
Z
キリー&イザベル
真吾&アルーシャ

ラストシーン
See you again…
何度見ても
感動します…
etc
＊ゴーショーグンのなか……＊
はい どーぞ
すべてはこれから ゴーショーグン
♪はげにゃ なれない 地球のソウル♪
グッドサンダーの同窓会
いつでも よんまで☆
ビムラーKP
ビムラー第4段階まであと30秒
20
19
ねえ OVA…
くる
0
どてっ
あれが地球のソウルか…
ビムラーには
第一段階から第四段階まで
ありましてね——
♪
はい 第1
あんた 第2
つらいね——
ゴーショーグン教室
ええじゃないか
ええじゃないか
物価は高い 税金も高い
自我をメカに与えるビムラー…
そのむかし エデンの園で イヴがだまされて 食べた果実も
"自我(エゴ)"でしたよね
してみると ゴーショーグンは 蛇なのだろーか
うにっ
メカは 人間のできないことをしてくれる
人間が いやがって しないこともしてくれる…
おしつければいい というものでもない けれど
今後 メカと 人間の 当番制になったりなんかして
部長
まだ できんのかね!!
全自動 ごますり器くんを 見習いたまえ!!
はっ

都に行く♡

ぶんにゃんの苦闘する青春★

Guts!

レミーに会いたい
おまけ

ここへは招けない
どぶ

会いにゆ
真紅
腕に抱えて

赤インクいる?
その後のゴーリョーグン
……

ドブネズミは美しくない

はつかねずみ
美しい……

おまえたちならドブネズミに勝てるだろう
レミー
ねずみ
5匹 ¥1000

星は美しいもの

時が流れても
不変のものもある

今宵一曲

ぼた
ぼたっ

招待状が来た
Kフライドチキン
ブロンクス支店
前にて
Dear ぶんや
してくれるそうなので
Rハ 持って 来てちょうだいね
From レミ

よかった
じゃないか
……

滅びるものは
みな美しい
天国の
父上
母上
私は
誇りのために
命を捨てます

精一杯生きるのも
また……
ばかね

Ai.

新しいネズミの調教？

そうなの急に増えちゃって
手伝って
まあテストくらいなら

体力中心ね
うん

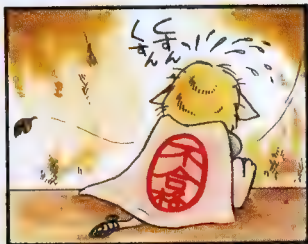
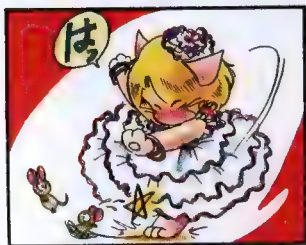
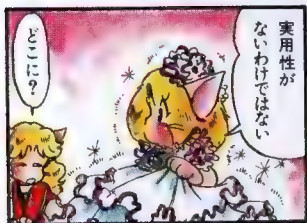
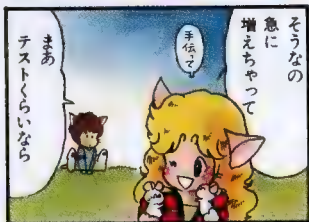
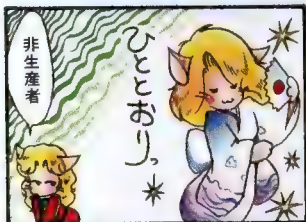
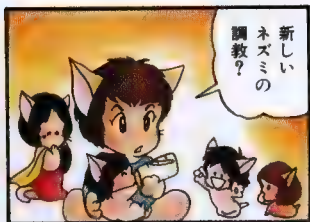
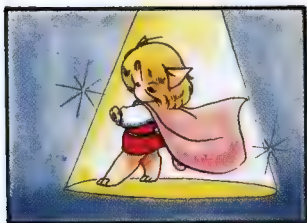
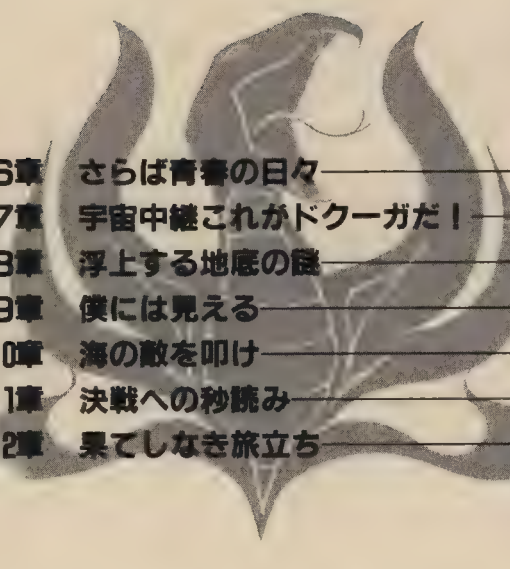
くすんくすん

ひととおりっ
非生産者

実用性がないわけではない
どこに？

はっ

おれには　何もなかった……

3回は
ぶたれてますよ
じゅーぶんに
そぉ?
おしまいでございます

戦国魔神
ゴーショーグン
首藤剛志

INDEX

序

果てしない宇宙に太陽系と地球が誕生して、四十六億年がたっていた。

＊

西暦一九〇八年、当時ロシアと呼ばれていたソビエトのシベリア地方、ツングスカ川流域の無人地帯に巨大な隕石らしきものが落下した。落下の振動は、九百キロ離れていた土地を走っていたシベリア鉄道の列車を急停車させた。列車の運転手が見上げた空は虹色に輝いていた。

二十年後、調査団がこの地に向かったが、隕石らしきものは何も見つけだせず、爆発のすさまじさを物語る、根こそぎなぎたおされた森と、数十個の巨大な穴が地面にあいているだけだった。

さらに、第二次大戦後の調査では、爆発の中心部に放射能が検出された。

＊

世に言うツングスカ大爆発……それは、なにかの始まりの予兆だった。

第一章
さすらいの旅立ち

二十一世紀初頭、新しい世紀を迎えた地球は、今日も蒼く美しく輝いていた。だが、一見平和にみえる地球のいたる所で、権力闘争や局地戦争は続いていた。そして、そのほとんどが、巨大な陰の組織に操られていたのだ。その名は〝ドクーガ〟――ドクーガの力は、全世界の政治・経済・宗教全て(すべ)に及び、その本部は、スイス、レマン湖湖畔のオールワールドバンクの地下にあった。が、それを知る者は僅(わず)かしかいなかった。それは、ドクーガの最大の極秘事項だったのだ。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

＊

レマン湖の水面を月が静かに照らしていた。突然その静寂を破って、尺八の音が高く、低く、流れた。けっして上手ではないが、癖のある個性的な音色だ。

心地良い夜風に金髪をなびかせながら尺八を吹きおえた、メイドインジャパンの大島紬(おおしまつむぎ)の着物を着た男は、詩を口ずさむようにつぶやいた。

「この世は不条理な美しさ、謎に包まれている。例えば、今宵(こよい)の月夜、ミステリアスなまでに美しい……尺八が良く似合う」

男の名は、レオナルド・メディチ・ブンドル。年齢は不詳。国際芸術大学にトップの成績で入学したが、大学当局と美意識の面で衝突、担当の教授に「美意識は、我の心のおもむくところにあり、凡人には到底理解できまい」との退学届を叩きつけ自主退学……以後、情報整理学の第一人者となり、短期間で陰の組織〝ドクーガ〟の軍事部門情報局長になったという、ドクーガ上層部スタッフの中での変わり種である。

レマン湖を見下ろす丘から、着物の襟を正しながら、オールワールドバンクビルの自室に戻ったブンドルは、檜の風呂に入り汗を流した後、日本の道後温泉の手拭いで作った浴衣に着換え、ソファに腰かけ、手元のタッチスイッチに触れた。耳なれた音楽が、室内に緩やかに流れた。

「『マドンナの宝石』、幼児好みの俗な曲だが、たまにはよかろう」

ブンドルはチェコスロバキア製のブランデーグラスにコニャックを注ぐと、そっと手の中で転がし、香りを楽しんだ。

「馨しきたおやかさ、酒は今宵もレミーのルイ13世……」

彼にとってルイ13世は、けっして高価な酒ではなかった。世界に数本しか残っていないコニャックの逸品を確かにブンドルは所有していたが、それを金にまかせて無駄に飲みほすような成金的行為は、ブンドルの最も嫌うところだった。

「酒はそれなりの味があれば、人並の物で良いのだ。ああ……心地良き酔いが、琥珀の宇宙へ誘ってくれる」

ブンドルは手の温もりで、最適な温度になったルイ13世を唇にすべりこませた。そして軽く溜息をつくと、壁に掛けた一枚の絵を見つめた。題名は「恋する女・作品29」……。若い女性の横顔を

描いたその絵は、ブンドルが気に入っている絵画の一つだった。ブンドルが援助しているフランスの新進画家、フランシス・ルグランの作品だが、この画家は、いつも、たった一人の女性をモデルにして絵を描き続けていた。絵の題名は決まって「恋する女」——。

ブンドルは、ルグランの才能を買った。というよりも、むしろ、絵の中の女性が気に入ったのだ。聞けば、モデルになった女性は、今、行方不明だという。おそらく、ルグランという画家は、失った恋人のイメージを今も胸の中で大きく膨ませながら創作を続けているのだ。だから、彼の絵の中の女性はいつも物悲しい表情をしている。ブンドルの力をもってすれば、その女の行方を探る事は容易だった。だが、ブンドルは知っていた。イメージの中に生きる女と、現実の女の違う事を。絵の中に生き続ける女を、今を生きる現実の女に壊されたくない。ブンドルは、ルグランという前途有望な画家のために、いや絵画「恋する女・作品29」をこの上なく愛するブンドル自身のために、モデルだった女を探そうとは思わなかった。

「その女性の名は、確かレミーとか……私の好む酒と同じ名とはな……」

ブンドルは微笑した。

その時だった。あの最も忌み嫌う警報ブザーが鳴ったのは……ブンドルの手から、グラスが落ち、床で砕け散った。

「あ……」これで一二九八個のグラスを割ってしまった。原因の全てが、警報ブザーの音色にある。評判の悪い日本の新幹線のコールサインも、このブザーのいやらしさに比べたらまだましというもの……しかし、警報ブザーの音色だけは、ドクーガ本部で全館共通……ブンドルにも替える事は許されていなかった。せめて警報ランプだけはと、ブンドルお気に入りの日本製ベークドチキンのデ

イスプレイにさせたが（これは、トウキョウのシンジュクという高層ビル街の片隅にある、コックローチ横丁という飲み屋街のベークドチキン屋の店先に吊るしてあった赤い色のディスプレイで、日本語ではチョウチンと呼ぶのだそうだ）、その赤い点滅も心臓を抉るようなおぞましい警報ブザーの音色を和らげてはくれなかった。

続いて、ドクーガのメインコンピューター、マザーの声が響いた。

「緊急事態、発生！」

マザーの声は悪くない。冷たい声だが、どんな女性もが持っている冷えた一面を表現しているようで、ブンドルには心なごむ声だった。ブンドルは警報ブザーとグラスを割った動揺を押さえてつぶやいた。

「プライベートタイムに不粋な……何事だ？」

いつもながらの冷えた声でマザーは答える。

「カットナル将軍ならびにケルナグール司令官が、真田博士誘拐に失敗。真田博士はニューエネルギーの研究書類と共に自爆しました」

カットナル将軍とケルナグール司令官は、ブンドルと共にドクーガの軍事部門を牛耳る実力者だった。しかし二人とも、ブンドルの美意識からみれば、この世に存在してはならぬ代物だった。片目で、いつもカラスを肩に止め、情緒不安定で精神安定剤を常用するカットナル――表面上はアメリカの政界の実力者で次期大統領の座を狙っているというが、ブンドルには、それが実現したら正に「アメリカの悲劇」そのものだとしか思えなかった。一方ケルナグールは、粗暴かつ愚鈍単純、暴力的手段でしか物事を解決しようとしない男――表面上は、多国籍企業、シラキーコンツェルン

翼下の全世界的外食チェーン、ケルナグール食品の社長だそうだが、食に美学を求めるブンドルにとって、インスタントな外食チェーンの食品など、ケルナグールのおぞましい顔の次にごめんこうむりたい代物だった。

その二人が、日本人の高名な物理学者、ノーベル賞を受賞した真田博士が開発中のニューエネルギーを狙い、ストックホルムのノーベル賞会場から誘拐を企て失敗したという。

「血の巡りすぎる奴と血の巡りの悪い奴、失敗は目に見えていた」

そうつぶやきながら、今のブンドルは二人の失敗を嘲笑するより、真田博士の自爆を惜しんだ。彼の情報網によれば、真田博士は人類にとってかけがえのない物理学者だった。

「それを死に至らしめるとは……やはり、この作戦は私が手を下すべきだった」

だが、真田博士の開発中のニューエネルギーの謎はまだ残っている。それが、どんなエネルギーであるかはまだ定かではなかったが……真田博士が自爆までして守ろうとしてエネルギーだ、並大抵の物ではあるまい。

「私の出番のようだな」

ブンドルはタッチスイッチに触れた。琴の音が流れた。ブンドルは部屋の一角にある緋毛氈の上に座ると、萩の茶碗で茶を点てた。流儀は裏千家……ブンドルの戦いの前の儀式であった。

＊

冷たい雨が滑走路を洗っていた。

二十世紀には民間空港だったが、今は軍事基地と化した東京・羽田飛行場に、特別機に乗った真

田博士の遺体は戻って来た。出迎える真田研究所の所員達の中に、呆然とたたずむ十歳の少年がいた。真田ケン太……真田博士の一人息子である。幼くして母に病死されたケン太にとって、父、真田博士はたった一人の身内だった。

「こんなのあり？　こんなのあり？……」

ケン太の声にならない声は、この言葉だけを繰り返していた。

所員の一人が、ケン太の肩にそっと手をやった。

「ケン太君、火葬場へいく時間だ」

その言葉に、ケン太のやり場のない怒りが爆発した。

「いやだ！　父さんの焼かれるところなんか見たくない！」

ケン太は所員の手を振り払って走った。

どこへ向かって？　分からない。これからどうなる？　分からない。ただ父の死という現実から一刻でもいい、逃げたかった。

ケン太を追おうとする所員を、別の所員が止めた。

「よせ、今はそっとしておいてあげよう」

「しかし……」

そう言いかけて所員は口をつぐみ頷いた。

そう、一人ぼっちのケン太を慰める事は、そっとしておく以外、今は誰にも出来そうになかった。

どれほど走っただろう。気が付くと、ケン太は海を見おろす公園の手摺りに、びしょ濡れでよりかかっていた。

「父さん、僕は泣かない。泣いてたまるものか」

ケン太は歯をくいしばって雨の降りやまぬ空を睨みかえした。しかし、その頬を雨とも涙ともつかぬものが止めどなく流れていた。

「風邪をひくぞ、坊や」

背後から、聞きなれぬ男の声がした。

「えっ？」

振り返るケン太の前に、傘をさしかけてくれる男がいた。

背の高いがっちりとした体格の中年男……眼鏡の奥の小さな冷たい目、そして何より異様だったのは、頭に髪の毛が一本もない事だった。

悪役のプロレスラー？　とっさの印象でそう思ったケン太だったが、すぐに、父の真田博士が持つ雰囲気と同じものを男の中に感じとった。

……この人も学者なのかな……。

男は、ボソリと口を開いた。

「真田ケン太だね？」

「おじさんは？」

「………」

眼鏡の中の小さな目が、一瞬あたりをうかがった。

「話はあとだ」

あっというまに男とケン太の回りを、色の濃いサングラスをかけ、レインコートを着た一団が取

り囲んだ。レインコートの一団が、それぞれに持つ黒い傘の輪が、しだいに狭まってくる。男は傘を閉じた。次の瞬間、いきなり乾いたマシンガンの射撃音が響いた。男の傘が火を吹いたのだ。レインコートの一団は次々に倒れていく。
「坊や、急げ！」
男は、ケン太の手を摑むと引きずるようにして走った。
「な、なにすんだよう」
男は有無を言わせず、エアカータイプのニッサン・スカイラインにケン太をぶち込むと、車を発進させた。
ケン太は、車の中で暴れまくった。
「降ろせ！　降ろしてくれ」
「静かにしていろ！」
「分かった、誘拐する気だな」
男は答えなかった。
「残念でした。僕の父さんは死んじゃったんだ。誘拐したってお金なんて出ないぞ」
そう言いながら、ケン太はふと悲しくなり、
「そうさ、僕だって死んだって構わないんだッ！　降ろせ、降ろせ！」
ケン太は、男の持つハンドルにしがみついて暴れた。
「運転の邪魔だ」
男は、ポケットからライターのような噴霧器を出し、ケン太の顔にふきかけた。

「！」

ケン太の意識は、急速に遠ざかっていった。

どれほど時間がたったのか？　ケン太は窓のないコンクリートの箱のような部屋のベッドに寝かされている自分に気付いた。

「お目ざめね、ケン太君」

ケン太のまだもうろうとした頭にも、聞きなれた声だった。(——忘れようったって忘れられるもんか。いつも勉強しなさい、勉強しなさいって僕を追いかけ回す、教育メカ——)。

壁面が自動的に開き、赤い色をした、ケン太と同じ背丈のロボットが、ボストンバッグを持って入ってきたのだ。どこか太目のウサギを思わせる非人型(ヌルヒューマン)ロボットだ。

「オバ、どうしてここに？」

オバは、OVA(オバ)型教育メカで、三年前、真田研究所で開発完成されたロボットだった。

前身がおもちゃ屋であるポピンという幼児向けロボットメーカーから、家庭教師用ロボット、商品名「ポピンズさん」として開発を依頼されたが、不景気でロボットメーカーが倒産、生産は中止され、完成品は今、ケン太の目の前にいるオバだけだった。何も今更(いまさら)、メーカーに気がねする事もあるまいと、真田博士は「ポピンズ」という名をやめ、型式名であるOVA(オバ)をそのままこのロボットの名前にしたのだった。母を幼くして失い、父は研究に没頭し、いつも孤独だったケン太にとって、オバは唯一無二の友達であり、その名の通りオバさんであり、そして何より口うるさくおっかない家庭教師だった。

オバは、ケン太の前にボストンバッグを置くと、何事もなかったようにいつもの口調で、
「着換えを持ってきましたよ」
と言い、バッグを開けて、中の物を一つ一つ取り出し始めた。
「歯ブラシ、コップ、茶碗、ケン太君愛用のポケットマイコン、シャツにパンツに……」
「ま、待ってよ。何、これ？　旅行でもしろっていうの？」
「そう、旅に出るんだ。坊や、長い長い旅にね」
壁面の扉がまた開き、さっきの男が入ってきた。
「私の名はサバラス。君の父上からもしもの時は坊やを守るようにと頼まれていた」
「父さんが？」
オバが口をはさんだ。
「そうです。サバラスさんは御主人の親友でした。ここは真田研究所の地下五百メートルの秘密基地です」
「地下基地？」
ケン太のまるで知らない事だった。真田研究所は、東京の新宿駅西口、大都会の真ん中にあるといっていい。その地下に秘密基地があるなんて……。
サバラスはケン太の気持ちを察したかのように続けた。
「真田博士と私しか知らない基地だ。さあ、君の仲間を紹介しよう」
「仲間？」
ケン太の前に、二人の若い男と、赤いセーターと白いスラックス、ハイヒールをはいた女性が現

れた。男の一人は長身、天然パーマのアメリカ人、もう一人はバランスのとれた体格の日本人だった。
「キリー・ギャグレー、北条真吾、レミー・島田」
レミーと呼ばれた女性は、にっこり笑って茶目っ気たっぷりに、ケン太にウインクをした。
ケン太は、頰が熱くなるのを感じた。なにしろ、女性にウインクされるなど、生まれて初めての経験なのだ。やたらハッピーになりそうなケン太の期待に水をさすように、日本人の青年、真吾がサバラスに言った。
「待ってくれ、こんな子供を連れて行くのか」
アメリカ人、キリーも口をとがらせ、
「そうそう。冗談じゃないぜ、子守りなんてのは」
サバラスは、低い声で、しかしキッパリと答えた。
「この作戦に参加する以上、隊長の私の命令に文句は言わさん」
「命令ねえ……」
キリーは、いきなりサバラスに敬礼をした。
「アイアイサー！　しかし隊長、ギャラの払いは毎月しっかり頼んますよ」
「契約は守る」
「なんせ、俺達、相当ヤバイ仕事やろうってのに、生命保険にも入れないんだもんね。せめて、ギャラぐらいパッチリしてくんなきゃ」
レミーが咎めるように、
「キリー、生命保険に入れたとしても、保険金の受け取り人がいるの？」

「それもそうだね。俺達にはなにもなかった。親も兄弟も、明りの点いた家も、何もなかった。フフン、また、会おうぜ」
部屋から出ていこうとするキリーに、サバラスが声をかけた。
「待ちたまえ、君達に見せたい物がある」
一同がサバラスに連れていかれたのは地下基地の研究室だった。
「真田博士が命をかけて守ろうとした物がこれだ」
サバラスが壁のスイッチを押すと、床の下から二つの大きなガラスケースが現れた。一つには何も入っていなかったが、もう一つには、奇妙な型の船のような模型が入っていた。
「見ていたまえ」
サバラスは別のスイッチを押した。
模型がテレビの走査線のような光に包まれると、次の瞬間、姿を消した。と同時に、もう一つのガラスケースの中に模型は姿を現したのだ。
「どうなってんの？　これ？」
目を丸くするケン太に、レミーが茶化して言った。
「手品大好き……」
「手品ではない。瞬間移動装置だ。真田博士の開発したニューエネルギー、ビムラーの威力で動いている。このエネルギーがあれば、地球のどんな土地へも、いやそれどころか、宇宙のどんな場所へでも一瞬のうちに現れ、攻撃することができる。使い方を誤れば恐ろしい兵器にもなる」
サバラスは続けた。

「残念ながら、まだ未完成で、長い距離の移動は無理だ。一度移動したら、十日間は動けない。無理をすると……」

サバラスがスイッチを押したとたん、ガラスケースの中の模型はバラバラに吹き飛んだ。

「ああなる……」

一同は押し黙り、重苦しい空気が流れた。それを吹き払うようにキリーが口を開いた。

「どっちにしたって、ちゃちな模型じゃねえか」

「いや本物はすでに出来ている」

「本物が？」

研究室に入ってからは、事態を把握するために一言も喋らなかった真吾が、初めて口を開いた。

サバラスは、正面の壁のボードスイッチを押した。

「この日が来るまで君達には黙っていたが……」

目の前の壁がせり上がっていった。

「これが、グッドサンダー、我々の移動基地だ」

それは、あまりに巨大だった。全長二百五十メートル、高さ六十メートル……一同は息をのむよりなかった。

だが、キリーは、息をのむとか呆然自失とか、そろってポカンと口を開いている雰囲気を嫌う男だった。「——何が起こったってビクつかねえよ——」が彼のモットーだった。たとえ、それがポーズであろうと……キリーは口笛を吹くと、

「ごたいそうなこったね。何千人乗せるつもりだい」

だが、さすがのキリーも次のサバラスの言葉には息をのんだ。
「乗員は我々五人だけだ」
息をのんだキリーの代わりに真吾が口を開いた。
「五人だけ？　たった五人で動かすっていうんですか？」
「五人で充分だ。というより、瞬間移動するためには、五人以上の人間、いや動物も含めてだが、五つ以上の生命は乗れないんだ」
一同の前に現れたグッドサンダーの内部は次々に活動を開始した。
「グッドサンダーは、コンピューター、ファザーによってパーフェクトに管理される。操縦はファザー任せでよい」
グッドサンダーの中央部に位置し、巨大なホールを思わせるファザールームの天井から、シャンデリアのように吊り下がるファザーにも無数の光がともった。
「発進準備開始、グッドサンダー発進まで一時間……」
それがファザーの第一声だった。
船体後部、エンジンルームに隣接した塔のようなエネルギー炉に、今、青白く光る気体が注入されていく。これこそ、真田博士が命をかけて守ったニューエネルギー、ビムラーだった。
「瞬間移動エネルギー、ビムラー融合開始！」
ファザーの声に答えて、炉塔の下部の青白い光がひときわ明るく輝いた。
快いエンジン音も、しだいに高まってきた。

「さあ、我々の旅が始まるぞ」
「どこへ行くの？」
今、ケン太の胸にあるのは、不安ではなく期待だった。
「あてはない。ビムラーを狙う敵、ドクーガがこの世から消える日まで、もしかしたら永久に続く旅かもしれん」
「永久？　あたし、お嫁に行けないって訳ね。どないしょ」
レミーが、たいして困った様子もなくつぶやくと、さり気なくキリーがもみ手をしながら、
「俺がお相手しましょうか？」
「タイプじゃないわ」
突然、アラームが鳴りひびき、ファザーの声がした。
「真田研究所に敵、侵入！」

真田研究所に侵入したのは、ブンドル配下のメカニック兵、スナイパー率いるコマンダー戦闘軍団だった。ドクーガの戦闘は、ほとんどロボットによって行なわれ、会話もでき指揮能力もあるスナイパーと、戦うためだけのコマンダーとに分かれていた。
コマンダー達は、次々に真田研究所の施設を破壊し、遂に地下基地への入口を発見した。

「グッドサンダー発進まで四十五分……」
ファザーはサバラスに告げた。

「地下入口が発見された以上、敵がここに来るまで二十分とかからん。オバ、坊やをグッドサンダーに」
「坊やじゃない。僕はケン太だ」
サバラスはケン太の抗議に微笑した。
「分かった、ケン太。発進するまでグッドサンダーを守ってくれ」
「OK。行こう、オバ」
ケン太はオバの前を転がるように走って、グッドサンダーの中へ入っていった。
サバラスは、真吾達三人にむきなおり言った。
「君達の腕の見せどころだな」
三人は顔を見合わせた。そしてお互い、それなりの微笑で頷きあった。
地下基地へ向かう通路に幾重にも備えつけられていた防御シャッターは、コマンダーのレーザー砲で次々に撃ち破られていった。
その様子を東京上空の司令船の中のビジョンで見つめていたブンドルは、グラスを片手につぶやいた。
「防御シャッターか。愚かな、無駄な抵抗は美しくない。日本人は、もっと潔いと聞いたがな……」
スナイパーの報告が入った。
「ブンドル様、シャッターが開いていきます」
「ほう、どうやら諦めたようだな……ん、あれは?」
ビジョンに写っている開かれていくシャッターの向こうに、三人の人影が立っていた。

真吾、キリー、レミーだ。
「初めまして、諸君」
真吾がそういい終えるか終えぬうちに、三人はコマネズミのように動きまわり、レーザー銃を乱射した。あっという間に、あたりはコマンダー達の残骸の山になっていた。
「先手必勝！」
「これおまけ……」
レミーは、手投げ弾をポイッと放った。
残骸の山はさらに倍になった。
開いていたシャッターが閉じ、三人の姿は消えた。
コマンダーの残骸の山からはい出してきたスナイパーは、何が起きたのか、まだ把握出来ないでいた。ただ呆然……それほどスピーディーな攻撃であった。
ビジョンで一部始終を見ていたブンドルの顔には微笑がもれていた。
「なかなかやるではないか。とくにあの女、女豹のような身のこなし、美しい……ん？」
ブンドルは、飲みかけたブランデーグラスを持つ手を止めた。
「似ている、あの女……」
そう、ブンドルの愛する絵画「恋する女・作品29」にあまりに似ていた。
「まさか……思いすごしだ」
気を取り直したブンドルは、スナイパーに徹底攻撃を命じた。

地下通路の戦いに終わりが近づいていた。倒されても倒されても、前進するコマンダー達に、さすがの真吾達も押され気味だった。もう、残る防御シャッターは一枚しかない。
通路のスピーカーから、サバラスの声が響いた。
「発進まで五分。真吾、退却だ」
「俺は持ちこたえてみせる。みんな先へ行ってくれ」
どうも真吾は、こういう台詞(せりふ)に酔うタイプらしい。レミーは呆れて、
「ワ〜オ、格好いい……」
サバラスの声が、また格好がよかった。
「真吾、死ぬのはまだ早い！」
「しかし……」
「命令だ」
「みんな、役者やな……さ、真吾、命令よ、命令。行こうぜ」
キリーは真吾の肩をポンと叩くと、シャッターを開け、レミーと地下基地へ飛び込んでいった。
グッドサンダーに向かって走ってくる三人にケン太が叫んだ。
「みんな早く、あと一分だよッ！」
地下基地の壁が爆破され、コマンダー達がなだれ込んで来た。
真吾一人がグッドサンダーに乗らず、銃を撃ち続けている。
「発進まで二十秒……」
「真吾、もういい、早くこい」

「よくやるよ」
「ほんと……」
キリーとレミーは肩をすくめた。
「あと十秒……九秒……」
ファザーが秒読みを始めると、グッドサンダーの搭乗口が閉じだした。
真吾は、エネルギーのきれたのを確認すると、頭から搭乗口に飛び込んだ。閉じきるのとほぼ同時だ。
「３、２、１、発進！」
侵入したコマンダー達を吹き飛ばして轟音と共にグッドサンダーは浮上を開始した。
地上までの五百メートルは巨大な空洞が開かれていた。
「地下基地上部ハッチ開放……」
空洞の天蓋が地響きをあげて開き始めた。

夜の新宿、西口中央公園のベンチは、恋人達と、それをのぞこうとするやからで鈴なりである。高層ビルが夜空に織りなす光のモニュメントは恋を語らうカップル達の舞台装置に格好だった。だが、この日、突然響きわたったサイレンは、恋人達とのぞき魔達の天国をかき乱した。そのサイレンは、来たるべき新関東大震災用の警報だった。

しかし、逃げまわる人々が目の前に見たのは、無数の光を明滅させながら、地割れの底から月を目指すように浮上していく巨大な金属の船だった。これが瞬間移動基地グッドサンダーが人々の前に姿を現した始まりだった。少なくとも東京都民の十分の一、百万人以上の人々がグッドサンダーの浮上を目撃した筈であった。だが、新聞、テレビ、ラジオ、そればかりか、ありとあらゆるマスコミ機関はこの事実を報道しなかった。ドクーガの報道管制は完璧だった。たとえ何万人が目撃したものであれ、報道されないものは事実ではない。人々はこの日の出来事を忘れようとつとめた。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

＊

上空から見降ろす夜の東京は、光の渦の絨毯だ。

「ファンタスティック、素敵じゃないこと？」
「俺達の旅立ちにしちゃ、派手な見送りだな」
などと言いながら、しっかり、レミーの肩を抱こうとするキリーの手をすり抜けて、
「ノン、ノン。派手なのは見送りだけじゃなさそうね」
「あん？」
「キリー、あれが聞こえないのか？」
真吾がマジな顔で言った。
そう言えば、どこからかワルツが聞こえてくる。
「ヨハン・シュトラウス『美しき青きドナウ』、一九六〇年代のベルリンフィル、カラヤン指揮のレコードか」
キリーが、さりげなくもわざとらしく、クラッシックに強い一面を披露して見せた。
「あ、あれっ！」
ケン太が、ビジョンを指さして叫んだ。
ビジョンに写る月の光の中に、フワッと黒い影が現れた。ジェットヘリコプターだ。ワルツを踊るように、一機、また一機、機体に派手なエレクトリックイルミネーションをつけたジェットヘリが姿を現してくる。やがてその数は百機を超えた。ジェットヘリだけではない。巨大な戦闘艦も数隻ひかえていた。そして、その背後に、飛翔する白鳥をモデルにしたとしか思えない、目だちすぎるとさえいえる白い戦艦が浮かんでいた。艦名は「スピリットオブメディチ」、ブンドル軍団の旗艦である。

「スピリットオブメディチ」の艦橋でワイン、それも一九七五年物のシャトーマルゴーを飲みながら、ブンドルはジェットヘリの踊るワルツに目を細めていた。

「美しいぞ、我がブンドル軍団。攻撃を開始せよ！」

ブンドルは傍のタッチスイッチに触れた。

夜空にショパンの「革命ポロネーズ」が響き、ジェットヘリの大編隊はグッドサンダーにおそいかかった。

戦闘に音楽を流すのは、何もブンドルの専売特許ではなかった。古来、戦場において味方を鼓舞し、敵を威圧するために音楽を流すのはもっともオーソドックスな戦法だった。

そのオーソドックスな戦法をブンドルがとるとどこか変わって見えるのは、彼の美意識のなせる業だろう。ブンドルは流す音楽の選曲に、異常なこだわりを持っていた。戦闘と音楽との調和、ミュージカル風戦闘美学。なにしろ美しくなければいけないのだ。

ある戦闘で、気をきかせた部下がワグナーの「ワールキューレ」を流したことがあった。フランシス・コッポラという二十世紀後半のアメリカ映画の監督が作った「アポカリプス・ナウ」というベトナム戦争を舞台にした映画の戦闘シーンに流された曲だが、気をきかせたつもりの部下はブンドルの激怒を買い、今は南アフリカのダイヤモンド鉱山で強制労働をさせられている。ブンドルに言わせれば、「私の戦闘は、ベトナム戦争のようにけがれた戦いではない」というわけだ。

ジェットヘリ大編隊の執拗な攻撃にも、グッドサンダーはなんら損害をこうむった様子は見えなかった。

「だからって、やられっ放しっていうの、好きじゃないなあ」

レミーが肩をすくめてつぶやいた。

「同感ですな。右のほほをぶたれたら相手の首根っこをへし折ってやれ、が俺のバイブルだからな」とキリーも言う。

「なんとかならないんですか?」

真吾がサバラスに聞いた。

「グッドサンダー、瞬間移動までコンピューター、ファザーが答えた。

「ゴーショーグン?何のことです」

サバラスはニヤリと笑って、

「君達の本当の力を必要とする時が来たようだ」

と言った。

いきなり真吾達の坐っていたイスが床の中へ吸い込まれていった。三人のイスは通路をすべり抜け、それぞれ三方向に別れ、一瞬のうちに三人三様の戦闘機のコクピットに吸いこまれていた。

「キングアロー、クイーンローズ、ジャックナイト、発進!」

ファザーの声を合図に、三機の戦闘機は夜空に解き放たれた。

キングアローに真吾――

レミーはクイーンローズ――

ジャックナイトにはキリーが――

しかし、誰もまだ操縦法を知らなかった。

とまどう三人の耳にファザーの声が聞こえた。
「今回に限り、私がオートマチックコントロールします。ゴーショーグン、Go！」
グッドサンダーの前面シャッターが割れるように開くと、高さ五十メートルを超える西洋の鎧を着た魔神のようなロボットが飛びだしてきた。
「ゴーショーグン、合身Go！」
真吾達の三機が急旋回を開始した。
「な、なんだ、あの派手なメカは……」
ブンドルが、自分の艦の派手さも忘れてつぶやいた。
「攻撃します」
部下の声に、ブンドルはかぶりをふった。
「まあ、待て。なにが起こるか、拝見しようではないか。それにしても、大袈裟な旋回……。私の編隊の飛行がワルツなら、あれはインディアンの戦いの前の踊りだな」
急旋回を終えた三機は、ゴーショーグンと呼ばれたロボットにぐんぐん接近していった。ロボットの両足につけられた扉が開き、レミーの乗ったクイーンローズは右足に、キリーのジャックナイトは左足に吸い込まれた。
真吾のキングアローは、エンジンを一杯にふかすと、ゴーショーグンの前方へ飛びだしていく。ゴーショーグンの胸が開く。キングアローは逆噴射しスピードを落とすと、追いついて来たゴーショーグンの胸にひろわれるようなかたちで吸い込まれた。この間、一分……。（合身はいいけど、こんなに時間がかかっていいのか。それに、これからどうすりゃいいんだ、いったい……）、真吾

はポッと溜息をもらした。おそらく、レミーもキリーも同じ気持ちだろう。
「真吾、目の前の青いボタンを押しなさい」
ファザーの声だ。
「ん？　これか？」
真吾はいわれるまま、青いボタンを押した。ゴーショーグンの目から凄まじい光が発射された。たちまち、前方のジェットヘリの編隊が大爆発を起こした。
ブンドル軍団は我に返ったかのようにゴーショーグンに集中攻撃を開始した。
ゴーショーグンの背後に巨大な戦闘艦が迫る。
キリーのコクピットにファザーの声が響く。
「キリー、レバーを引け！」
「こ、これか！」
キリーは、手元のレバーを力一杯引いた。
ゴーショーグンの手に剣が握られ、ふりむきざま、戦闘艦をまっ二つに切り裂いた。
「ワー、すご、わたしにもなにかやらせて……」
レミーがファザーに文句を言った。
「言うまでもありません。女性のあなたには赤いボタンを……」
「女の子だから赤か……やっぱコンピューターって考えることが単純よね」
「早く、レミー！」
「ハァーイ、ポショ！」

レミーは赤いボタンを押した。
ゴーショーグンは猛速で前進し、数隻の戦闘艦を一瞬のうちに破壊した。後は、とびかう光線と剣のきらめき、爆発また爆発……ブンドル軍団がブンドルの旗艦だけを残し全滅するまで五分とかからなかった。
「ブンドル軍団全滅……」
ブンドルの手から、チェコスロバキア製のワイングラスが落ち、床にはじけた。ブンドルの割った一二九九個目のグラスだった。
だが、ブンドルの口からもれたのはゴーショーグンへの讃美の言葉だった。
「なんというパワー……なんと美しいメカだ……敵は美しい。わたしの敵として不足はない」
ゴーショーグンがグッドサンダーの格納庫に戻ると同時に、ファザーの声が基地内に響いた。
「ゴーショーグン、セットダウン、グッドサンダー、瞬間移動！」
基地中央のビムラー炉が青白い光を放出した。次の瞬間、グッドサンダーの姿は東京上空から消えていた。
たった一艦とり残された「スピリットオブメディチ」の中で、ブンドルは燃えていた。
「立つ鳥跡を濁さず……見事だ。だが諸君の墓標はこの私が必ず立ててやる。その日を心して待つのだな……」
そして床に飛びちったグラスの破片に目をやり、(これから先、どれほどグラスを割ることになるか……強化ガラスのグラスをオーダーした方がいいかもしれぬ……)、ふと、そう考えて、あわてて かぶりをふった。

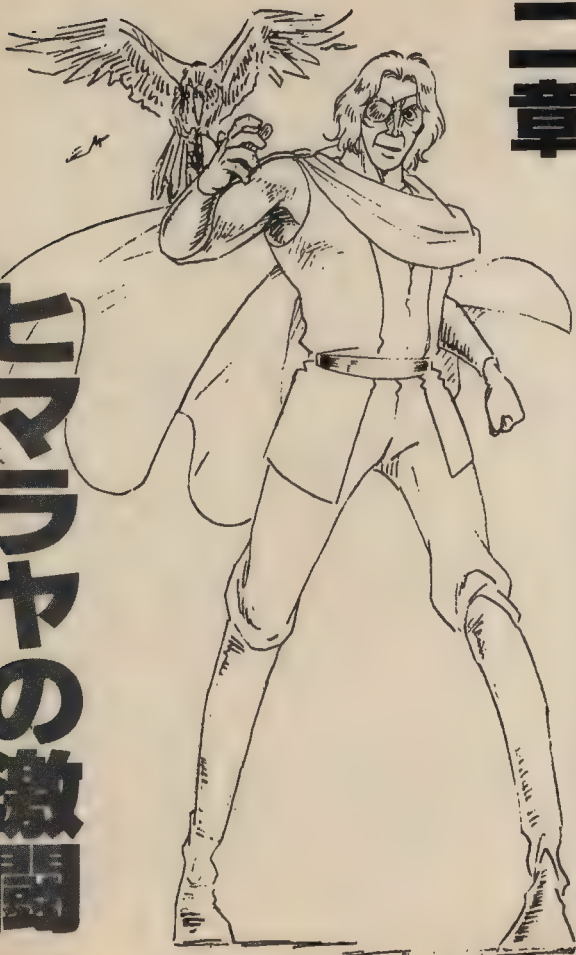
「なんと弱気な……美しくない」

自らをいましめたブンドルは、以後もチェコスロバキア製のグラスを使い続けた。だが、床の絨毯を毛先の長いニュージーランド製羊毛絨毯には替えた。グラスを落としても、これなら割れることもない。絨毯への出費はかなりのものだったが、これがブンドル流の倹約のやり方だった。

グッドサンダーの瞬間移動……それは人類が経験する最初の瞬間移動だった。それは、ケン太、真吾、レミー、キリー、サバラス、オバ、そしてゴーショーグンの果てしないさすらいの旅の始まりでもあった。

だれも、その旅の終わりの日を予想できなかった。

第二章

ヒマラヤの激闘

グッドサンダーの瞬間移動能力は、まだ完全とは言えなかった。東京から消えたグッドサンダーは、予定した移動距離一万キロの半分しか移動できず、東京から五千キロ離れたヒマラヤ山脈のチベット付近のキャニャン渓谷に姿を現した。次の移動に必要なエネルギー、ビムラーが完全融合されるまで十日間、グッドサンダー基地は身動きできないのだ。
だが、この十日間はけっして無駄ではなかった。ファイター達のメカニック操縦の訓練にその時間は費やされたという。

——ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より——

＊

グッドサンダーの指令室のビジョンに、青空を切り裂くように急上昇していく三機の戦闘機が写っている。
「格好いい。かなり性能よさそうだね」
目を輝かしてサバラスの後ろでビジョンを見つめていたケン太は、ポケットからハンディマイコンを出し、計算を始めた。
「僕の計算じゃ、マッハ12は楽に出る。限界は12・9ってとこ。単独で大気圏脱出も可能だね」

それに答えるかのように、ビジョンにGにゆがむ真吾の顔が写った。
「速度、マッハ11、12、12・9、高速リミット、訓練第一課程終了」
ケン太は満足して頷いた。
「ウン、僕の計算通り、正解!」
と、そのえり首を、オバのマジックハンドがしっかりとつかんだ。
「ケン太君も訓練開始。お勉強の時間です」
「エーッ? 僕、もっと見ていたいよう」
「いけません。勉強は規則正しく、なにしろ三年間で世界中の言葉を話せるようになっていただくんですからね」
「ギョッ!? 世界中の言葉? 僕、日本の国語だって苦手なのにィ」
ケン太は口をとんがらかして抗議した。
だが、相手は鉄の女性である。そんな抗議にはビクともしない。
「だから勉強するんです。これはご主人様の遺言ですからね」
「チェッ、なにかというと父さんの名前だしてさ……教育おばちゃん、こわ～い」
「ちゃんはいりません。わたしは、O・V・A、オバです」
「じゃあ、オバ……さま、許して」
ケン太は大袈裟にオバを拝んでみせた。
「問答無用、勉強です」
オバは、マジックハンドでケン太のえり首をつまみあげると、勉強部屋へひきずっていった。

オバは、我が子の勉強に夢中になる並の人間の教育ママ以上に、ケン太への教育に使命感を持った鉄の女性だった。

＊

その頃、スイスのオールワールドバンク本店の地下、ドクーガ本部では、グッドサンダーとゴーショーグンの戦力分析を始めていた。

「瞬間移動か……おもしろいではないか」

広大な地下ホールの中央に坐った黒い影が、ブンドル、カットナル、ケルナグールを見すえて言った。影の表情はブンドル達からは定かではない。その影こそ、ドクーガ皇帝ネオネロスだった。ドクーガ内部でも、この皇帝の素性を知る者はいなかった。ブンドルの情報網ですら、ネオネロスの過去を知ることはできなかった。もっとも、ブンドル達にとって、ネオネロスがどんな人物であるかなどということはどうでもいい問題だった。ブンドルにしろカットナルにしろ、ケルナグールにしても、それぞれの目的、それぞれの世界のためにドクーガに所属しているのであって、いどこちがいいからドクーガにいる程度にしか考えていなかった。ドクーガの皇帝になり代わって世界を支配しようなどという俗な野心を、三人は持っていなかった。ブンドルは、自らの美的世界の完成。カットナルは選挙に勝ってアメリカ大統領になりたいだけの事で、それ以上は望まなかった。ケルナグールは自分が社長である外食産業を守り育てる事。そして、なにより三人共通の喜びといえる、男の血を熱くする戦闘がドクーガにはあった。

ネオネロスも、そんな彼らの性格を知るからこそ、誰よりも三人を寵愛し、身近に置いていた

のかも知れなかった。
ビジョンにゴーショーグンとブンドル軍団の戦いが写しだされた。コンピューター、マザーが分析の結果を告げた。
「資料不足です。あのロボットのパワーは、まだ計算できません」
「わたしにおまかせあれ」
薄汚れた白衣を着て、無精ひげをはやした貧相な男が入って来た。
「ジッター博士か……」
ジッター博士は、瞬間移動を可能にした真田博士と、国際科学大学の同期生だった。首席だった真田博士の後塵を拝して、いつもナンバー2の座……真田博士に異常なほどのライバル意識を持っていた。真田博士が死んだ今、自分こそナンバー1の科学者であるという自負があった。しかし、真田博士の遺産ともいえる瞬間移動基地とロボットがあるという事実に、ジッター博士は燃えた。真田博士以上のメカを作りだした時、初めて名実ともにナンバー1の学者といえる。ジッター博士は、ゼニガスキー・ジッターというその名の通り、金銭面にうるさい男だったが、今回だけは採算を度外視しても真田博士をしのぐメカを作りだす決意をしていた。
「それが科学者としての私の悲しい宿命でございます」
フケを飛ばし、頭をかきむしりながら、研究に没頭する彼の後ろ姿には、一抹のペーソスさえ感じられた。そのジッター博士が皇帝とブンドル達に披露したのは、巨大な体にメーターや計器がぎっしり装着されているロボットだった。
「月面にあります私の秘密研究所で開発したテスターロボでございます。このメカは敵の戦力、パ

ワーを調べるために作られたものでございます」
「うむ、真田博士のロボットとの出会いが楽しみだな。製作費はお前の口座に振り込んでおこう。よいな、カットナル」
皇帝のこの一言で、次の作戦はカットナルが指揮することになり、ジッター博士への支払いはカットナルに義務づけられることになるのだ。カットナルは不満を表情に出さぬよう必死になりながら言った。
「しかしながら、敵の居所が分からなくてはどうしようもありません」
ブンドルがカットナルの腹を見すかしたように、ニヤリと笑って言った。
「それなら簡単だ。私の情報網を駆使すれば発見までにたいした時間はかからぬ」
（……余計な事を……）
歯ぎしりするカットナルに、ネオネロスがすごみのある低い声で言った。
「うむ、その件は瞬間移動基地の発見を待つことにしよう。やらねばならぬドクーガの作戦はまだ山ほどあるからな」
（出費がかさむ以上、ここらでひともうけしておかねば……）と、カットナルが進み出た。
「ネオネロス様、私の地球洪水作戦をおとりあげ下さい」
「洪水作戦？」
「はい、今年の地球の農作物は世界的な大豊作が予想されます」
マザーがカットナルを補足して言った。
「農作物の値下がりで予想されるドクーガ農作物シンジケートの損害、二兆ドル……」

「二兆ドル……」

皇帝がうなるようにつぶやいた。

「御心配めされるな。世界中に点在する巨大無人ダムを次々に破壊すれば、洪水が起こり、農作物はたちまちのうちに押し流され、世界的大豊作から一転して大凶作になりましょう」

マザーが予想計算の結果を告げた。

「農作物の値上がりでドクーガ農作物シンジケートの利益……九兆ドル……」

皇帝はためらわず作戦遂行をカットナルに命じた。

＊

この洪水作戦の破壊目標のダムの一つに、ヒマラヤ山脈のキャニャンダムもふくまれていた。こうして、誰も意図せぬうちにグッドサンダーとドクーガの第二の戦いが始まろうとしていた。それはグッドサンダーがヒマラヤ山脈に姿を現して九日目のことだった。

——ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より——

＊

訓練を続ける真吾達は、眼下に広がる巨大なダムに目を見張った。
「ほう、えらくどでかいダムだな」
口笛を吹きつぶやく真吾にビジョンの中のサバラスが注意した。
「キャニャン無人ダムだ。人がいないといって余り近づくな。誰の目が光っているか分からないからな」
「了解」と真吾は答えた。
「よし、諸君、トライスリーの訓練を開始する」とサバラスが言った。
「トライスリー？　なんのことだ？」とキリーが訊いた。
「君達のメカは合体して新しいメカ、トライスリーになる。レミー、君の声がキイボイスだ」と、サバラスが説明する。
「え〜っ？　わたしがしかけて、あの二人とくっつくの？」とレミーが目を丸くして叫んだ。
「女性上位、ウーマンパワーか……」とキリーが嘆いた。
「言えてる！」、すかさず真吾が同調する。
「わっ、失礼ね。わたし、こう見えてもおしとやかな女の子なのよ」、レミーが黄色い声を張り上げた。
「どこがおしとやかなの？……」とキリーがことさら真面目な顔をしてまぜっかえす。
「わ、傷つけたな」とレミーが眉をつりあげた。
「キリー、言いすぎだぞ。レミーはいちおう嫁入り前の娘だぞ」と真吾がキリーをたしなめる。
「いちおうとはなによ」とレミーがくってかかった。

「いや、あの、俺、レミーをなぐさめようと思って」、レミーの剣幕に真吾はしどろもどろになる。
「なぐさめる？　どういう事よ」、レミーがさらに勢いづく。
「真吾、お前の方がよっぽどレミーを傷つけとるよ」としたり顔でキリーが相槌を打った。
「いや、俺、そんな気は……」と口ごもりながら鋒先が自分に向けられてきたので、真吾はあわてた。
「あ〜ん、こんな連中とくっつくなんて、あたし、ますます趣味じゃないなあ」、レミーはさもうんざりしたという口調をこしらえながら言った。
「みんな、口数が多いぞ。レミー、わしは君を女と見てはいない。君はグッドサンダーのファイターだ」とビジョンの中のサバラスがいかめしい顔つきで言った。
「OK、アイシー。でも、なんか傷つく言い方よね、今のも……しゃあない、トライスリー、心ならずもドッキング！」と上目でサバラスを睨みながらレミーが叫んだ。
「ちょっと待ってよ。ドッキングもいいけど、その前に話し合いたいことがある」とキリーが珍しく深刻ぶった顔をして言った。
「なんのこっちゃ」とレミーがすっとんきょうな声をあげた。
「ちょっと、ストーリーから離れて話をしたいんだ」とキリーが繰り返した。
「ん？　OK、タンマね。ドッキング前に、ちょっと話合いだ」と真吾が鷹揚に頷いた。

＊

○休憩――。

ストーリーから離れてシナリオ風に、彼らの話を再録してみました。（著者注）

キリー「要するに、俺達の台詞があって『……』と誰々が言ったとかどうしたって書いてあるでしょ。ここ二ページほど、みんなこの調子だぜ」
真吾「だけど、それを書かないと、誰が言ったか分からないじゃないか。これはテレビでもなきゃラジオでもない。活字の小説なんだから」
キリー「それを分からせるのが作者の腕でしょうが」
レミー（ピシリと冷たく）「その腕がないのよ」
真吾「だけど今さら、作者を替えろとも言えないだろ」
レミー「でも、このまま、私達のアホなかけあいを書くのに、いちいち誰々が言った、誰々がどうしたじゃ、まだるっこしくてたまらないわ」
　なぜかブンドル達が登場——
ブンドル「それは言える」
キリー「あ、あんた、どうしてここへ」
ブンドル「こういう問題は、超党派で考えなければな」
カットナル「言える」
ケルナグール「ほんと、問題じゃぞい」
レミー「わたしの台詞って分かりやすいでしょ、女の子だから」
真吾「いや、言っちゃ悪いけれど、レミーの女っぽい台詞なんて、めったにお目にかからないぞ」

キリー「そう、レミーが女の子ですって台詞を言うのは、よっぽどぶりっ子してる時ですな」
レミー「失礼ね！　でも、言えてるだけにつらい」
ブンドル「誰が言っているか明解にせねばならぬ。わたしの美しい台詞を、このおぞましき二大怪物の台詞と勘違いされるのは、痛恨のきわみ」
ケルナグール「たまにはそれもいいかもなと思う時もあるぞい」
カットナル「わしとて、背筋も凍るキザな台詞をわしがしゃべったなどと思われたくはないわ」
ブンドル「黙れ、無神経動物は」
カットナル「口を出すな」
ケルナグール「ググググ……」
レミー「要するにですよ。誰がどの台詞をしゃべったか分かればいい訳よね」
キリー「そう言うこと」
レミー「簡単じゃない。自分の台詞の上にマークをつければいいじゃない。トレードマークをね」
キリー「レミー、さえてる」
レミー「サンクス、フレンズ」
真吾「で、どんなマークにするんだい？」
レミー「わたしは、かわいくネコマーク」
ブンドル「バラしかないな」
ケルナグール「わしゃ、フライドチキンじゃ」
キリー「俺は、フフフ、ウルフ、狼ってとこかな」

カットナル「当然カラス　だ」
レミー「真吾はどうするの？」
真吾「う、う〜ん……」
キリー「こいつ個性にとぼしい熱血坊やでしょ、トレードマークがないんじゃない？」
真吾「うるさい。俺は日本人だぞ」
キリー「じゃ、フジヤマか　」
真吾「銭湯の書き割りじゃあるまいし……そうだ。日本のシンボル、タンチョウヅルにしよう
　」
レミー「日本航空？」
キリー「こいつ、ゴーショーグンに合身する時、逆噴射するでしょ。似合いかもね」
真吾「止めた、ツルは……ん？　そうだ。いいのがあった。桜ですよ、桜……この桜吹雪が目に入らねえか……遠山の金さん、これいこう　」
ブンドル「ウウ……この男にはセンスというものがあるのか」
レミー「好きに乗せときましょう。で、隊長はどうします？」
サバラス「わたしは遠慮しておこう」
レミー「どうして？」
キリー「遠慮したい気持ち分かるぜ」
真吾「隊長のトレードマークって言えば……　」
レミー（頷いて）「そっとしときましょう」

こうして、それぞれのマークが決まりました。
真吾――
レミー――
キリー――
ブンドル――
カットナル――
ケルナグール――
ただし、このマークはポンポン飛びかうかけあいの台詞の時だけに使われます。（著者注）

*

「トライスリー、心ならずもドッキング！」
レミーの声に呼応して、キングアロー、クイーンローズ、ジャックナイトは変形し、ドッキングして、高さ二十メートルほどの中型のロボットになった。
「トライスリー、ドッキング完了」
「レミー、真吾、レーダーに正体不明の飛行物体が十数機」
「なに？　ビジョン、オン！」
真吾の目の前のビジョンに、ミサイルが写しだされた。ファザーの声が、ミサイルの型式を告げた。

「ドクーガ中距離ミサイル、目標はキャニャンダム……」
❀「ダムなんか攻撃してどうするつもりだ？」
ビジョンにサバラスが写った。
「おそらくダムを破壊して洪水を起こすつもりだろう。キャニャン川の河口は世界有数の農作物地帯だ」
🐺「ドクーガのやりそうなこったぜ」
❀「河口の人達はどうなる？」
ファザーが答えた。
「ほとんど全滅……助からないでしょう」
❀「レミー、ミサイルを落とそう」
「ミサイルに手を出すな。我々の位置が敵に知れる」、サバラスはきっぱりと言った。
❀「このまま河口の人達を見殺しにしろというのか？」
「秘密を守るためだ、仕方がない」
❀「瞬間移動装置が人の命より大切だっていうのか？」
サバラスは黙って何も答えなかった。
🐺「どうやら、そうらしいぜ。ま、戦わないですむんなら、それにこしたことはないな」
キリーが投げやりな口調で言った。
❀「隊長、ミサイルを攻撃させて下さい」
「わしの命令を守れ」

「とおっしゃっております」
キリーはしらけきっていた。
その時、黙っていたレミーがにっこり笑って口を開いた。
「隊長、トライスリーはわたしの声で動くのよね」
「レミー、命令だ。何もするな」
「隊長、わたしやっぱり女なの。それも割と心やさしい部類のね。河口の人達を見殺しにできないわ」
「レミー！」
明るい真吾の声が響いた。
「やれやれですな」
もとよりキリーもその気だった。
「隊長、おしおきは後でゆっくり……トライスリー、攻撃開始！」
トライスリーは、キャニャンダムめがけて飛来するミサイルを次々に撃ち落としていった。
だが、この知らせはただちにドクーガ本部に届いた。ホールのビジョンは、戦うトライスリーの姿を、克明に写しだした。皇帝はカットナルにテスターロボの出撃と指揮を命じた。
ダムに飛来するミサイルの数はあまりに多すぎた。トライスリーの懸命な攻撃にもかかわらず、破壊から逃れた三基のミサイルが、今、まさにダムを直撃しようとしていた。
「しまった。間に合わない！」
「合うか合わぬか、やるよりないわ。トライスリー、Go！」

「よせッ！」
物に動じない筈のキリーが、このときばかりは悲鳴に近い声をもらした。聞く耳もたずといった感じで、トライスリーはダムとミサイルの間に突っ込んだ。トライスリーは自らを盾にしたのだ。三基のミサイルをもろに食らったトライスリーは、その反動で谷底に叩きつけられた。だが、外見はそれほど損害を受けたとは思えなかった。ミサイル爆発の煙が晴れると、そこに無傷のダムがそそり立っていた。
「ダムは助けたわ」
「レミー、ガッツだ」
「女の運転はこわい」
レミーはにっこり笑って、
「ありがとう。ほめてくれて……」
「レレレ……」
「元の機体にセパレートするわ。トライスリー、分離開始！」
レミーの声で、トライスリーは三機の戦闘機に戻る筈だった。
「ちょっと、やだ！」
「どうした？　レミー」
「分離できない！　今の爆発で、どこかが故障したんだわ」
「なに？」
キリーは肩をすくめた。

「やれやれ、これだもの」
だが、あきれている暇はなかった。
背後から新たなミサイル攻撃が始まったのだ。体勢をたてなおすのに必死になるトライスリーの前に、ゆうに倍の大きさはあるテスターロボと、実用一点張りの無骨なスタイルのカットナル旗艦「ファントムオブクロウ」が姿を現したのだ。

「お前達の実力、とことん調べさせてもらうぞ。テスターロボ、サーチ攻撃を開始せよ」
旗艦の艦橋にいるカットナルの指令をうけ、テスターロボはレーザーを発射した。攻撃による敵の反応でその実力を測ろうというのだ。しかし、実力を測るもなにも、見た目の大きさで、すでにトライスリーに勝ち目があるとは思えなかった。
「レミー、キリー、グッドサンダーに戻ろう」
「了解！」
勝算のない喧嘩に熱くなるほど、三人はケンカの素人ではない。その時、トライスリーのビジョンにサバラスが写った。
「トライスリー、帰還を禁ずる」
「なに？」
「今、グッドサンダーの位置を敵に知らせる訳にはいかん。グッドサンダーが移動可能になるまで、あと三十二時間だ。今後の通信も禁止する」
「グッドサンダーのためにいけにえになれというのか？」

「君達のまいた種だ。自分で刈りとれ」

――そういうことなら――

真吾はビジョンの中のサバラスに吐き捨てるように言った。

「邪魔だ。あんたがそこに写っていると前が見えないんだよ」

冷えた微笑を残してサバラスの姿はビジョンから消えた。

テスターロボの攻撃につぐ攻撃が続いた。そのたびにテスターロボの調査機能がトライスリーの実力を調べ、カットナルの旗艦ではサーチャーコンピューターがテスターロボの調査結果を報告していた。

「敵メカ分析、パート1、敵は三つのメカの合体ロボット、速度マッハ10、戦闘能力Aクラス、テスターロボによる破壊可能」

一瞬のうちにトライスリーの透視図が、ビジョンに写しだされた。

「よし、テスターロボ、サーチ攻撃はもういい、ただちに敵メカを叩きつぶせ」

テスターロボの攻撃はさらに激しさを増した。

「こうなりゃ逃げの一手だな」

「男の子の誘いから逃げるのは上手(うま)いんだけど」

「冗談いってる場合か」

「いや、冗談いえるだけ頼もしいぜ」

レミーは巧みにトライスリーを操り、テスターロボの攻撃をかわしていった。

「うまい！　レミー、俺のデートの誘いは逃げるなよ」

「考えとくわ」

「お前ら、真面目にやれ」

「真吾、今の状態真面目に考えたら、怖くて失神しちゃうわ」

「失神するたまかよ。せいぜい、おもらしってとこだぜ」

「失礼ね。おむつは保育園でグッバイしたわ」

「へえ、保育園、随分長い間おむつしてたんだな」

レミーは、自分の言葉に頰を赤らめた。

「変な事言わせないで、キリー。あなたのせいよ」

「レミーのおむつ姿、一度、おがみたいもんだぜ」

突然背後からミサイルがぶちあたり、トライスリーは岩盤に叩きつけられた。

「ワーッ!!」

カットナルの旗艦も攻撃を開始したのだ。

「チッ！　動きがにぶい。せめて三つに分解出来れば、素早く逃げられるのに……」

「故障の部分さえ分かれば……」

「あてにならん事は考えるな。疲れるだけだ」

＊

その頃、コンピューターに囲まれた勉強部屋でケン太は、オパに英語をおそわっていた。オパはタイプを叩き、流暢な発音で英文を読んでいる。

「Tomorrow is another day. 明日は明日の風が吹く」
「だめだ、そんなこっちゃ。このままじゃ、トライスリーはだめになっちゃう」
ケン太が思わず叫んだ。ケン太は机の下でこっそりとポケットマイコンを操ってトライスリーの能力を計算していたのだ。
「こら、ケン太君、今は英語の時間ですよ」
「オバ、そんな場合じゃないよ。トライスリーを助けなけりゃ」
「子供は大人の喧嘩に口を出しちゃいけません」
「大人の喧嘩じゃないよ。これはメカの喧嘩だ。メカは僕の友達だよ。オバだって僕の友達だろ？」
「ケン太君」
「僕なら、トライスリーの故障の原因が分かるかもしれない。ねえ、僕をファザーに会わせて！」
ケン太の目は真剣であった。
「ケン太君……」
「ファザーに会わせてあげたまえ」
サバラスが部屋に入ってきて言った。
「隊長！　でも……」
「ケン太は、真田博士の教育のおかげで、コンピューターを手足のように操れると聞いている」
「操るんじゃないよ。コンピューターは僕の友達なんだ」
「友達か……」

「大人と違って子供の柔らかな頭脳は、コンピューターの考え方を簡単にのみ込めるんです」
オバが子供の持つコンピューターへの順応性をサバラスに語った。
「うん、それならケン太、君に友達を紹介しよう」
「友達？」
「ジェッターエースだ」
オートコントロールされた、スクーターのような乗り物が部屋に入って来た。
「わッ!?　これ僕に？」
「君のマイコンと連動して思いのままに動かすことができる筈だ」
「マイコンと連動か……」
ケン太はマイコンのコードをジェッターエースに差し込んだ。
「これでいいのかな」
ケン太がマイコンのボタンを押すと、ジェッターエースのヘッドライトがついた。
「本当だ、格好いい」
「それに乗って中枢ルームへ行きたまえ。ファザーが待っている」
「ＯＫ！」
ケン太はジェッターエースに乗ると、マイコンのボタンを押した。ジェッターエースは軽いエンジン音を響かせ走り出した。ケン太を乗せたジェッターエースは、グッドサンダーの巨大なメカ部を走り抜け、ファザーコンピュータールームへ入っていった。
「初めまして、ケン太君」

巨大なシャンデリアのようなファザーが、きらめきながらケン太に話しかけた。
「君がファザー？」
「そう、私がグッドサンダーの全てを動かすコンピューター、ファザーです」
「トライスリーの故障の原因、分からないの？」
「残念ながら分からない。レミー・島田があんな無茶な操縦をする女性だとは思わなかった。人間は分かりにくい動物だ。普通なら故障する筈ないのだが……」
「OK、トライスリーの資料コンピューターを僕のマイコンと接続して僕が調べてみるよ」

*

サバラスはグッドサンダー司令室で時計をにらみ続けていた。デジタルクロックは瞬間移動可能まで二十四時間を指していた。

*

六時間が経過した。巨大なファザーのビジョンが数式を打ち出している。ケン太は素早い指の動きでマイコンを操り続けていた。だが、トライスリーの損傷部分はまだ見つからない。

*

さらに六時間が経過——
損傷を受け続けるトライスリーの中で、真吾達には先刻までの余裕はまるでなかった。トライス

リーは、攻撃に対するファイター達の反射神経だけでかろうじてもちこたえているといえた。だが、それにもやがて限界がくるのは目にみえていた。

＊

司令室の時計は移動可能まで五時間を指した。
マイコンを必死に操っていたケン太は、フーッと息を吐いた。
「BAXW9214、部品CQ8821……LST回路……接触不良、どう、ファザー？」
ビジョンに部品が写った。
「なるほど……そうか、この部品だね……ありがとう、ケン太君」
ケン太の前のボードにマッチ箱より小さな部品が現れた。
「早く直しにいこう」
コンピュータールームのビジョンにサバラスが写った。
「移動可能まで後五時間……それまで待つしかない」
「そんな事してたら、トライスリーは再起不能になっちゃうよ。ジェッターエース、Go！」
ケン太はジェッターに飛び乗るとグッドサンダーの搭乗口へ向かった。
「ケン太、よせ！　勝手は許さんぞ……」
サバラスの静止も耳にはいらない。
「どうにも止まらないよ」
「搭乗口を閉めろ。ケン太を出すな」

搭乗口のシャッターが閉じていった。ケン太はボタンを押した。
ジェッターエースからレーザーが撃たれ、シャッターに穴があき、そのすき間からケン太を乗せたジェッターエースが飛び出していった。

*

トライスリーは断末魔の状態であった。
🌸「こりゃ、もうダメだな」
🐈「命あってのものだねだ」
🐱「こうなったら脱出しかないわね」
「OK、それを待ってた」
三人は脱出レバーを握った。
「脱出！」
三人の体がコクピットからポーンと飛び出した。猛攻を受けるトライスリーから、三人は一目散で逃げ出し、岩陰に飛び込んだ。
レミーの悲鳴に近い声に、彼女が指さす方向を見た真吾は目を疑った。ジェッターエースに乗ったケン太がトライスリーに向かっていくのだ。
「ケン太！」
テスターロボの光線がケン太を襲う。
真吾は岩陰から身を躍らすと、ケン太に体当たりしてケン太をレミー達のいる岩陰にひきずり込

んだ。

「バカ！　なんでこんなところに」

「トライスリーを助けるんだ」

「無駄さ、あの有様だ」

ボカボカとミサイルを撃ち込まれるトライスリーは身動きひとつしない。

ケン太は部品を三人に見せた。

「これを差し込めば故障は直るんだ」

「坊や、どうやってあそこに近づくっていうの？」

「僕が行く」

「お前は死ぬには早すぎる年だぜ」

「トライスリーを見すてろっていうの？　かわいそうじゃないか」

「かわいそう？　トライスリーはメカだ、生き物じゃないんだよ」

「メカは友達だよ。みんな、人間は見殺しにできないけれど、メカは見殺しにしていいっていうの」

ケン太のすがるようなまなざしに、三人は困惑して互いの顔をみつめあった。

「トライスリー、待っていろ！」

じれたようにケン太はジェッターエースに乗り、走り出した。

「ケン太！……おい、子供に行かせるのか？」

真吾はレミーとキリーにそう叫んでケン太の後を追った。

「付き合いきれないぜ、神風さん達にゃ」
「ホント、でも行きましょ」
頷きあったレミーとキリーは、銃を撃ちながらケン太と真吾の後を追った。
雨霰の攻撃をかわしながら、トライスリーのコクピットに四人はかろうじて飛び込んだ。
ケン太はコクピットのパネルを開き、電動ペンチで手際よく部品を取り替えた。そのあまりの手際良さに、真吾達はただ呆然と見つめるよりなかった。
「これでOK、良かったね、トライスリー。レミーさん、分離出来るよ」
「わかったわ、チビ先生!」
三人は、それぞれのコクピットに素早く座った。
「トライスリー、分離開始!」
トライスリーは、レミーの声と共に急上昇して一瞬のうちに分離した。
「やったね!」
レミーが指をパチンと鳴らした。
「バッチリでしょ!」
ケン太が得意気に叫んだ。
「末恐ろしいガキだ」
「言葉無しさ、今日のところはね」

＊

グッドサンダーの司令室の時計が、移動可能まで・時間を示した。
「よし、ゴーショーグン！　セットアップ」
サバラスは低く落ちついた声でファザーに命じた。
グッドサンダーからゴーショーグンが飛び出してくる。
真吾達の戦闘機がぐんぐん接近していく。
❀「ゴーショーグン、Go！」
真吾の声をカットナルのテスターロボの集音マイクがとらえた。
♠「ゴーショーグン？　あのロボットはゴーショーグンと言うのか」
カットナルのつぶやきが終わらぬうちに、真吾達を収納したゴーショーグンは剣でテスターロボを叩き壊していた。
♠「な、なんと……」
ゴーショーグンのあまりのパワーに、カットナルの旗艦は退却するより他に手はなかった。

＊

ドクーガ司令部のビジョンに、瞬間移動して消えていくグッドサンダーが写っていた。
皇帝は敗退したカットナルに聞いた。
「テスターロボによる敵メカの性能はどうだった？」
マザーがカットナルを代弁した。
「テスターロボでは測り知れない、より強大なメカが必要……」

「分かったのは、敵のメカの名がゴーショーグンということだけでございました」
カットナルの肩が悔しさに震えていた。
「よい。ゴーショーグン、測り知れない敵か……フフフ……面白い……面白くなってきたではないか、フハハハ……」
ネオネロスの笑い声が暗い司令部ホールに響いた。

第三章 地獄のファンタジーランド

ヒマラヤ、キャニャン渓谷における偶発的ともいえる戦闘で、キャニャンダムの破壊は一時的には回避された。だが、結局七日後、ドクーガによるヒマラヤ地区洪水作戦は決行され、河口の穀倉地帯は全滅、洪水による死者は、詳細は不明だが、百万を超えるとさえいわれている。穀類の全世界的値上がりは平均十五パーセントを超え、にもかかわらず、価格据え置きを断行したケルナグール外食チェーンは、その売り上げを八十パーセント増の引き上げに成功した。

その後もグッドサンダーとドクーガの戦闘は世界各地で展開されたが、ドクーガの損害は微々たるものであり、管制を受けているマスコミは一切その事実を報道しなかった。

〈北条真吾氏談――この頃は、世界中を逃げ回るのに精一杯で、とても戦うなんて状況じゃなかったね。だいいち、エネルギー節約のため、ゴーショーグンはめったに使われなかったんだ。なにしろ、セコいったらないんだよ。オートマチックで操縦できる筈のゴーショーグンをリーダーの僕が運転するのだって、オートマチックはエネルギー消費が激しいから出来るだけ人間の力で済ませようっていうのが理由だからね。もっとも、半年も過ぎた頃には、僕の運転の方がオートマチックよりはるかにいい動きをしていたみたいだね。人間の勘に頼った攻撃っていうのは、メカのプログラムによる攻撃よりはるかに意外性があるでしょう。うん、ファザーもそこんとこ分かっていて、僕らの攻撃から、逆に何かを学習しようとしている節があったよね。ま、どっちにしろ、この頃、一番活躍していたのは、省エネメカ、トライスリーのリーダーシップを握っていたレミーだよな。レミーの操縦?……ま、ものが丈夫なトライスリーだ

からいいもののね、女の子の運転する並の車には二度と乗るまいと思っていますよ。――〉
〈レミー・島田氏談――真吾って人は、女に対してどこか偏見みたいなものがあるのよね。あの人の女性に対するロマンチシズムは大いに認めるけど……私、乗り物に関する限り、スペースシャトルから男……いえ、あの、自転車まで乗りこなす自信ありますもの。二十一世紀は女性の時代だってことお忘れなく。……でも、最初の頃って、確かに私の仕事、他の二人に比べてハードで忙しかったみたい。――〉
〈キリー・ギャグレー氏談――俺には何もなかった。真吾やレミーのおつきあいで、言われるままにレバーを操っていただけさ。ただ、あの〝メカは友達坊や〟にはまいったね。一応、グッドサンダーの旅って危険なんだよね。それにガキを連れて行くっていうサバラスおやじのさ、神経、疑いたいし、第一、俺は過保護に育てられたガキって好きじゃないんだよ。それをまあ、真吾やレミーの奴、ケン太が子供だって事でチヤホヤするしね。教育上、問題ありじゃないかなんて、最初の頃は思っていたよな。――〉

確かに「メカは友達」が口ぐせのケン太という少年の存在は、グッドサンダーのメンバーにとって、最初は頭痛の種だったようである。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

グッドサンダーの旅が始まって半年が過ぎていた。十八回目の瞬間移動を終えたグッドサンダー基地は、アメリカ、フロリダ半島の湿地帯に姿を現した。

＊

ケン太の勉強部屋で、オバは今日もケン太の教育に余念がなかった。
「新しい土地に来たら、新しい事を覚えましょう。フロリダ半島は世界最大の湿地帯……水と泥の世界です」
ケン太は勉強に辟易しながら、本を棒読みした。
「人間にとってなんの役にもたたない所だ。……そうですね、つまんない所……」
「でも地球は狭い。人間にとって、遊ばせておく土地はありません。最近、このフロリダ半島も開発が進み、一大レジャー地帯に変わりつつあります」
ケン太は完全にダレていた。オバは、ビジョンにフロリダレジャー地帯の写真を写しながら続けた。
「海岸には、南国ムードを高める海水浴場とホテル街……そして子供の夢をかなえる世界最大の遊園地ファンタジーランド……」
「ファンタジーランド？」
ケン太の目が輝いた。ディズニーランドそこのけの遊園地がビジョンに写った。童話の城がひと

きわ目立ってそそり立っている。
「行きたい！　オバ、行きたいよ！　連れてって！」
「えっ？　でも私一人では決められません」
「分かったよ。隊長に決めてもらうから」
ケン太はビジョンの写真をコピーすると、部屋から飛び出していった。

グッドサンダーのリビングエリアで、デッキチェアに坐って、真吾達とサバラスは太陽灯にあたりながらくつろいでいた。リビングエリアはアルプスのリゾート地を模して造られてあり、壁と天井にはアルプスの山々と青い空が立体映像で写しだされ、雰囲気をもり上げていた。瞬間移動する際に五人しか乗船できないグッドサンダーに、なぜこんなに大袈裟なリビングエリアがあるのか？……そればかりではない。使われずにいる五十を超える個室にしろ、大規模な厨房室、その他の施設にしろ、グッドサンダーの内部は豪華な客船を思わせ、百人を優に超す人間を乗せるための船として作られたのは、誰の目にも明らかだった。いったいどうして、これほどの設備を必要としたのか、真吾達は当然、それを疑問に思ったが、サバラスもファザーも答えてはくれなかった。
――まっ、いいさ。俺達は雇われファイターだからな。知らなくていいんなら知る必要もないさ。――
そこらの割り切りは早い三人である。深く問いただす気は持ち合わせていなかった。
「隊長！」
リビングエリアにケン太が駈け込んできて、サバラスにファンタジーランドの写真のコピーを突

き出した。
「ファンタジーランドか」
「うん、大人も子供も楽しめる、一度は行きたいファンタジーランド」
「ファンタジーランドか、私も子供の頃、憧れたものだったわ」
レミーがコピーをのぞき込んで言った。
「うん、俺も一度は行ってみたかったよな。でも、場所が遠いアメリカじゃあな」
昔を懐しむように真吾が続けた。
「そのアメリカに僕らいるんだよ。しかも、ファンタジーランドのすぐ傍にさ」
夢中に話すケン太に水を差すように、キリーが言った。
「くだらん。所詮、子供相手の金もうけさ……ファンタジーランドなんてな」
「冷えた事、言ってくれるわね」
「それが現実さ。第一、俺達は観光旅行してる訳じゃないんだぜ」
「そういう事だ」
サバラスがケン太の肩に手をやり、言った。真吾も同調し、
「そういう事、……がまんしろ、ケン太」
「この旅が終わって暇が出来たら連れてってあげるからね」
「この旅が終わるって、いつの事さ？……」
ケン太の叫びに、真吾達は顔を見合わせた。
「十年先？　二十年先？　僕が大人になった時？　大人になってファンタジーランドなんかに行っ

てもつまんないよ。僕、今行きたいよ」
「いい加減にしろ！　何がファンタジーランドだ。隊長、こんなガキと一緒にいるのはもう沢山だ。俺達は敵と戦わなけりゃならない。ガキの子守りをしている暇はないんだ」
「キリー、たかが子供の事でムキにならないで」
「たかが子供？」
ケン太は、レミーに子供扱いにされて、かなり傷ついていた。
その上、キリーは追い打ちをかけた。
「そう、たかが子供さ。だが、そのたかが子供がどれほど俺達の足手まといになっているのか忘れたのか？」
「よせ、キリー。ケン太は一人ぼっちだ。一緒に連れていくより仕方がないじゃないか」
「分かってるさ。だが、これ以上のわがままは許せない」
「キリーのバカッ！　そうさ、僕は子供さ。大人に僕の気持ちが分かってたまるか」
ケン太は涙声で叫ぶと、リビングエリアから飛び出した。
勉強部屋でケン太は、じっとファンタジーランドの写真カタログを見つめていた。写真に写っている子供達の笑顔……今にもメリーゴーラウンドの音楽が聞こえてくるようだ。オバがそっとケン太の肩にマジックハンドを置き、慰めた。
「ケン太、ここは我慢ですよ。みんなの言い分も正しいのですからね」
「オバ、オバも大人なんだね」
「えっ？」

「大人は大人、子供は子供……オバ、わが道を行くって、英語でなんていう？」
「ケン太……」
「ゴーイング、マイウェイさ」
ケン太は、いたずらっぽくほほえんだ。

＊

「大変です！　ケン太君が……ケン太君がァ……」
オバがケン太の置き手紙を持ってリビングエリアに転がり込んできた。
「なに？　ケン太が家出？」
「はい……申し訳ありません。わたしの不行き届きです。わからずやの大人とは付き合いたくないって、この置き手紙がしてありました」
「フン、放っておけ。この世の中、金がなけりゃ、パンのひとかけらだって手に入らない。そのうち腹をすかして帰ってくるさ」
「そう、現実は厳しいのだ！　勉強になるかもよ」
キリーが投げやりに言い放った。
レミーの言葉に抗議するようにオバが言った。
「お言葉ですが……追伸があります。お金なら心配いらないよ。父さんの国際キャッシュカードを持っているから、どこの国でも心配なしさ……」
「シビアー！　現実的」

「連れ戻さなきゃ……」

立ち上がった真吾を制してサバラスが言った。

「キリー、君が行け」

「えっ？　何でこの俺が？」

「俺に行かして下さい」

「私が行ってもいいわ。どうせ、行き先はファンタジーランド。わたし、割と乙女チックなの好みだもん」

「真吾にはゴーショーグン、レミーにはトライスリーがある。敵が襲って来た時の事を考えろ」

「貧乏クジは俺って訳か……ケッ！　ファンタジーランド！　この年で……」

「楽しんでらっしゃい、キリー坊や」

キリーはレミーを指さし、

「帰って来たら殺す」

「坊やに私が殺せる？」

「言わせてやるぜ、死ぬ、死ぬってな」

「ちょっとお前ら言いすぎじゃない？」

「大人の会話よ」

「坊やにゃ分からん」

「急げ、キリー！」

「ヘイ、ヘイ」

キリーは肩をすくめ、出て行った。

ファンタジーランドの正面門にやってきたケン太は、入場料のあまりの高さに目を見はった。

「チャイルド……五十ドルか……」

もちろん、ドルの持ち合わせなどない。ケン太はさっそく、父の国際キャッシュカードを使うことにした。だが、自動支払い機に吸い込まれたキャッシュカードの情報は、たちまちのうちに全世界を網羅するオールワールドバンクのコンピューターター回線を通じてドクーガに知らされた。

皇帝の前にカットナルが進み出て言った。

「ファンタジーランドは私のレジャー部門が仕切っております。このカットナルに全てお任せを……」

次期アメリカ大統領の地位を狙うカットナルにとって、子供のためのレジャーランドはイメージアップに大いに役立っていたのだ。

「フロリダ半島、全域を捜査せよ」

カットナルの命を受けて、ファンタジーランドの地下基地から無数のサーチロボが飛び出して行った。子供の夢をはぐくむためという名目でメルヘンの主人公に模したロボット達は、一瞬のうちに戦闘メカに変換するように作られていた。

グッドサンダーのファザーは、ただちにサーチロボットの接近を感知した。

サバラスは真吾とレミーに出動を命じた。
「今、グッドサンダーを発見される訳にはいかん。トライスリーで先手をとれ」
「しかし、キリーなしでは」
「あたしのトライスリーに任せてよ。キリーがいなくたって少し動きがにぶるくらいのもんよ。あたしとおんなじ、男なしで生きられるタイプだもん……」
ファザーの声が響いた。
「キリーのジャックナイトは、私が操縦します」
「よし、トライスリーでトライだな」
「レッツトライ！」
レミーと真吾の座席が床に吸い込まれていった。
「トライスリー、Go！」
レミーのかけ声で合体したトライスリーは、無数のサーチロボの中へ突っ込んでいった。
「邪魔よ、カトンボちゃん！」
トライスリーはサーチボロを次々に落としていく。
「出たな……迎撃ロボ発進！」
カットナルの指令をうけ、トライスリーと同じ大きさのロボットが二体現れた。
「レミー、ぬかるな」
「男は口を出さないで。二十一世紀は女の時代じゃ、チョロイ、チョロイ」
トライスリーは、あっという間に敵ロボットを破壊していった。

真吾はすっかり出る幕を失っていた。

*

カットナルの横でビジョンを見つめていたブンドルが冷えた口調で口を開いた。

「腑甲斐ないな、カットナル」

ニヤニヤ笑いながらケルナグールが続けた。

「なんなら手伝ってやってもいいぞ」

「だまれ！　ファンタジーランドはわしらの巣窟である事を忘れるな。敵の少年を人質にしてやる」

「子供の夢を蝕み、子供を利用しようとする。美しくない。私には到底出来ぬ真似だ」

「うるさい、勝てばいいのだ、戦いは！」

*

ファンタジーランドの人形の館の中で「回転木馬」のメロディにのって、ケン太は人形達と喜々として踊っていた。突然、流れていた「回転木馬」がプツンと切れた。

「ん？」

人形達が踊りをやめた。いつの間にか一緒に踊っていた子供達はいない。

「あれ？　みんなどこいっちゃったのかな」

不気味に無表情なピエロがケン太に近づいて来た。ピエロに従うように人形達も動きはじめた。

「よせよ、なんだよ、なにするんだよ」
後ずさりするケン太の腕をピエロの手がむんずとつかんだ。
次の瞬間、その手が吹き飛んだ。ケン太はワッとちぢこまった。
レーザーの物凄い光線が交錯した。
静けさが戻った時、ケン太の前にキリーが立っていた。
有無を言わさないキリーの姿だった。
「いくぞ」
キリーはレーザー銃のカートリッジを地面に落とし、入れかえた。
あたりは破壊されたピエロと人形の残骸の山である。
「これ、みんなキリーが？……かわいそうに……」
ケン太はいとおしむように残骸にさわる。
いきなりキリーはケン太の頰を叩いた。
「しっかりしろ、こいつは俺達の敵だ」
呆気（あっけ）にとられるケン太に厳しい口調で、
「やられる前にやれ、でなければ勝手に死ぬんだな」
そう言うとキリーは銃をケン太に渡した。ケン太はじっとその銃を見つめた。
その時、ドクーガのコマンダーがなだれ込んで来た。キリーは残骸の山をタテにして撃ちまくった。
「いくぞ、ケン太。ガキのお守りは手短かにしたいんでな」

コマンダーがキリーの背後から迫った。
「僕はガキじゃない」
ケン太はコマンダーに銃を向けた。しかし、引き金は引けなかった。
――できない。メカは友達だ……たとえ敵だって――
ふり向きざまにキリーのレーザー銃がそのコマンダーを撃ち倒した。
「ガキはガキだな」
キリーはニッと笑ってケン太の手を摑むと、引きずるように人形の館の外へ飛びだしていった。
そこに待ちうけているのはコマンダーの激しい銃撃だった。

*

上空ではトライスリーが三体のロボットに囲まれて戦っていた。
トライスリーのビジョンに、銃撃戦を続けながら逃げるキリーとケン太の姿が写っていた。
❀「レミー、キリーとケン太が！」
🐱「分かってるわよ。でも、こっちの御用が済まないうちはどうにもなんないわ！」

*

ケン太とキリーは、コマンダーに追いつめられて、ローラーコースターの乗り場の中に飛び込んだ。撃ちまくるキリーの銃のエネルギーが切れた。
「チッ！」

銃を投げ捨てた。キリーは光線剣ファイアーサーバを抜いた。
「ケン太、ガキのために死にたくないが、どうやらそれが運命らしいぜ」
「ガキじゃない！」
ケン太はポケットからマイコンを取り出し、叫んだ。
「ジェッターエース来い！」
その時、キリーの肩にコマンダーの銃弾がぶち当たった。
「キリー！」
「お前は逃げろ！　最後まで諦めるな」
キリーはローラーコースターにケン太を乗せた。その足を銃弾がつらぬいた。歯を食いしばりながらキリーは作動ルームに飛び込み、スイッチを入れた。ローラーコースターはキリーを残し、ゆっくりレールを登っていった。
「キリー！」
よろよろと操縦ルームから出て来たキリーを、コマンダー達が取り囲んだ。
「ガキとの付き合いもこれまでか……」
コマンダー達は銃を構えた。キリーはニッと笑って目を閉じた。と、ジェッターエースがコマンダーをなぎ倒して飛び込んで来た。ローラーコースターからケン太が叫んだ。
「キリー、ジェッターエースに！」
キリーはジェッターエースに飛び乗った。浮上するジェッターエースは、コースを上昇していくコースターへ向かって飛んでいく。

コマンダー達はジェッターエースに一斉射撃する。ジェッターエースが火を吐いた。キリーがコースターに飛び込むのと、ジェッターエースが爆発するのが同時だった。

「お前のオモチャ、壊しちゃったな」

コースターにジェッターエースの残骸がかろうじて乗っていた。

「僕の友達は死んじゃいない。直してみせるさ、ね、ジェッターエース」

残骸のランプがケン太に答えるように光った。コースターはコースの頂上に着き、猛速で走り出した。

*

上空では、トライスリーが次々と襲いかかる敵ロボに苦戦していた。

「レミー、早くケリをつけろ」

「あーん、だって、しつこいんだもん。隊長、なんとかしてよ」

*

猛烈なスピードで走るローラーコースターに、コマンダー達の銃弾が浴びせかけられた。コースターの鉄柱はその度にゆれた。しかし、マグニチュード10にも耐えられるように設計されたローラーコースターのコースは頑丈だった。だが、だからといってキリーの方からは反撃の手段は何もなかった。

――なるようにしかならない……――

そう諦めたキリーの口からつぶやきがもれた。
「結構面白いもんだな、ローラーコースターってやつは……」
「えっ？」
「初めて乗れたぜ、この年になってな」
「乗った事なかったの？」
「乗りたかったぜ。だが、そんな金はなかった。親も兄弟も友達も何もかもなかった」
キリーは少年の頃の、遊園地の金網にしがみつくようにしてローラーコースターを見つめ続けた、ボロをまとった自分の姿を思い出した。
――コースターには親子連れが歓声をあげて乗っている。
みじめだった。怒りさえ感じていた。
笑顔……、笑顔……、笑顔……。
そう、俺はあの時、コースターに向かって石を投げようとしていたんだ。
だが、その手を警官が掴んで……、そして俺は殴り飛ばされた。
「お前にゃブロンクスが似合いだ」――
今でもキリーは、あの警官の声をはっきり覚えていた。
――俺は生まれ育ったニューヨークの貧民街、ブロンクスの養護院を何度も脱走した。だが、身寄りのない少年の行きつく先は結局、ブロンクスの暴力団しかなかった。人に言えない事もした。しかし、夢中で生きた事には違いがない。気が着くと、暴力団のボスの片腕として一声で手下三万人を動かせるほどの若頭にのしあがっていた。腕っぷしと、きれる頭だけで手に入れた地位だった

が、長くは続かなかった。子分達の罪をひっかぶって懲役二百年というふざけた刑で牢にぶち込まれたが、脱獄……そんな俺の前に現れたのがサバラスだった。
「君の腕を二百年もくさらせておくのは惜しい」
サバラスの野郎はそう言ったが、二百年どころか一年もたたないうちにくたばっちまうとはな。ま、いい……。——
キリーはフッと笑った。そして、ケン太に語るともなくつぶやいた。
「昔の話さ、忘れた筈のな」
ローラーコースターがぐらりとゆれた。コマンダーの執拗な銃撃で、頑丈を誇っていたコースの支柱の一本がくずれたのだ。

＊

戦闘をグッドサンダーのビジョンで見つめていたサバラスに、ファザーが告げた。
「このままでは、キリーとケン太に生存の見込みはありません」
オバがすがるように叫んだ。
「隊長！」
サバラスが落ちついた口調でファザーに命じた。
「グッドサンダー、戦闘用意」
「しかし、敵に位置を感づかれます。瞬間移動可能まであと三日かかりますが……」
「背に腹はかえられん。我々にとって何が一番大切か……ファザー、お前が一番知ってる筈だろ

う」

「了解!　戦闘用意!」

「隊長!」

オバの声は震えていた。サバラスは優しい目でオバを見つめ、頷いた。

グッドサンダーは戦闘態勢をとると、浮上を開始した。

「ドカーン!!」

苦戦を続けるトライスリーの前で、突然、敵ロボがミサイルによって破壊された。

驚くレミーと真吾のビジョンにサバラスが写った。

「その敵はグッドサンダーが引き受けた」

「遅いのよね。どうせ出てくるなら、早めに願いたいわ」

「レミー、文句は後だ。キリーとケン太を!」

「了解、トライスリー、分離!」

トライスリーは、三つの戦闘機に分離すると、ローラーコースターめがけ突っ込んで行った。

*

「そろそろ、ＥＮＤマークか……」

キリーはつぶやいた。突っ走るコースターの前方のレールが、コマンダー達の銃撃で破壊されたのだ。

と、コースターの横に、真吾のキングアローと無人のジャックナイトが轟音と共に現れた。

ジャックナイトのコクピットが自動的に開いていく。
「キリー、ジャックナイトに！」
聞こえもしないのに真吾が叫んだ。
——言われなくても分かってる。——
キリーはコースターの上に立ち上がった。
「ケン太、俺につかまれ」
ジャックナイトが接近した。
十メートル、五メートル、三メートル……。
キリーとケン太はジャンプした。キリーはジャックナイトにしがみついた。キリーの手にしがみついたケン太の体は宙に浮いている。コースターは、破壊されたコースから落下していく。キリーは顔をしかめながら、傷ついた手でケン太を機上に引き上げた。
「フーッ、ガキで良かったぜ。大人だったら、重くて俺の腕じゃもたなかった」
「スリル満点、キリー、サンキュー！」
「こいつめ！」
キリーはケン太の額をコツンと叩いた。

「奴らを生かして帰すな。最後の奥の手だ。キャスラー発進せよ」
こぶしを握りしめ、カットナルはテーブルを殴りつけた。愛用の精神安定剤がテーブルから落ち、砕け散った。

カットナルの命をうけ、ファンタジーランドの童話の城が解体し、みるみるうちに巨大なメカロボットに変形し、真吾達の戦闘機の前に立ちふさがった。

「ヒャーッ、オーバー。とても手に負えないわ。真吾、あなたの出番のようよ」

「隊長！　ゴーショーグンを！」

ビジョンの中のサバラスがニヤリと笑って言った。

「省エネ、節約のためあまり使いたくないが、仕方あるまい」

「サンクス！　行くぞ、レミー、キリー」

「俺ァ、疲れた。好きにやってくれ」

「ゴーショーグン、Go！」

グッドサンダーからゴーショーグンが現れ、三機を収納した。

ファンタジーランドを舞台に、ゴーショーグンとキャスラーの死闘が始まった。

二つの巨大ロボットの戦いで、ファンタジーランドはみるみる破壊されていった。

「あーあ、子供の夢が壊れていく。もったいない」

「ガキの夢じゃない。ガキを利用する大人の汚ねえ欲のかたまりさ」

「サンダーアタッカー、ゴーサーベル、Go！」

ヤリがキャスラーをつらぬき、サーベルが真二つに体を切り裂いた。

「お城にはヤリと剣が似合いだぜ」

「珍しい」

「ん？」

「真吾のキザな台詞が決まるなんてね」
「キザだけ余計だ。俺は真実を言ったんだからな」
「本気だったの？」
「冗談は言わん」
「疲れる人、ねえ、キリー」
キリーの代わりにケン太が答えた。
「キリーは疲れて、とっくに寝てるよ」

*

「ま、またしても」
敗北に体を震わせるカットナルに、ブンドルは平然とつぶやいた。
「美しくないものは滅びるのがさだめ……先は見えていた」
ブンドルを真似て、ケルナグールが言った。
「そうそう、弱いのう……弱い者は滅びてあたりまえ、グハハハ」
たまらず、床に落ちた精神安定剤をむさぼり食うカットナルを一瞥して、ブンドルはケルナグールとホールを出ていった。

*

グッドサンダー内のリビングエリアに、傷の治療を終えた包帯だらけのキリーが、車椅子に乗っ

て入ってきた。

「あれから三日、敵が攻撃を仕掛ける気配はないな」

「諦めたのかな」

サバラスが無表情に言った。

「いや、ドクーガは甘くない。恐らく、我々の力を細かく分析しているに違いない」

「ま、おかげで治療に専念できた。よしよしさ」

その時、ファザーがエネルギー状態を告げてきた。

「瞬間移動エネルギー、ビムラー、融合終了、いつでも移動可能です」

ジェッターエースに乗ったケン太が、キリー達の前にやってきた。

「キリー、ほら、ジェッターエース、ちゃんと元に戻ったよ」

真吾が呆れてつぶやいた。

「たった三日か……マシンはいい、治りが早くて」

「こっちゃ、当分、再起不能だ。ガキのお守りにしちゃ高くついたぜ」

「キリー、ガキガキって呼ぶのは気に入らないけどね、僕、あんたが少し好きになったよ」

「ガキよりレミーに好かれたいぜ」

「キリーも真吾も、坊や達はケン太が似合いよ。仲よくやんなさい」

レミーはキリーの肩をポンと叩いた。

「ギャーッ」

キリーは悲鳴をあげて飛び上がった。

「あら、ごめんなさい。ケガしてるの忘れてたわ」
「ひでえ、これじゃほんと、ケン太の方がまだましだぜ。なあ、ケン太」
ケン太とキリーはニッと笑いあった。
サバラスが珍しく微笑して、いつもどおりの言葉を言った。
「ファザー、瞬間移動開始だ」
あてのない旅はいつまで続くのか、グッドサンダーは轟音と共に浮上し、瞬間移動した。

第四章 恐怖のエネルギー

グッドサンダーの最初の一年間の旅は、正に逃亡の連続だった。一度瞬間移動を行うと、十日間はエネルギー蓄積のため、他地点への移動は不可能になる。その十日の間のドクーガの攻撃をさけるため、グッドサンダーの移動地点は人目のつかぬ人跡未踏の地が選ばれた。しかし、それでも、ブンドル局長の操る情報網は、ものの一週間もあればグッドサンダーの行方を捜しだしていた。だが、ドクーガ軍事部門、三幹部達の攻撃は、さほどスムーズとはいえなかった。皇帝をのぞくドクーガ幹部達に、瞬間移動装置の利用価値というものへの執着がさほどなかった事もあるし、真田博士へ異常なほどのライバル意識を燃やす、ジッター博士が作り出す採算度外視のゴーショーグン対抗メカは、三幹部にとって余りに高い買物だった。しかも、大枚(たいまい)をはたいて手に入れたメカが、ゴーショーグンの一撃で倒されるのをまのあたりにしては、そうおめおめと気楽に攻撃を仕掛ける訳にはいかなかった。

　ドクーガの軍事作戦は、それぞれの幹部の独立採算で成り立っている。瞬間移動という、使い道も明確でないものに予算をつぎこむより、世界各地で局地戦を巻き起こし、武器、医療、食品、死体処理関係で儲けた方がましだという考えを幹部達が持っても無理のないことだった。特に、ケルナグール司令官は、グッドサンダー攻撃に消極的だった。その理由は、彼の妻、ケルナグール外食産業の副社長ヨーコ夫人にあると思われる。ヨーコ夫人は、大財閥の一人娘として生まれ、趣味で始めたボクシングジムでケルナグールに出会った。ケルナグールの粗暴さ、戦闘心の強さに目をつけた彼女は、自ら彼のマネージャーになり、ヘビー級チャンピオンのベルトを手にするまでに育てあげた。百二十戦百二十勝、世界最強のチャンピオンとい

う名をほしいままにしたケルナグールだが、体力に任せ、守備を忘れた彼のボクシングは、いつしか彼をパンチドランカーに変えていた。百二十一戦目のタイトル防衛戦で、観客の投げ入れたバナナの皮に滑って転んだケルナグールは、二度とリングの上に立ち上がれなかった。ボクサーとして再起不能……燃えつきたケルナグールを放っておけるほどヨーコは冷酷な女ではなかった。彼女はケルナグールと結婚し、シラキーコンツェルンの外食産業の社長にすえ、経営面の采配は副社長である自分がとり、彼のあり余る戦闘本能を慰めるため、ドクーガの軍事部門に夫を紹介したのだ。ケルナグールは、その狂暴な戦闘本能でドクーガの最高幹部の一人にのしあがった。が、ヨーコ夫人にとっては、ケルナグールの軍事行動は子供の遊びのようなもの、日本人の血を引くヨーコ夫人にしてみれば、軍事進出ではなく、経済侵略で勢力を伸ばす事はお手のものだった。したがって、遊びの範囲の無駄遣いは許せるにしろ、外食産業の屋台骨を揺るがすような出費は絶対許さなかった。ヨーコ夫人は八ケタのポケット電算器で計算できる範囲以上の出費を許さなかった。すなわち、最高９９９９９９９９ドルが、ケルナグールが一週間に使える戦闘という名の遊びの小遣いの上限だった。粗暴だが妻に忠実なこの男は、いかにカットナルやブンドルに馬鹿にされようと、妻との約束は守った。だからグッドサンダーを攻撃して一瞬のうちに小遣いの数カ月分を灰にするより、チビチビと中近東あたりで局地戦を楽しむ方を選びたがるのは無理からぬ事であろう。

この項、ヨーコ・ケルナグール著『わたしのロッキー、我が夫ケルナグール』を参考にした。（イザベル・

クロンカイト注)

ただ、この頃、さほど熱心といえぬが、理解しえぬ好奇心でグッドサンダーを追い続けたのがブンドル局長である。

金銭感覚ではかなりシビアな面もあるこの男が、まがりなりにもグッドサンダーを追ったのは、瞬間移動装置うんぬんというより、グッドサンダーの女性パイロットに興味を覚えたからではないかと、その後の行動を見ると推察される。

しかし、ブンドルとの戦闘の折、グッドサンダーの瞬間移動した地点が偶然、ドクーガの所有する南アフリカのキンバリー・ダイヤモンド鉱山であったため、戦闘の際、莫大な埋蔵量を誇る鉱山が崩壊した。

その損害は一兆ドルを超えた。ブンドルはドクーガへの損害賠償金を一括払いにしたために(ローンの制度もあるらしいのだが、彼一流の美意識がそれを許さなかったようである)ドイツ・ライン川河畔に点在するブンドル私有の古城のほとんどを売りに出さねばならなくなり、その痛手からか、その後のグッドサンダー攻撃は比較的手びかえられるようになった。

だが、一年間にわたるグッドサンダーとドクーガの戦闘は、様々なデーターをドクーガにもたらしていた。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

＊

ドクーガ司令本部のビジョンにグッドサンダーの透視図が写っていた。過去一年間のデーターを分析して得たグッドサンダーの予想図が完成したのだ。

「この日を待っていたぞ。移動装置の謎を握るエネルギー炉はどのあたりにあるのだ？」

ブンドルはバラの花をもてあそびながら、コンピューター、マザーに聞いた。

「おそらくここです」

ビジョンに写っているグッドサンダーの透視図の中央部が光った。

「そこを集中的に攻撃して漏れ出たエネルギーを調べれば、瞬間移動の謎も摑めるかもしれぬな」

ブンドルの予想にマザーも同意した。

「それは可能です。おそらく、そのエネルギーは、人類が今まで知る事のなかった新しいエネルギーの筈です」

「新しいエネルギー？」

「今の私には、それしかお答えできません」

「ミステリアスなエネルギー……美しい響きだ」

ブンドルは内ポケットからコンパクトを出し、自らの顔をみた。

「みよ、私の瞳を……未知のエネルギーを知りたいがため、なんと華麗に燃えあがっている事であろうか」

「フン、確かに燃えているわ、二日酔いの赤い目がな」

♂「グハハハ。ブンドル、最近失敗が多くて、やけ酒がすぎるのではないか？」

「酒とバラの日々、この格調高き退廃の美学が分からんと見えるな」

その時、アラームが鳴り、ブンドル情報網より報告が入った。

「グッドサンダー発見……シベリア、ツングスカ上空……」

「ツングスカ……これはまた、意味深なところに……」

♂「意味深なところ？　どういうことだ？」

ケルナグールの問いに、ブンドルはつぶやいた。

「教養のない男はさみしい……」

「まこと、あのツングスカ大爆発を知らんとはな」

カットナルも軽蔑しきった顔でケルナグールを見つめた。

♂「な、なんのことだ……」

「無知は罪……子供向けの科学絵本ぐらい用意して、調べるがいい」

♂「ク、ク、ク、ケルーナ！」

ケルーナと呼ばれた、人間と等身大の青白いメカがおずおずと現れた。

「ケル……ナ、ケルーナ」

ケルーナはその言葉だけを弱々しくつぶやいている。ケルナグールは、いきなりケルーナの顔面をなぐりつけると、力一杯蹴り上げた。ケルーナの首がたわいもなく飛び、崩れ落ちた体が、

「ケルーナ、ケルーナ」

と、首を捜し這いずり回る。

カットナルが吐き捨てるように言った。

「また、ケルーナにやつあたりか……」

「野蛮な奴め！」

ケルナグールは、ケルーナを蹴り飛ばし続けている。

であった。ケルーナは、倒産したロボット会社ポピンがOVAの前に完成発売した、幼児向け暴力発散メカ

親や教師への暴力をかわす捌け口として作られた、二十一世紀ともなると、小学生・幼稚園児まで波及し、ケルーナは

で、発売当時はかなり売れたものである。もっとも、抵抗しない、殴られても蹴られても文句を言わないロボット

すぐに子供達に飽きられてしまったが、粗暴単純なケルナグールには性が合うらしく、いまだに愛

用していた。ちなみにケルーナの宣伝コピーは——、

お父さん、お母さんを大切にしよう。

先生も大切にしよう。

イライラしたら、ケルーナ出番、

金属バットでも壊れません……

さあ、ケルーナをやっつけよう!!——

メカロボット史上、最も哀れな存在がケルーナだった。

「ブンドル、今回はお前に任す」

皇帝の声が響いた。

「経費は、わたしが支払おう。そろそろ、わしも本気になっていい時期が来たようだ」

「ハッ」
カットナルとケルナグールは、羨望の眼差しをブンドルに送った。

＊

「ファザー、なぜこんなところに着地した？　目的地は人のいないインド洋上空の筈だぞ」
サバラスがコンピューター、ファザーに尋ねた。
「インド洋？　目的地はここじゃないんですか？」
グッドサンダーがツングスカに現れた事は、乗っているサバラスや真吾達にも意外な事だった。
「ツングスカが無人の地だったのは昔の事……今は開拓者がどんどん入り込んでいる。我々もすでに発見されているかもしれん」
そうつぶやきながら、サバラスは眉を寄せた。
「おいおい、それじゃ瞬間移動したって意味が無いんじゃないか」
「ファザーちゃん、故障しちゃったの？」
ファザーが答えた。
「違います。御主人様の命令です」
「御主人様？　死んだ真田博士の命令なのか？」
怪訝そうにサバラスが訊き返した。
「父さんの……」
ケン太はサバラスの言葉に緊張して、ファザーの答えを待った。

「これ以上は答えられません……」
そして、急に厳しいトーンの口調できっぱりと言った。
「我々はここで待つのだ」
❀「待つ？　なにを……？」
「回答不能……」
🐺「やい！　てめえは機械だぞ……ちょっと態度がでかいんじゃない？」
「回答不能……」
押しても引いても、その言葉以外は出てきそうになかった。
🐱「ファザーちゃん、愛せないなあ、そういう性格」
突然、警報ブザーが鳴り響いた。
「敵メカ来襲、迎撃準備！」
ツングスカの荒野に、クラッシック音楽が流れた。ブンドル軍団登場のしるしである。
❀「さっそくおいでなすったか」
🐱「あーあ、またあのブラスバンドのお兄さん……よくやるわよ」
🐺「今回はワグナーの『ローエングリーン』か、悪い趣味じゃないぜ」
三人は、それぞれの戦闘機に乗り、飛び出して行った。
ブンドルは、いつになく興奮していた。今までグッドサンダーから受けた損害を思えば、無理からぬ事だった。

「出たな、カトンボめ……美形メカ、シャンデラー出撃！」
その名のとおり、シャンデリアのような巨大なメカが現れた。
「白熱の陽の光を浴び虹色に輝くシャンデラー、我が麗しの秘蔵メカ、光り輝け！」
ギラギラと輝くシャンデラーから、すさまじい光が走った。
グッドサンダーの巨体が激しくゆれた。
「ウッ！」
「ビューティフル、まるでダイヤモンドじゃん」
「首飾りに出来る大きさじゃないぜ、マイフェアレディ」
「一時回避だ」

ファザーがサバラスにシャンデラーの戦闘能力計算結果を告げた。
「敵メカ、発射光線六千度、デストロイド指数10……ゴーショーグンと対等！」
それを聞いて、サバラスが叫んだ。
「いかん！　真吾、レミー、キリー、ゴーショーグンだ！」
「了解。ゴーショーグン、Go！」
真吾達を収納したゴーショーグンとシャンデラーは戦いを開始した。
「敵味方共に壮絶に美しい。だがわたしの狙いはエネルギー炉……全軍、ゴーショーグンのいぬ間にエネルギー炉を狙え」

ブンドル軍団は、グッドサンダーの中心部に集中攻撃を加えた。

＊

ファザーは、サバラスに損害状況を報告した。
「敵の攻撃はグッドサンダーの中央部に集中しています。おそらく狙いは、ビムラーのエネルギー炉です。ビムラーエネルギーをわずかでも手に入れれば、敵は瞬間移動装置を作れる力を持っています」
「ファザー、それを知っていて、なぜこんな危険な場所にグッドサンダーを移動したんだ」
「お答えできません。ただ待つだけです」
「このわしにも言えんのか？」
「回答不能……」
ファザーは、それだけ言って黙った。

＊

その頃、宇宙を銀河系へ向かって光速の数千倍という速さで進む、ガス状の物質があった。
そのガス状の物質は、銀河系に入るとその速度を落としたが、確実にある星に向かって進んでいた。その星の名は、太陽系第三惑星……地球、そして、そのガス状物質は、ツングスカで一九〇八年に大爆発を起こした物質と同じものだった。

＊

シャンデラーとゴーショーグンの勝負は、なかなかつかなかった。次から次に繰り出すゴーショーグンの兵器に対するシャンデラーの攻撃兵器は、対等、もしくはそれ以上の力があった。

「チッ！　どれもこれも、まるっぽ、通用しないぜ」

「よく研究されてるよ」

「ああ、じれったいわね。真吾、なんか新兵器はないの？」

「あん」

「隠さないでよ。普通、都合よく出てくるもんでしょ、こういう時って、ほら新兵器がさ」

「手品やマンガじゃあるまいし、残念ながら、もう種切れさ」

「ドジね！　男なら、こんな時いつでも奥の手っていうのを持っておくものよ」

シャンデラーから発射される針のような無数のミサイルがゴーショーグンに突き刺さり、次の瞬間、爆発した。

ゴーショーグンは、原野に叩きつけられた。

「キャアーッ！」

コクピットのシートからレミーが転げ落ちたのだ。

「おいしそ。レミーの悲鳴、久し振りだぜ」

「恥かし……もう、わしゃ怒ったぞ。か弱い乙女をおどかしてくれちゃって。真吾、こうなったら肉弾戦あるのみよ」

❀「分かった、分かった。ゴーショーグン、アタック！」
ゴーショーグンは兵器による攻撃を止め、シャンデラーに体当たりした。
😺「やれ、そこだ。蹴っとばせ、ネックブリーカー、脳天逆落とし！　ヘッドロック、よしいいぞ」
❀「おい、レミーの奴、今までどういう生活してたんだ？」
🐱「ウン、考えちゃうぜ」
真吾とキリーは肩をすくめた。

＊

その頃、グッドサンダー基地の中央部は、ブンドル軍団の集中攻撃を浴びて穴があいていた。
スナイパー、コマンダーらのロボット兵士達は、次々に穴の中へ突っ込んでいった。
ファザーの「中央ブロック壁破壊、敵潜入」の声に、ケン太は司令室の自分のシートに飛び乗った。
「僕が食い止めてやる」
「いけません、私に任せなさい」
ファザーが止めた。
「でも、このままじゃエネルギー炉が危いよ」
「ここは、ファザーに任せろ」
サバラスが諭すように言った。しかし、ケン太には、そんな言葉は聞こえない。
「グッドサンダーがこれ以上壊されるの、見てられないよ。いくぞ！」

ケン太のシートが床の下へ沈んでいった。
「オバ、ケン太を止めろ!」
ファザーがオバに命令した。
オバは、ケン太の消えた穴にマジックハンドを突っ込んだ。
「よせ! 離せよう」
オバのマジックハンドにつまみあげられて暴れるケン太に、ファザーが言った。
「ここでじっとしていなさい。もうすぐ何かが起こります」
サバラスは腕組みして、じっとビジョンに写るグッドサンダーのエンジン部を見つめていた。
エンジン部の防御シャッターが破られ、スナイパーやコマンダー達が侵入するのに三十分とかからなかった。
スナイパーの報告を受けたブンドルは、ただちに命令を下した。
「よし、ただちにエンジンを破壊、エネルギー源を持ち出すのだ」

グッドサンダーの司令室のビジョンに、エンジン部の破壊作業をするメカの姿が写った。
「ああッ、このままじゃ奴らにやられっ放しだよ……」
じれるケン太に告げられるファザーの言葉は同じだった。
「待つのです」

*

同時刻、冥王星の公転軌道を飛んでいたＮＡＳＡ（アメリカ航空宇宙局）の宇宙衛星は、猛烈な速度で太陽系に侵入してくる、未曾有のエネルギーを持つガス状物質を感知、その情報をＮＡＳＡへ報告した。
「太陽系に正体不明のガス状物質侵入。そのコースと速度から計算すると、二十分後に地球を直撃する……」
この情報は、ただちにＮＡＳＡからありとあらゆる情報機関を通じて全世界に知らされた。
「十五分後、地球のどこかを隕石らしき物質が直撃します。どこに落ちるか、まだはっきりいたしませんが、未曾有の被害が予想されます。皆さん、うろたえず、今後の情報をお待ち下さい」
世界各国に、それぞれの国の言葉で流された臨時ニュースを聞いた人々は、ただ呆然と空を見上げるだけだった。
――あと十五分――
パニックが起きようにも、激突の結果が出るまで、あまりに時間がなさすぎたのだ。
五分後、ＮＡＳＡのコンピューターは激突地点を計算し、多くの人に安堵の胸をなでおろさせた。
「未確認物質の軌道計算完了……激突地点、シベリア・ツングスカ川流域」
不幸中の幸福……ツングスカ流域に大都会はない。しかし、慌てる者もいた。

＊

「なに！　未確認物質が飛んでくる!?　ここへか？」
ブンドルに、ドクーガのコンピューター、マザーが答えた。

「はい、すみやかに退避すべきです」
「ううッ、ここまで奴らを追いつめて……エンジン部の破壊の様子はどうだ」
グッドサンダーのエンジン部に侵入したスナイパーが報告した。
「あと少し、あと少しでございます」
「よし、ぎりぎりまで続けろ！」
その時、ブンドルの傍にいた部下が空を指し、叫んだ。
「ブンドル様、あれを！」
「ん？　!!　な、なんと美しい」

それは七色の光を放ちながら、空の彼方から急速に降りてきた。
ガス状物質は、遂にツングスカの上空にその姿を現したのだ。

グッドサンダー司令室で、ファザーは誰に語るともなく無表情に言った。
「ビムラー接近。キャッチ、第二段階準備開始！」
サバラスが聞きかえした。
「第二段階？」
「ビムラーとわたしは、新しい段階を迎えるのです」
その時、アラームが鳴った。
エンジン部が破壊され、ガス状のビムラーエネルギーが吹き出す様子がビジョンに写っている。

「エンジン破壊、正体不明のガスが出ています」
スナイパーの報告を聞いたブンドルは、すみやかに命令を下した。
「分析メカで吸入しろ。多くはいらぬ。吸収したら、ただちに月面の宇宙エネルギー研究所に退避するのだ」
「了解」

ドクーガの分析メカがガスを吸い込み始めた。体内のガラス部分にガスがたまっていく。と、エンジン部分の壁が動きだした。
ファザーの声が響いた。
「ビムラー、エネルギー炉、受け入れ準備開始！」
「ビムラー？　ああッ！」
ファザーの声とスナイパーの悲鳴がブンドルの耳に届いた。
巨大な壁がエンジン部分を取り囲むと、急速に狭まっていくのだ。
ドクーガのメカ達は、次々に壁に押しつぶされていく。間一髪、分析メカは脱出し、破壊したグッドサンダー中央部の穴から空へ飛び上がった。
「ビムラー……エネルギーの名はビムラーと言うのか……分析メカは無事か？」
ブンドルのビジョンに、月を目指してまっしぐらに飛んで行く分析メカが写った。

「脱出成功……」
「うむ、これでビムラーとやらの秘密は私のものだ。全軍、一時退避しろ」
「未確認物質、激突まで五分！　シャンデラーはどうします？」
部下の質問に、ブンドルは冷ややかに答えた。
「放っておけ。奴は所詮ただのメカだ」

シャンデラーとゴーショーグンの死闘は続いていた。
だが、その背後に、巨大なビムラー物質がすぐそこまで迫っていた。

一方、グッドサンダーの中で、ファザーは変わりつつあった。
「ファザー、メモリー、パートII作動開始！」
シャンデリアのようなファザーの中を走る光の流れが変化した。
「ビムラー、第二段階、作動開始」
ファザーの声に答えるように、壁に囲まれたエンジン部内の、炉の中のビムラーガスが小さく固まっていく。

宇宙を飛ぶブンドルの分析メカの中でも、ビムラーの変化は同じだった。
「エネルギーに異常……ガスが固まっていきます……現在一ミリグラムの固体です」
「なに？」

部下の報告に、ブンドルは眉をしかめた。

グッドサンダー司令室のビジョンに、ファイナルカウントダウンの数字が打ち出されていく。

5、4、3、2、1――

「ファザー、メモリー、パートII」

司令室の中央に、ボーッと真田博士が浮かびあがった。

「!! 父さん……父さんだ!」

ケン太は真田博士に飛びついていった。が、ケン太の体は真田博士の体を突き抜けていった。

「!」

「ケン太さん、おちついて。これは立体映像です」

オバが優しくケン太にささやいた。立体映像の真田博士はサバラスに話し始めた。

「この立体映像は、ファザーのメモリー、パートIIに記憶させた、わたしの遺言だ。サバラス君、瞬間移動装置のビムラーエネルギーは成長していくエネルギーなのだ」

「成長していく?」

「私は二十年前、ツングスカ調査団に加わった時、地元の老人から爆発跡でひろったビムラーという名の小石をもらった。ビムラーは何の変わりもない小石だったが、十一年前……そう、ちょうどケン太の生まれた年のある日、研究所のコンピューターが、研究室に置いてあったビムラーの異変を知らせた。研究所で私が見たものは、信じられぬ光景だった。ビムラーが光りながら、研究室のあちこちへ一瞬のうちに移動し、また消えては現れ、消えては現れしていた。ビムラーはその時初

めて、その正体を現した。ビムラーは瞬間移動を可能にする不思議なエネルギーを放出する、能力があったのだ。そしてビムラーは、宇宙の彼方に向け、ある波長の電波を送った。ビムラーは宇宙の彼方に存在する同じ種類のエネルギーに呼びかけた。私はその電波の波長を解読し、四千日後――ツングスカ――という意味であることを知った。四千日後、すなわち十一年後の今日、ツングスカで、ビムラーは同じ種類のエネルギーと出会う約束をかわしたのだ」
「同じ種類のエネルギー？」
サバラスの問いに答えるかのように、真田博士は続けた。
「君達の目の前に、ニュービムラーが来ている筈だ」
真田博士の言う通り、巨大なガス状のビムラーは、グッドサンダーのすぐ目の前まで来ていた。
「グッドサンダーまで、あと二分」
ファザーが告げた。
「ビムラーは、ただの小石から瞬間移動エネルギーへ成長し、今またビムラーを吸収して、新しい能力を加えたエネルギーへと成長していくのだ」
「グッドサンダーまで、あと三十秒」
ファザーの声に答えるように、グッドサンダーの甲板から、巨大なレンズのようなメカが現れた。
「コンピューター、ファザーは、ビムラーの成長を見守るためのメカだ。第二段階が来るまで、ファザー自身も何も知らないように作られている。秘密保持のため、この日が来るまで黙っていたことを許してくれ」
真田博士が話し終えると、ファザーがカウントを読みはじめた。

「グッドサンダーまで、十秒……」
サバラスはいつもの微笑をもらして言った。
「真田博士、研究の成果を見せてもらうぞ」
「5、4、3、2、1」

ビムラー物質は、みるみる巨大な光の渦になり、レンズに吸収されていった。と同時に、その光の渦の一条が分離し、空の片端へ猛烈な速度で走っていった。
その光は、月へ向かって宇宙を行く分析メカのビムラーに融合した。
大爆発！　月の一部がえぐられた。
地球から見ていても、一瞬、夜が割れたように見えるほどの大爆発だった。

ツングスカへ落ちたビムラー物質は、グッドサンダーのレンズの中に完全に吸収された。
エネルギー炉の下部から中央部にかけて、青白い光が異様に輝いている。
今までが第一段階なら、明らかに同量だけ光の部分が増していた。
「これで、ビムラーの第二段階が始まった訳だ。ビムラーはグッドサンダーのエネルギー炉の中では安定しているが……ひとたび爆発を起こせば……」
それに続く真田博士の言葉と同じ内容を、ドクーガのコンピューター、マザーは皇帝と幹部達に報告した。

「分析メカの今の爆発から計算すれば、グッドサンダー内のビムラーが一度に爆発した場合……太陽系全てを一瞬にして消すエネルギーがあります」
「太陽系全て？」
三人の幹部は、それぞれの場で呆然とつぶやいた。

＊

「太陽系？　水金地火木土天海冥……九つの星が全部？」

＊

「一瞬のうちに……」

＊

「背筋を走るこの甘き恐怖のたかなり……」

＊

だが、真吾達には呆然としている暇はなかった。相変わらず、シャンデラーとゴーショーグンとの戦いは続いていた。
シャンデラーの攻撃のたびに、コクピットのメカがショートした。
「真吾、やられっぱなしじゃない。どうにもならないの？」

✿「どうにもならないね」
🐈‍⬛「レミー、辞世の句を……」
🐱「花は美しく散る。イヤーン、まだ死にたくないわ」
その時、ファザーの声が割って入った。
「まだ死なせはしません。ビムラーと共にゴーショーグンも、第二段階に入りました」
🐈‍⬛「なんのこと？」
✿「ゴーフラッシャー？」
「真吾、ゴーフラッシャーと叫び、ミサイルレバーを引きなさい」
🐱「やって、やって、助かるならなんでもやってみて……」
✿「よし！　ゴーフラッシャー」
真吾はレバーを引いた。
グッドサンダーから光が飛び、ゴーショーグンの背から光の槍のようなものが放射状に放たれた。
無数の光の槍がシャンデラーを包んだ瞬間、シャンデラーはあとかたもなく吹き飛んでいた。
真吾達は、その破壊力の凄まじさに言葉がなかった。
✿「みたか？」
🐈‍⬛「拝見しました」
🐱「……うそーッ」
いつもはチャーミングにテンポよく決まるレミーの「うそーッ」も、この日ばかりは調子はずれだった。

だが、サバラスはゴーフラッシャーの威力を目の当たりにしても、ニコリとも笑わなかった。
「我々は、太陽系を破壊する爆弾の上に座っている訳か。ファザー、真田博士、ビムラーの成長は第二段階で終わりなのか?」
「回答不能……」
ファザーはそれだけ言って、口をつぐんだ。
「幸運を祈る」
立体映像の真田博士もそれだけ言い残し、消えた。
「父さん!」
ケン太の思いを拒絶するようにファザーが言った。
「真田博士の遺言、終了」
ケン太は、真田博士の消えたあたりを涙まじりで見つめていた。

第五章
別れのモンマルトル

ツングスカ事件以来、ドクーガとグッドサンダーの戦いの様相は一変した。グッドサンダーへのむやみな破壊行為は即地球の、いや太陽系の破壊に通じる。ドクーガにとって手を出そうにも手を出しかねる厄介な存在になっていた。
おまけに、その事実が世界に知られては、人々にパニック状態が起こるのは必定だった。経済不安、政治不安、ありとあらゆる面で、グッドサンダーの持つ太陽系破壊能力は、世界に知らせてはならぬ事実だった。
いまや、ドクーガにとっても、グッドサンダーにとっても、ビムラーは生存のために守らねばならぬ存在だった。
したがって、ドクーガのグッドサンダーへの直接的な攻撃は極力避けられるようになった。グッドサンダーのかわりに標的になったのは、ゴーショーグンを操る三人のパイロットだった。
派手なメカ戦は影をひそめ、三人がグッドサンダーを離れた時を狙う罠が、世界中にはりめぐらされた。その罠のほとんどは、ブンドル局長のアイデアによるものだった。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

ブンドルは、グッドサンダーのファイター達が罠にかかる日を待ち続けた。

——彼らとて人の子、あの鉄の船の中にいつまでも閉じ込もっている訳にもいくまい。どこかに必ず姿を現す筈だ。——

＊

ブンドルは辛抱強く待ち続けた。やがて、ニューヨークにキリー・ギャグレーが現れ、昔、若頭だった暴力団スワン組を助け、スワン組と縄張り争いをしていたドクーガ直系の暴力団を壊滅させたという情報が入った。

アメリカの暴力団ファミリーを制するものはアメリカを制するとさえ言われているだけに、大統領の座を狙うカットナルは大いに慌て、スワン組制圧にカットナル軍団を出動させたが、軍団がニューヨークに上陸した時には、すでにスワン組は解散、キリー・ギャグレーはニューヨークから姿を消していた。地団駄踏んで精神安定剤をむさぼり食うカットナルを横目に、ブンドルは眉ひとつ動かさなかった。

——暴力団あがりのキリー・ギャグレーと、薄汚れた犯罪都市ニューヨーク、私の趣味ではないな。——

ブンドルは別のチャンスを待った。特にレミー・島田が生まれ育った街、パリに現れる日を待ち続けていた。

ニューヨークからキリー・ギャグレーの姿が消えて二カ月が経った。

キリーを乗せたグッドサンダー基地は、ニューヨークから大西洋を瞬間移動で横断し、今、フラ

ンスのシェルブール沖の海底に静かにその巨体を横たえていた。ドクーガは、それを知ってか知らずか、全く攻撃の気配がなかった。

「暗いなあ……いつまで暗い海の底……」

リビングエリアでくつろいでいたキリーが、大きなあくびをして言った。

「おかげでドクーガも手を出してこないし、楽でいいじゃないか」

「楽もほどほど、俺達、ここに二カ月も缶詰めにされてるんだぜ。マグロやシーチキンじゃあるまいしよ。ねえ、レミーちゃん」

レミーは何も答えず、ぼんやりと窓の外の暗い海底をみつめてもの思いにふけっている。

「答えなし、暗～いなあ」

キリーは肩をすくめた。

「ドキューーン、バババッ、スキューーン、スキューーン、ドッワ～ン」

ケン太が飛び込んできて、椅子につまずいて転んだ。その拍子に脇にはさんでいた紙が散らばった。

「いよッ！　お元気坊や登場」

キリーは、床に落ちた紙を拾いあげた。

「なんじゃ、こりゃ」

擬人化した戦闘機やグッドサンダーが描かれていた。

「けっこ、うまいマンガじゃないか」

「いけません」

オバがキリーの手から紙をひったくり、ケン太に文句を言い始めた。
「ケン太くん！　勉強中にこんなくだらないマンガを描いたりして！」
キリーがとりなした。
「まあまあオバ。人間には、絵を見たり、描いたり、音楽を聞いたりする情操教育ってもんも必要なんだよな」
「そうそう。言ってやって、言ってやって」
ケン太が調子にのって続けた。
メカのオバにとって、情操教育が唯一のウイークポイントだった。
「マンガが情操教育ですか？」
いつの間にか、サバラスが入って来て言った。
「それは分からんが、確かにケン太には情操教育も必要だ」
そして、もの思いにふけっていたレミーに言った。
「レミー、ケン太を連れてパリの美術館めぐりをしてこないか」
「え？　パリに？」
「ここは芸術の都パリに近い」
レミーは、もの思いをふっ切るように言った。
「ハイ、隊長」
「エスコートは、当然俺だな」
キリーが胸を張ったが、サバラスは知らん顔で言った。

「パリは恋の街だ。キリーには刺激が多すぎる」
「そう。パリジェンヌに目がくらんで、帰んなくなるとこまるものねえ」
レミーがいたずらっぽく言って、キリーをからかった。
「見破られたか」
「見え見えよ。パリでキリーがやりたい事なんてね……」
「チェッ！」
キリーはくさって頭をかいた。

*

パリ——
レミーにとって二年ぶりのパリだった。
この街で生まれ育ったレミーだったが、良い思い出はあまりなかった。
顔も憶えていない母は、ピガール広場の街娼だったらしい。レミーの母は、商売に愛は禁物だというのに、小金をばらまきパリの街を我が物顔に歩き巡る日本人に騙され、同棲し、レミーを身籠ったという。島田という名の日本人商社マンは、養育費相当の小切手をしぶしぶ書いて母に渡すと、逃げるように帰国したという。その男が母の部屋に置き忘れた免税品のコニャックの銘柄がレミー・マルタンだった事から、生まれてきた女の子にレミーという名をつけたという。
——イージーなんだから、失礼しちゃうわよ。——
母はレミーが二歳の時に病気で死に、レミーは気のいい外国人街娼達に可愛がられて育った。外

国人の街娼達は、気位の高いフランス人にとって最低の娼婦達だった。レミーは、そんな三流の街娼達の心をなごませる大切なマスコットだった。レミーは街娼達のおかげで、一流の教育も受けさせてもらい、厳格な寄宿舎で上流のマナーもマスターする事ができた。街娼達は、レミーの成長に、自分達の見果てぬ夢を託したのかもしれなかった。だが、レミーが十四歳の時、レミーの幸福は足元から崩れさった。売春禁止法の強化で、外国人娼婦達は国外退去を命じられたのだ。

レミーは一人ぼっちでパリの街に放り出された。身よりのない少女が生き馬の目さえ抜くパリの街で生きていくには、どれほどの苦労を必要としたか。レミーは自分の過去を多く語ろうとはしない。

女性ジャーナリスト、クロンカイトのインタビューに、レミーはこう答えている。

「三流メロドラマによくある『女の一生・青春編』ってとこかなあ……気がついたら、街のおばさん達（レミーは外国人の街娼達をこう呼んでいた）に教わったいろんな国の言葉が話せるのを役だてて、アフリカの外人部隊にしっかり入隊してたわ。そこでＥＩＣ（ヨーロッパ情報局）のエージェントと知りあって、アフリカで泥まみれになって戦争しているよりはましだろうと思って、ＥＩＣのスパイになったの……。なんだか、こう言うと、今度は三流アクションドラマ『女マタハリ・流転編』みたいで、ダサクってまいっちゃうけど、本当だからしゃあないわね。でも、スパイとしては結構、一流だったみたい。スパイって仕事はいろんな世界に詳しくなきゃ務まらないのよ。わたし、勉強家でしょ、ヘッヘッヘッ……。どうせスパイやるなら、いい線までいっちゃおうと思ったの……こんなこと、スパイやめた今だから言えるけど……」

真吾のエスコートで、ケン太とルーブル美術館を二日がかりで見学し終えたレミーは、シャンゼリゼを凱旋門に向かってそぞろ歩いていた。
「あっ、これ、ね、レミー！」
ケン太が、すっとんきょうな叫び声をあげた。
✿「なんだ、こりゃ。へえ」
真吾も呆れたように言った。
レミーは、真吾とケン太がのぞいている画商のショーウィンドウを見た。
🐱「！」
そこにレミーがいた。いや、正確に言えば、フランシス・ルグランの新作絵画「恋する女・作品162」がそこにあった。
「ねっ、レミーにそっくりでしょ」
ケン太に真吾も同意した。
✿「ああ。まるでレミーをモデルにしたみたいだな」
🐱「あら、そう。私ってこんなに美人かしら。どうもありがと。でも大した絵じゃないわね」
レミーは平静を装い、歩きはじめた。
シャンゼリゼに面したビストロで、真吾達は軽い昼食を終えた。
✿「さて、帰る時間までは間があるし、今度はどこにいく？　こんなにのんびり出来るのはめったにない事だからね。楽しまなくっちゃ」

真吾は、ケン太というコブ付きではあるが、レミーとのデートを結構、楽しんでいた。
だが、レミーは真吾の思惑を無視したように言った。
「ね、私、ひとりでショッピングしたいんだけど……」
「ショッピング？　ひとりで？」
「女の買物につき合っても仕方ないでしょ。あなた達は映画でも見ていてよ……八時にここで待ちあわせ。いいでしょ。じゃあね」
レミーは立ち上がると、足早に出ていった。
「あっ！　レミー！　チェッ、なにがショッピングだ。観光ツアーじゃないんだぞ。もう、女って奴は……」
ケン太がポケットから通信機を出して言った。
「大丈夫。いざって時は通信機があるもの」
「まあな……」
真吾は、ボーイの持ってきた鑑定書を見てつぶやいた。
「こんな事なら、割り勘にするんだった」
この男、意外にセコイ一面があるのだ。

レミーは、「恋する女」を飾ってあった画商を訪れると、画商の主人に絵の作者を尋ねた。
「あの絵の作者？……ああフランシス・ルグランね」
「フランシス……やっぱり……今、彼はどこに……」

「彼は、ずーっと昔と変わらぬモンマルトルのアパートで絵を描き続けているよ。あなた、彼とどういう仲なの？」

「え？　いえ別に……どうもありがとう」

レミーは主人に礼を言うと、店を出た。行き先は決まっていた。だが、レミーの後ろ姿を見送る主人の目が異様に光ったのを、レミーは気付かなかった。

モンマルトルはレミーにとって忘れる事の出来ない街だった。生まれ育ったピガール広場もとこにあり、そしてなにより、モンマルトル墓地の近くには、レミーが唯一人愛したといえる男、フランシス・ルグランのアパルトマンがあった。

だが、レミーにとってフランシスは、二年前に死んだ筈の人だった。

——それが今も、あの思い出のしみ込んだ、古ぼけたアパルトマンの一室で絵を描き続けているなんて——

レミーは、見慣れたアパルトマンのドアの前でノックするのをためらった。だが、そのドアは開いていた。

そっとドアを押すと、キャンバスに向かっている男の後ろ姿が見えた。ただの一度も忘れたことのない後ろ姿だった。

「フランシス……？」

振り返る男の顔は、もう涙でぼやけて見えなかった。だが、忘れることの出来ないフランシスの声は、はっきりと聞きとれた。

「レミー……レミーじゃないか……」

＊

二人が出会ったのは四年前、スタンダールやベルリオーズ、ドガなど、芸術家が多く眠るモンマルトルの墓地だった。

当時、パリの街でスパイ活動を続けていたレミーにとって、殺伐としたその暮らしの中で、モンマルトルの墓地の静けさは救いだった。

ベンチに坐り、この墓地に眠る有名無名の芸術家達と無言で語りあうのが、レミーの安らぎの時だった。そして何度か足を運ぶうちに、向かいのベンチでスケッチをしている青年がいることに気がついた。

『あのう、よろしかったら、これ、あなたに……』

ある日、レミーの前にその青年がスケッチブックを持って立っていた。

スケッチブックには、様々な角度からとらえたレミーの顔が描かれてあった。

『断りもなく描いて、迷惑でしょうか？』

心配そうに聞く青年に、レミーはかぶりを振って答えた。

『いいえ、ちっとも……』

青年の名はフランシス……二人の間に恋が芽ばえるのに長い時間はかからなかった。

だが、ＥＩＣのスパイであるレミーは、任務についてはもちろん、自分の素性も秘密にしなければならなかった。

『レミー、僕は君の全てが知りたい。いったい君は何者なんだ』

フランシスの言葉に、レミーの胸は痛んだ。
――私の全てを知って欲しい。――
しかし、レミーの任務を知る事は、間違えばフランシスの命を危うくする事にもなる。レミーはフランシスに自分の全てを与えたが、素性だけは一度も話さなかった。やがて、フランシスも聞こうとはしなくなった。そして、モンマルトルのフランシスのちっぽけなアパルトマンで、レミーのささやかな幸福の時間が二年ほど続いた。

*

「何もかもあの時のままね。椅子もテーブルもベッドも……ピエールの店は今もやっているかしら」
「全てあの時のままさ……さ、いこう、ピエールの店へ」
二人のいきつけのカフェだったピエールの店は、昔のまま、表通りからちょっとはずれた街路にテーブルを出して、ひっそりと店開きしていた。
ピエールの店のカフェオレも昔のままの味がした。
『レミー、僕と結婚してくれ！』
レミーは二年前、このテーブルでフランシスが思いつめたように言ったこの言葉を、はっきり憶えていた。
『君が何をしていようが、どんな過去を持っていようが構わない。僕は今の君を愛しているんだ』
レミーは、コーヒーカップの中のカフェオレをスプーンでくるくる回した。

思い出も回っていた。
「まるで、きのうの事のよう……」
ふと目をあげると、昔と変わらぬフランシスの熱い視線が眩しかった。
二人は、どちらからともなく手を握りあった。
ポツリ、ポツリ、涙のような雨が二人の手の上へ落ちてきた。二人は空を見あげた。雨の勢いが強くなった。通行人達の足どりが早くなり、街角に傘の花が咲いた。
「僕のアパルトマンへ……」
「ええ」
立ち上がって表通りに駈けていく二人に、いきなり横合いから車が飛び出してきた。
「フランシス！」
レミーは、フランシスに体当たりして、車を紙一重でかわした。
「馬鹿野郎！　気をつけろ！」
車の運転手は二人に罵声をあびせかけ、走り去った。二人の身がわりになったかのように、レミーのバッグが車にひかれ路上につぶれていた。
レミーはバッグを拾い、中を開けた。通信機がバラバラに壊れていた。
フランシスがのぞき込んで言った。
「なに？　これ」
「え？　ああ、これ？　ウォーキングステレオ。壊れちゃった。高かったのにィ」
フランシスの目に、フッと冷たいものが走った。

雨はさらに激しさを増していた。

＊

六時、外はもう暗い。
フランシスのアパルトマンの窓辺に立ってバスタオルで濡れた髪をかわかしているレミーに、フランシスがブランデーグラスを差し出した。
「ありがとう」
レミーは、ブランデーを舌の上で転がし、言った。
「カミユのエクストラ……こんな高いお酒……」
「君の好きな銘柄だろ。苦労して買ったんだ」
「まるで私が現れるのを知ってたみたい」
「この二年間ずっと待っていた。君の絵だけを描き続けて……きっと君はどこかで生きていてくれると信じてたね」
「フランシス……」
「あの日もこんな雨だったね」
フランシスは窓の外を見つめた。
レミーはコクリと頷いた。
――そう、あの日、私は追われていた。私は重大なミスを犯した。私はそのミスの内容を憶えてはいない。洗脳によって、その部分の記憶をかき消されていた。しかし、ミスはミスだ。失敗はス

パイにとって死を意味する。私は殺される。もう行く所はフランシスの胸の中しかなかった。――
レミーの脳裏に、二年前のあの日が鮮明に甦って来た。

『フランシス、お願い。私と逃げて！』

『何があったんだ、レミー』

『とにかく早く』

フランシスに逃げる理由(わけ)を話している余裕はなかった。追手はすぐそこまで迫っている。雨の降りしきる夜のパリを、二人は逃げ続けた。

何時間走ったことだろう。遂に二人は、セーヌ川にかかるロワイヤル橋の上で追手に囲まれてしまった。理由(わけ)もわからぬまま、必死にレミーを庇(かば)おうとするフランシスの肩に、鈍い音を響かせて消音銃の銃弾がはじけた。

『レミー！』

レミーの名を叫びながら、フランシスは水嵩(みずかさ)の増したセーヌ川に落ちていった。

『フランシス！　フランシス！』

レミーは、フランシスの後を追ってセーヌへ身を投じようとした。

が、その体を数人の追手がおさえつけた。

ＥＩＣの地下牢に投獄されたレミーに残されたものは、処刑までのわずかな時間だけだった。

だが、フランシスを失ったと思い込んでいたレミーにとっては、その僅かな時間すら生きている

のが苦痛だった。
レミーは、胸に下げたフランシスの写真の入ったロケットのガラスを割った。
破片を左手首につきつけた。
――これで楽になれる。――
その時、レミーの背後から、低く落ちついた声が聞こえた。
『その命、捨てるつもりなら、私に預けてみないかね』
思わず振り返ったレミーの前に、がっしりした体格の、頭を剃り上げた男が立っていた。
サバラスだった。

*

「あれから、もう二年もたつのね……」
雨の降りやむ気配はなかった。
いつの間にかブランデーグラスはからになっていた。
フランシスが窓の外を見つめながらつぶやいた。
「僕達、またあの時のように離れ離れになってしまうのかい……、君のこと、何も知らずに……」
レミーは答えられなかった。
「それは……」
「分かっているよ、君が言いたくないって事は。でも、もう僕はいやだ。レミー、僕はこれから先も、君の事何も知らずに……君が生きている事すら知らされずに……この絵を相手に君の事を思い

続けなければならないのか？　もう、そんな生活は沢山だ……」
「フランシス……」
「知りたいんだ。君のすべてを……」
時計が八時を指していた。
真吾達との約束の時間だ。
レミーは、約束を破ってもいいとすら思った。
「レミー」
レミーの左手に、フランシスの手が重なった。
その時、レミーの右手からブランデーグラスが落ち、床で割れた。レミーの目には、フランシスの顔が霧のかかったようにみえた。
——！……どうしたの、私は……このめまいはなに？——
フランシスの声がこだまのように響く。
「知りたいんだ、君の全てを……レミー、愛しているよ」
「フランシス……!!」
レミーは、フランシスの腕に倒れ込んだ。
「レミー、君の全てを知りたいんだ」
フランシスの声がしだいに遠くなっていく。
——この感じは、昔、どこかで……確かスパイ時代に、自白剤を飲まされた時の感じ——
レミーは、そこまで思って意識を失った。

＊

シャンゼリゼのビストロは、とっくに閉店時間を過ぎていた。
真吾とケン太は、店の前で傘をさしてレミーを待つよりなかった。
通信機には、レミーの応答はまるでなかった。くたびれ果てたケン太が、真吾の服の袖を引っぱった。
「ねえ、レミーを捜そうよ……」
「捜すといったって、この広いパリだ……とても無理だよ……」
「どうしよう」
「待つよりない。なんてこった！」
真吾は、レミーの無事を願うよりなかった。

＊

レミーは夢うつつで、男に抱かれている自分を感じていた。その男はフランシスの筈だった。だが、二年前とはどこかが違っていた。何もかもが少しだけザラついていた。
「違う！　フランシスじゃない。あなたは昔のフランシスじゃない」
レミーは夢の中で叫び続けた。
隣の部屋でフランシスの電話をかける声が聞こえた。その声で目を醒ましたレミーは、フランシスのベッドに裸で寝かされている自分に気づいた。そして、頭の奥に残る鈍い頭痛は、自白剤を飲

まされた事を物語っていた。
「あのブランデーに……フランシスが……まさか……」
時計を見ると午前一時を指していた。五時間眠っていた事になる。普通の人間なら、自白剤を飲まされて五時間で回復するなど、到底無理な事だったが、ＥＩＣのスパイだったレミーの体は、薬物に対する抵抗力がついていた。
レミーは、フランシスの電話に耳をかたむけた。
「分かった。今すぐ屋敷に戻って、情報を送るよ」
そう言うとフランシスは電話を切り、部屋に戻ってきた。レミーは、眠っている振りを続けた。
フランシスは、そんなレミーを見つめ、
「レミー、もう君を二度と離さないよ」
そうつぶやいて、額にキスし、部屋を出ていった。
レミーは素早く着がえると、フランシスの後を追った。アパルトマンから出たフランシスは、駐車していたベンツの最高級のエアカーをスタートさせた。レミーはタクシーを拾うと、運転手に尾行させた。
ベンツはブローニュの森に隣接する、パリ最高の高級住宅地、パッシー地区の、とある屋敷の中へ入っていった。
屋敷の門の近くでタクシーから降りたレミーは、運転手に聞いた。
「このお屋敷は？」
「今、売り出し中の新進画家、フランシス・ルグランのお屋敷ですよ」

「なんでも、あの小さな絵が百万フランを下らないそうでね。俺も一度は、こんな屋敷に住んでみてえや。じゃあ」

運転手はぼやきながら、レミーを残し、タクシーを発進させた。

「フランシスが、こんな屋敷に……」

レミーは、軽い身のこなしで塀をよじ登った。スパイだったレミーにとって、この屋敷にセットされている防犯装置の目をくらます事などたやすいことだった。

屋敷の中の大広間で、フランシスは壁にすえつけられたビジョンを通してブンドルと交信していた。

フランシスはブンドルに、マイクロカセットを見せた。

「これにレミーの声が全て録音してある。グッドサンダーの位置はシェルブール沖、西五十キロだ」

「よくやった、フランシス。そのカセットを送ってもらおうか」

フランシスはブンドルにニヤリと笑っていった。

「一億フランでならな」

「なに？　お前の絵には、ドクーガが随分投資している筈だぞ」

「僕の絵は、僕の絵だ……僕の絵にはそれだけの価値がある。取り引きは取り引き、嫌なら、このカセットは別の買い手を見つけるだけだ」

「売り出し中の？」

「なんということだ……金に目がくらみおって。それでもお前は芸術家か……」
「芸術は金がかかる。どうするかね、ドクーガの諸君」
フランシスはカセットをちらつかせた。
突然、そのカセットが、背後から放たれたレーザーで燃え散った。
振り返るフランシスの前に、レミーが銃を持って立っていた。
「レミー」
レミーの目は、涙でうるんでいた。
「信じられないわ。フランシス、こんなことって……あなたは、そんな人じゃなかった筈だわ」
ビジョンの中のブンドルがレミーに話しかけた。
「これはようこそ、グッドサンダーの美しき戦士よ。お目にかかれて光栄ですな。悲劇もまた美しい。皮肉な事だが、ごらんのように、君の恋人は今やドクーガの手先だ」
フランシスが叫んだ。
「手先？　よしてくれ、僕は手先なんかじゃない。お前達は、僕の絵に正しい値段をつけただけだ」
フランシスは、大広間のドアを開け放った。
「レミー、見るがいい。この絵を……」
次の間の壁には、レミーの肖像画が数十枚陳列されていた。
「僕が貧しかった時には、朝のパン代にもならなかった。だが、ドクーガが正当な値段をつけた今……一枚、百万フランを下らない……パン代にもならなかったこの絵がだ」

ブンドルは呆れかえったといった口調で言った。
「少しは恩を感じてもらいたいものだな」
「恩？　僕の絵にはそれだけの価値がある。当然のことだ。見てくれ、レミー、この屋敷を……これを手に入れたのは、僕の才能だ」
フランシスは狂ったように、次々に広間に連なる部屋の扉を開いていった。
それぞれの部屋に豪華な調度品、美術品が無造作に置かれてあった。
レミーの顔に失望の影が差しはじめた。しかし、フランシスは得意の絶頂だった。
「だがな、レミー。僕の才能はこんな屋敷だけにおさまる才能ではない。僕は二十一世紀のダ・ビンチだ。そして、レミーを描いたこの絵は二十一世紀のモナ・リザなんだ。二十一世紀のダ・ビンチにはもっともっと巨大な富が必要なんだ」
「フランシス。あなたの絵は、お金のため？　あなたは、今まで私の何を描いたの」
「なにもかもさ。そして、これからも描くつもりだ。君の全てをね。レミー、君はここにいていいんだよ。僕達は、これからこの屋敷で傑作を作り続けるんだ……」
レミーは、痛ましいものを見たかのようにかぶりをふった。
「あなたにはもう何も作れない……何も描けないわ」
「なに？……」
ブンドルはうなずいて、レミーに語りかけた。
「マドモアゼル・レミー、あなたと私は敵同士だが、どうやら芸術に対する意見だけは同じなようだね。金に目のくらんだその男には、もはや芸術は生みだせぬ。どうやら、とんだ眼鏡違いをした

ようだ」
　レミーはブンドルを見すえた。
「許せない。この人を変えてしまったお前達が……」
「憶えておこう、その台詞！　もし君がそこから生きのびる事ができたならな……」
　ドクーガのスナイパーが三体、広間に入って来た。
「!!　なんだ、お前達は……」、フランシスが叫んだ。
　ブンドルはフランシスを指さし、宣告を下した。
「お前の絵は一文の値うちもない。美しくないものは抹殺する。せめてもの告別に、ショパンの『別れの曲』を送ろう！」
　大広間に「別れの曲」が流れ、スナイパー達が射撃を開始した。
　レミーは一瞬早く、フランシスに体当たりして、二人もろとも大理石の彫刻の陰にかくれ、レーザー銃で応戦した。
　激しい撃ち合いで壁の絵が次々と炎上していった。
「!!　僕の絵が、僕の絵が……やめろ！　やめてくれ……！」
　フランシスは、レミーの止めるのも聞かず、発狂したように飛び出していった。
「フランシス……」
　レミーは後を追おうとするが、スナイパーの銃撃で思うに任せない。
　スナイパーの銃弾は、次々にフランシスの体に叩きこまれていった。手傷を負いながらも、レミーが最後のスナイパーを撃ち倒した時、屋敷は炎につつまれていた。レミーは、燃えていく絵の山

にすがりつく瀕死のフランシスを見つめた。
フランシスは、すでに狂っていた。
「来るな！　手を出すな。僕の絵に……僕のレミーに手を出すな」
フランシスは、レミーから絵を守るように抱きしめた。
「フランシス……」

ブンドルの写っているビジョンが、そんな二人を見降ろしていた。
「マドモアゼル・レミー、あなたの戦いぶりをとくと拝見させてもらった。美しい……その画家は、あなたの美しさに似合わない」
ブンドルの表情は、素晴らしい美術品を見つけた時のように優しかった。レミーは、ビジョンのブンドルを無表情にみつめると、いきなりビジョンを撃った。
ブンドルの姿は点になって消えた。
レミーは銃をフランシスに向けた。
「僕の絵に……僕のレミーに手を出すな……」
レミーはかぶりをふり、銃を降ろし、広間を出ていった。その背中に、フランシスの絶叫が聞こえた。
「やめろ、やめてくれ。ああ、僕の絵が……僕の屋敷が……」
レミーの表情は、ピクリとも動かなかった。
屋敷を出たレミーに、もう一度、フランシスの絶叫が聞こえた。

「レミーイッ！」
レミーは立ちどまった。あの声は聞きおぼえがあるような気がした。そう、レミーをかばってセーヌ川へ落ちていくフランシスの絶叫と同じような気がしたのだ。
レミーは、ふっと屋敷を振り返った。
炎上する屋敷が崩れ落ちていく。
「さよなら、私のモンマルトル……」
レミーは一言つぶやいて、歩き始めた。もう後ろは振り向かなかった。

＊

シャンゼリゼのビストロの前で、真吾とケン太はぐったりと坐っていた。
🐱「ごめん、遅れて」
レミーが後ろからポンと肩を叩いた。
真吾は振り返らず、答えた。
✿「レミー、八時って、朝の八時の約束か？」
レミーの姿を見たケン太が叫んだ。
「!!　レミー、どうしちゃったの、その格好」
✿「ん？」
振り返った真吾の前に立つレミーの服はボロボロで、体は傷だらけだった。
✿「レミー……」

「今日は何も聞かないで……」

「…………」

真吾はうなずいて、ぼそりとひとこと言った。

「無事でよかった」

その時、真吾の通信機が鳴り、サバラスの声が聞こえた。

「敵が接近中、至急戻れ！」

「遅れた分、とりかえすわ」

レミーは、二人にウインクして、走り出した。

その表情は、何もかもふっ切れていた。

第六章 さらば青春の日々

二十一世紀。世界の映画界は完全に二分されていた。カットナル娯楽産業系のアメリカハリウッド映画と、ブンドル芸術産業系のヨーロッパ映画である。蛇足ながら、日本映画は二十世紀末の不況で、ただでさえ細々としていたその命運を絶っている。

ヨーロッパ最大の撮影所であるイタリアのティネッチタ撮影所をメインスタジオにして、独断と偏見に満ちた芸術映画を作り続けているレオナルドメディチ映画の会長がブンドル局長である事は、知られざる事実である。この撮影所で、ブンドルの命令により、一般公開を目的としないプライベートフィルムが完成されようとしていた。題名は「さらば青春の日々」。この映画が普通の映画と少し違っていたのは、現実の人間の戦闘ドキュメントフィルムが中心になって構成されている事だった。

主人公は、グッドサンダーのファイター・北条真吾、彼がドイツ南部の街、ミュンヘンで出会った出来事を、すみからすみまで、レオナルドメディチ映画の操る映像収録装置と集音装置、電波装置によって捉えた実写フィルムを元にし、北条真吾の過去を俳優による再現フィルムで作り、編集したものである。

編集の際、用意されたシナリオを極秘に入手した私は、記録的価値からここに記載しようと思う。

このシナリオに描かれている内容は、ブンドルの執拗なまでのドキュメンタリー精神で、ドクーガの描写も含めて、ほとんどが事実である。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

＊

○レオナルドメディチ映画作品
　バラのマーク。

○タイトル
　ドイツ語で、「さらば青春の日々」
　黒地にさりげなく、小さく、白い活字で――

○オクトーバーフェスト（ミュンヘン）
　スーパー「ミュンヘン・オクトーバーフェスト……世界最大のビール祭り」
　「ビヤ樽ポルカ」が流れている。
　広大な公園に巨大なテントがいくつも張られ、何万人という人が、歌いかつ飲み、大変な騒ぎである。
　その喧騒の中、ひとり、ただようように歩く真吾。

真吾「変わっていない、何もかも……」
　その顔が銃のフレームに入った。

○公園の傍のホテル、窓際
　銃を持っているのはシュミット・ヘンケン。
　ひげだらけの顔に光る目は精悍(せいかん)である。
　傍にドクーガの情報員がいる。
　シュミット、銃を下ろす。
情報員「なぜ撃たん、あの男が標的なんだぞ。今がチャンスではないか」
シュミット「殺しのやり方、そして時間は俺が決める」
情報員「何だと、ドクーガに逆らうつもりか？　ドクーガは、今度の仕事に一億ドルも払っているんだぞ」
シュミット「引き受けた仕事は果たす……だが、俺はフリーの壊(こわ)し屋だ。俺のやり方に口を出す奴は、たとえドクーガでも……」
　銃を情報員に向ける。
情報員「……わ、わかった……出すぎた事を言ってすまない」
シュミット「標的は確認した。さあ、俺の前から消えろ。目的を遂げるまで、口出しする奴は、依頼主でも邪魔者として消す」
　シュミット、ニヤリと笑う。

○ドクーガ司令部
　ビジョンにシュミットの顔が写っている。
　ブンドル達がいる。
ブンドル「通称ブルーシャーク。敵からも味方からも恐れられているプロの壊し屋……我々ドクーガもかなりの軍事基地を壊されている」
カットナル「そんな危険な男をなぜ生かしておく」
ブンドル「彼は請け負った仕事は完全にやりとげるプロだ。その仕事に敵味方の区別はない……ならば、味方として使うよりないではないか」
ケルナグール「しかし、何とも生意気な奴だな」
カットナル「フン、この仕事が終われば消せば良い……」
ブンドル「それに、今回はとっておきの趣向がある」
カットナル「趣向？」
ブンドル「この戦い、隅から隅まで我々の映像装置、電波装置、集音装置が立体的に追いかけている。見ものだぞ……」

○墓地（オクトーバーフェスト会場付近）
　遠くでポルカが聞こえる。
　真吾が来る。

ふと足を止める。
花売り馬車の屋台がある。
花屋の娘に、
真吾「白いユリの花を、ありったけくれないか……」
娘は一本のユリの花を出す。
娘「すいません、これだけしか残っていないんです。先刻来たお客さんが、殆ど買ってしまって……」
真吾「先刻来た客？……」

○とある墓の前
真吾、ユリを持って来る。
墓の前にユリの花束が飾られている。
突然、銃声がして、真吾の持ったユリの花が吹っ飛ぶ。
シュミットが出て来る。
シュミット「お前に花をたむける資格はない」
真吾「シュミット……」
シュミット「お前はリリーを殺した。俺の恋人であり、しかも自分の婚約者である女をな……」
真吾「…………」

○回想（再現シーン）
　フィールドで、破壊訓練をするシュミットと真吾。
　機銃掃射の中、目標を爆破して、土壕に飛び込むシュミットと真吾。
真吾のN（ナレーション）「シュミットと俺は親友だった。そして、国連平和部隊の破壊工作員として一、二を争う腕前だった」
　壁から出る標的を、転げ回りながら撃ち終わるシュミット。
　見つめる真吾に、指でやったぜとばかり合図する。
　真吾が標的を撃ち始める。
　全弾命中する。
　合図する真吾。
　肩をすくめるシュミット。
〔注　回想シーンは、真吾、シュミット、共に本人に似た俳優にメーキャップを施し、演じさせる。演技を感じさせぬ、ドキュメントタッチで演出すること。真吾のナレーションは、実在の人物の声に似せて、コンピューター合成する。

○酒場（回想）
　ポルカが流れる。
真吾のN「そして俺達は、身寄りのないリリーという一人の娘を愛した」
　大ジョッキを前に、ボケーッと二人が一人の娘リリーを見つめている。

ビールをジョッキに次々についでいくリリー。
ボーイが真吾達の前に通りかかる。
ボーイを呼び止めた真吾。目の前のビールをリリーへ指さす。
ボーイ、OKをし、手を出す。
真吾、懐を探る。金がない。
シュミットと真吾、またボンヤリとリリーを見る。
ボーイがリリーの側に来て、何ごとか告げる。
リリー、にっこり笑い、大ジョッキにビールを注ぐ。そして、真吾とシュミットにジョッキで会釈する。
シュミットと真吾、やったとばかりに立ちあがり、ジョッキで会釈する。
リリー、楽団達に合図する。
「ビヤ樽ポルカ」がかかる。
リリー、一気に飲み出す。
シュミットと真吾も一気に飲み出す。
「ヤレ、ヤレ！」と酒場の一同も、拍手で煽りたてる。
リリー、一気に飲み終える。
赤らんだ頬にさわる。
シュミットと真吾も飲みほし、会釈する。
リリー、さーッと走って来て、シュミットと真吾に軽くキスをする。

シュミットと真吾、顔を見合わせ、やったと親指で合図し、次の瞬間、目を回しダウンする。
「ビヤ樽ポルカ」が、ショパンの「夜想曲・変ロ短調・作品9の1」に変わる。

○イメージ　セピア色の写真
ビアホールでかしこまって写っている三人。
軍服を着た真吾達と軍帽をかぶったリリー。
三人で自転車に乗る写真。
(注)みんな、コチコチで写っている写真であり、それがかえって、三人の関係を表現している。——即ち、公平な愛情……どの写真もCMのイメージのような、イージーな恋愛ムードはない。
真吾のN「そして、リリーも俺達二人を愛してくれた……多分……俺達と同じように……」

○墓場（現実）
真吾とシュミットがいる。
真吾「確かにリリーを殺したのは、俺かもしれない。だが俺は、今、死ぬ訳にはいかない……」
シュミット「だろうな。俺にとっても、これが最後の仕事のつもりだ」
真吾「どうしてもやるのか？」
シュミット、いきなり真吾の足元に、銃を撃つ。続いて連射される銃弾。
真吾「!!」

転げまわり、墓石の陰に隠れる真吾、シュミットも墓石に隠れる。
シュミット、カートリッジを取り替える。
シュミット「ケリをつける時さ」

○ドクーガ・司令部
ビジョンを見つめるブンドル達。
ブンドル「いよいよ始まったな。楽しもうではないか」
ケルナグール「まるで西部劇の決闘だな、くだらん」
ブンドル「これがブルーシャーク・シュミットの戦いの美学だ。それより、美学の分からんやからは、今のうちにゴッドサンダー攻撃の用意をしたらどうだ?」
ケルナグール「よーし、ゴーショーグンさえ動けなければ、ビムラー融合炉を傷つけずに手に入れる方法など、いくらでもある」
ネオネロス皇帝「ビムラーが爆発すれば、我々もろとも太陽系が吹き飛ぶ事を忘れるな……」
ケルナグール「ハッ!」
ケルナグール、出ていく。
ブンドル、ビジョンに写るリリーの写真を見る。
ブンドル「リリー・レーン……しかしこの女、死してなお、二人の男を戦いにかりたてる……それほどの魅力があるというのか……」

○墓地

　シュミットと真吾の激しい銃撃戦。
　墓石の間を駈けまわる二人。
真吾のN「どうしてこんな事に……」
　真吾、撃つ。
真吾のN「そう……そうだった。あの日から全てが変わっていったんだ」

○国連平和軍指令部（回想）

　真吾とシュミットを前に司令官が立っている。
司令官の声（エコー）「北条真吾、ならびにシュミット・ヘンケン……転属を命ずる。北条真吾はヨーロッパ地区部隊・情報センターに、シュミット・ヘンケンはアフリカ動乱地区の戦闘隊長に命ずる」
シュミット「戦闘隊長……？」
真吾「シュミット……」

○ミュンヘン、イザール川のほとり（回想）

　真吾とシュミットがいる。
シュミット「真吾、リリーを頼む……」
真吾「シュミット……」

シュミット「俺は戦場に行く……帰る見込みは殆どあるまい……その前にリリーの幸福を見届けたい。お前ならリリーを幸福にできる。真吾、リリーと結婚してくれ」
真吾「しかし、リリーの気持ちは……」
シュミット「昨日、リリーには別れを告げた……真吾、お前は誰よりもリリーを愛している筈だ」
真吾「……シュミット」
シュミット「そしてこの俺も、誰よりもあいつを愛しているつもりだ……畜生！」
　シュミット、いきなり真吾を殴る。
　吹っ飛ぶ真吾。
シュミット「諦めたよ……ただしリリーを不幸にしたら殺してやるからな」
　シュミット、倒れた真吾に握手を求める。
シュミット「さあ、もうすぐビール祭りだ……結婚発表は派手にやろうぜ！」
真吾「シュミット……」
　ニッと笑いかえすシュミット。

○墓場（現実）
　真吾の隠れている墓石を弾がかすめる。
　我に返る真吾。
　銃弾をかいくぐり、墓場の外に飛び出す真吾。荒い息である。
真吾のN「そう、俺は誰よりもリリーを幸福にするつもりだった……だが……」

○国連平和部隊司令部（回想）

　真吾と平和部隊司令官。

真吾「なんですって、ミュンヘンのニューネロスの情報を探れ？」

司令官「世界平和にとって、ニューネロスの台頭は由々しき問題だ……」

真吾「お断りします……断れぬとあれば、軍を辞職致します」

司令官「秘密を知った以上、この仕事だけはやって貰わねばならん。君はもうすぐ結婚すると聞いている。奥さんに悲しい思いをさせたくなければ、やることだな……」

真吾「司令官……あなたって人は……」

司令官「平和を守るのは、やさしい事ではない。この仕事が終われば、後は自由にしろ……」

真吾「…………」

○街路・夜（回想）

　パーン！

鉄の扉を突破する車。

車を追って数人の男達が銃を撃つ。

たちまち、男達にサーチライトが当てられ、軍隊が男達を取り囲んでいる。

車が停まる。

車の中で目を閉じている真吾。

司令官が近づいて来る。
司令官「よくやった……」
真吾（書類を出す）「これでいいんですね」
司令官「ああ、終わったよ、これで……君は自由だ」
頷く真吾。目を閉じる。
真吾のN「だが、それは何の終わりでもなかった。いや、全ての始まりだと言えた」

○街路（現実）
走る真吾。
追うシュミット。
祭りに酔う人々の間を、ひたすら走る二人。

○ビール祭りの会場（現実）
真吾、入って来る。
真吾のN「そう、あれは、二年前の今日……この会場だった」
真吾、ふと前のテーブルを見る。

○同（回想）
二人を中心にして、客一同が肩をゆすって歌っている。

一人が立ち上がる。
不気味にセコンド（秒針）の音が聞こえる。
客「それでは、北条真吾、リリー・レーンの結婚発表を行います。国際結婚ではありますが、お二人とも身寄りのない一人ぼっち……二人の愛があれば、何ら問題もありません。それでは皆さん、乾杯！」
幸福そうな真吾、リリー、そして少し離れてシュミット……そのそれぞれのカットショット。
セコンドの音――
次の瞬間、大爆発が起こる。
悲鳴、怒号。
会場は、一瞬の内に地獄になる。
シュミットがよろけながら来る。
真吾が血まみれで倒れている。
その手に握られたリリーの手。
シュミット「リリー……リリー……」
シュミット「!!」
リリーは巨大な柱の下敷きになっている。
真吾「リリー……リリーは……」
シュミット「…………」（かぶりを振る）
真吾、ガックリと頭をたれる。

○暗闇

遠ざかっていくリリーの面影……。

真吾のN「それは、俺一人に復讐するための、ニューネロスの無差別爆弾攻撃だった。リリーを含め、五十四人が死んだ」

○病院・手術室（回想）

包帯だらけの真吾が運ばれて来る。

シュミットが駈けよる。

シュミット「真吾……リリーを殺したのはお前だ。なぜ結婚を前にして、ニューネロスなんかと係わった。なぜ危険な仕事をしたんだ。俺はお前を殺してやる……」

真吾の包帯だらけの目から涙が落ちる。

真吾のN「そう……俺がリリーを殺したのかもしれない……そして五十三人のなんの罪もない人の命も……」

○倉庫、夜（回想）

その地下はニューネロスの会議場である。

○ニューネロス会議場（回想）

ニューネロスが会議している。

会議員「平和部隊への報復措置は、死者五十四名の大成果を収めました。これで政府も軍隊も震えあがる事でしょう」

一同、挙手して「ニューネロス万歳！　ニューネロス万歳！」

突然、電灯が消える。

会議員「な、何事だ！」

と、スピーカーからシュミットの声がする。

シュミットの声「大成果はこれからだぜ。ニューネロスの諸君……俺は、お前達の攻撃の巻き添えをくって最愛の人を殺された男だ……死んで貰う」

○倉庫を見降ろす丘の上、夜（回想）

シュミットが、手に持った起爆装置のスイッチを入れる。

吹っ飛ぶ倉庫。

シュミット「次は、真吾だ……」

シュミットは表情を変えない。

○病院・病室（回想）

真吾が横たわっている。

ツカツカと靴の音がする。

目を開く真吾。

サバラスである。

〔注〕サバラスに関する資料は皆無である。おそらく、中年の、冷静沈着な人物と想像される。演じる役者は、慎重なオーディションによって決定されたし。

サバラス「昨日、君の友人は、たった一人でニューネロスに大打撃を与えた……今、その生死は不明だがな……」

真吾「シュミットが……」

サバラス「うむ。だが、ニューネロスは所詮悪の組織のほんの一角にすぎない……」

真吾「ほんの一角?……」

サバラス「本当の敵は別にいる。共に戦わないか?」

真吾「………」

真吾のN「俺はグッドサンダーのファイターになり、そしてシュミットは……」

○ビール祭り会場（現実）

ハッとなる真吾。

真吾の首筋に銃が突きつけられる。

シュミット「プロの壊し屋、ブルーシャークという訳さ……外に出ろ！　リリーの死んだ所でお前を殺したくない」

真吾、いきなりテーブルの上のビールを後ろ向きにシュミットにかけると、シュミットをテーブルの上に背負い投げで投げつける。

シュミット、真吾のズボンのポケットにマイクのようなものを投げ入れる。
真吾、会場から飛び出して行く。
胸のポケットの通信機が鳴る。
真吾、取り出す。
サバラスの声「敵の攻撃が始まった」

○湖

浮上したグッドサンダーの前方に、ケルナグール軍団が雲霞(うんか)のようにいる。

○グッドサンダー、司令部
サバラス「真吾……急げ！」

○公園
真吾「了解！」
祭りのテントからシュミットが現れ、銃で撃つ。
茂みに転がり込む真吾。
真吾「キングアロー、Go！」
銃を構え、茂みに近づくシュミットの目前から、キングアローが飛び出す。
シュミット「!!」

○キングアロー、コクピット
真吾「シュミット、勝負は預けたぞ」

○広場
　シュミット、ニヤリと笑い、駈け去る。

○ドクーガ基地
カットナル「なんたる事、これでは結局、ゴーショーグンを引き止められんではないか……」
ブンドル「まあ、見ておれ。クライマックスはこれからだ。世界一の壊し屋の真価が見られるぞ」

○上空
　宙を飛ぶキングアロー。
　突然、猛スピードでキングアローを追い抜いて行くスマートな機体がある。

○キングアロー、コクピット
真吾「何だ、あれは！」
　ビジョンにシュミットが割り込む。
シュミット「これが俺のブルーシャーク……一匹狼の壊し屋が生きてゆくには、この程度のものが

最低必要でな……いくぞ、真吾！」

○上空

キングアローに襲いかかるブルーシャーク。
もつれるように、切り裂くように、自在に飛び攻撃しあう二機。

○ドクーガ基地

ブンドル「美しい。これぞ戦いの極致……」

○上空

グッドサンダーと戦うケルナグール軍団に、キングアローとブルーシャークが戦いながら近づいて行く。

○グッドサンダー、司令部

ファザー「キングアロー、接近中！」
サバラス「よし、ゴーショーグン、用意！」
キリー、レミー「了解！」
二人を乗せた座席が下りていく。

○グッドサンダーからゴーショーグンが現れる。
　しかし、ブルーシャークの攻撃で、キングアローはなかなか合身できない。

○ケルナグール母艦
ケルナグール「キングアローをゴーショーグンと合身させるな。攻撃開始……」

○ケルナグール軍団、キングアローに襲いかかる。

○ドクーガ基地
ブンドル「バカめ！　余計な事はするな」

○ブルーシャーク、コクピット
シュミット「よせ！　真吾を倒すのはこの俺だ！　くそ！　邪魔をするな！」

○ブルーシャーク、ケルナグール軍団を落とす。
　その隙に、ゴーショーグンに合身するキングアロー。

○ゴーショーグン、コクピット
真吾「Go！　フラッシャー、Go！」

たちまち撃ち落とされるケルナグール軍団。
ブルーシャーク、猛烈な速度でゴーフラッシャーを回避する。

○ケルナグール母艦
ケルナグール「ブルーシャークめ……何をするか！」
シュミット「俺の邪魔をする奴は消す……」
ビジョンに以下が写る。
ブンドル「ケルナグール、プロの美学を知らぬあさはかな奴。お前が余計な事をしなければ、ブルーシャークはキングアローを倒していたかもしれぬぞ」
ケルナグール「むむ、ケルーナ！」
おずおずと出てくるケルーナ。
ケルナグール、ケルーナを叩く。
ブンドル「おぞましい奴。（ビジョンのシュミットを見て）だがブルーシャーク、これは失敗には違いない」
シュミット「どうせ成功しても、俺を殺す気だろう。だが約束は果たす……。真吾！　答えろ、ここまで来て逃げる気か？」

○ゴーショーグン、コクピット
真吾「やるよりなさそうだな……」

レミー「真吾、馬鹿な事はやめて……あなたが死んだらゴーショーグンはどうなるの」
真吾「男は、けじめが必要だ」
キリー「日本人って奴は……！　俺あ、もう知らん」

○ゴーショーグンからキングアローが飛び出していく。

○湖上

〔注〕この部分のシュミットの声は、盗聴集音マイクにより集音した実声を使用すること。
対峙するキングアローとブルーシャーク。
その上に立つ、銃を持つ真吾とシュミット。
シュミット「お互い、千キロのスピードですれ違い……すれ違いざまに五発撃つ。分かったな」
真吾「了解……」
シュミット「リリーの後を追わしてやる」
真吾「生きるも地獄、それもいいかもな」

○ドクーガ基地
ブンドル「この私さえが赤面するほどキザな台詞……こうまで言わせるリリーという娘は……」
マザーの声「リリー・レーンの調査結果が入りました」
ブンドル「なに？」

ビジョンにリリーの写真が写る。
マザーの声「リリー・レーンの生まれ、年齢、本名不明。ただ、不幸な境遇から八年前、父親の知れぬ子供を生み、北条真吾やシュミット・ヘンケンをはじめとして、周りにはひた隠しにしていました」
カットナル「子供がいた？　なんてこった。ではあの二人、その娘に騙されていたんだな」
ブンドル「痛ましい……子を持った若い娘があの二人の愛にすがろうとした気持ち、分かるような気がする……」
カットナル「しかし馬鹿な奴らだ。女に騙されているのも知らずに命を賭けているとはな……」
ブンドル「言うな。人それぞれ、愛のかたちはある……それより二人の勝負を見つめよう」

○湖上
　頷き合う真吾とシュミット。
　キングアローとブルーシャーク、走り出す。
○かたずを飲むレミー、キリー、オバ、ケン太、サバラス。
　銃を構える二人。
　すれ違う二機。
　真吾撃つ！　五発！
　シュミット撃つ！　五発！

真吾の肩から血！
シュミット、銃を落としコクピットに倒れる。
ブルーシャーク、そのまま崖に激突、大爆発を起こす。
真吾、無言──

○ドクーガ基地
ブンドル「終わった……悲劇は……幕をひけ……」
カットナル「しかし、一億ドルは惜しいのう……」
ブンドル「言うな。我々を悩ませたブルーシャークがいなくなっただけでもよしとせねばな……」

○湖上
炎上するブルーシャークを、万感の思いで見つめる真吾。
夜想曲、高鳴って──

END MARK

＊

ここで、レオナルドメディチ映画が用意したシナリオは終わっている。だが、現実には別のシナリオがあった。そのシナリオは次のように続いている。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

*

○墓地

老人（シュミットの変装）が、花売り娘に話している。

シュミットは生きていたのである。

老人（シュミット）「あそこが、お前さんのお母さんの眠っている所さ、でもこれは内緒……いいかい。毎年、ビール祭りの頃になったら、あのお墓にいっぱいユリの花を飾ってあげるんだよ」

娘「うん、でもおじいさん、ずーっといてくれるんでしょ」

老人（シュミット）「勿論さ、君が大人になる日までね」

老人、墓の前に来る。

ユリの花が美しい……。

老人、ポケットマイクを出す。

老人（シュミット）「ドクーガから巻き上げた一億ドルは、あの子のために必ず役立てる。それでいいね、真吾」（シュミットの声）

○グッドサンダー基地

真吾、ポケットマイクに語りかける。

真吾「その子のために君が作った芝居だ。リリーの子供は任せるよ、シュミット」

○墓場

老人（シュミットの声）「もう会う事もないだろう。アウフ、ビーダーゼン、さよなら」（シュミットの声）

老人（シュミット）、ポケットマイクを空に投げ、銃で撃つ。

○グッドサンダー基地

真吾、ポケットマイクを床に落とし踏む。

真吾「そう、会わない方がいい……アウフ、ビーダーゼン、シュミット」

サバラス が来る。

サバラス「真吾、出発だ」

真吾「了解！」

立ちあがる真吾。

○グッドサンダー、瞬間移動を開始する。

END MARK

真吾とシュミットが用意したこのシナリオの存在を、ブンドル局長は最後の最後まで気付かなかった。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

＊

第七章
宇宙中継
これがドクーガだ！

グッドサンダーの乗員について――

三人のファイターの過去については、今まで以上の言及は避けたいと思う。彼らは自らの過去を語りたがらないし、過去を引きずらずに生きる事を潔しと思っている人達である。彼らにとって大切なのは、今、この時をどう生き抜くかなのだ。

さて、その他の乗員、サバラス隊長については、全く謎の人物というよりない。何度インタビューを申し込んでも、答えてはくれなかった。もう一人は、真田ケン太君。この少年については、本人よりも教育用メカ、オバの話が興味深い。

――オバ――

旅に出て一年たった頃には、ケン太君は、私の持っている小・中学生用の教材は全てマスターしてしまいました。だからといって、人並はずれて優秀という訳ではありません。ケン太君の勉強嫌いはメカの許容範囲を超えるもので、毎日、逃げ回るケン太君を追いかけて、私の移動用駆動部は消耗度の激しい事、もう三回も部品交換をしているんです。本来なら、部品の保証期間は八年ですから、まだ一度も交換しなくていい筈なんですけれど……。そんなケン太君が、一年間で教材をマスターしたというのは、ひとえに私の教育プログラミングの優秀さにあると思います。いえ、威張って言ってるんじゃありません。私を作った真田博士が優秀な方だったという意味です。

ただ最近、私、ケン太君の教育に限界のようなものを感じているんです。人間の情緒面に関するメカの限界は私も心得ております。例えば、ケン太君が一番身近にいる女性、レミーさん

に恋に近い憧れを抱いた事がありました。私は人間の感情の細かい機微はわかりませんが、児童心理学上、ケン太君の女性への思いを理解する事ができます。

それよりも心配な事は、物に対する異常なまでの優しさです。人間の友達や動物に対する優しさは理解できます。しかし、その他のもの……例えば、メカに対する優しさには行き過ぎとさえ思えるものがあるのです。ケン太君の口癖、「メカは友達」……メカである私には嬉しい言葉ですが、私達に襲いかかってくる敵のメカにさえ見せる優しさは、いったい何なのでしょう。ゴーショーグンが敵のメカを破壊するたびに、ふさぎ込み、部屋の中で敵メカが可哀相だと泣いている姿を何度も見た事があります。メカは所詮メカです。人に使われる道具です。そこいらの割り切りのない優しさに私は不安を感じるのです。今は、グッドサンダーの中に住んでいるからいい、しかし、実社会に出て、生き馬の目を抜くような現代を、あの優しさで乗りきる事が出来るでしょうか。

ケン太君はひ弱な子ではありません。むしろ、逞しいやんちゃ坊主です。しかし、あの優しさだけは、人生を生き抜くためのウイークポイントになるのではないかと不安でならないのです。あーっ！（この時、ジェッターエースで外へ飛び出していくケン太君の姿がビジョンに写った）ケン太君、勉強の時間だってのに、またとんずら……すいません、失礼します。待ちなさい、ケン太君、ん、もう、許しませんよッ！——

オバは、ジェット噴射で宙を飛んでジェッターエースを追っていった。毎日この調子では、確かにオバの駆動部分もたまったものではないだろう。

ケン太君のメカに対する優しさはともかくとして、メカに対する知識、修理能力は、人並は

ずれて優れていたようである。
　ロンドンにあるドクーガの秘密ロボット工場に忍び込み、コンピューターの機能を変え、戦闘ロボット製造工場を停止させ、ドクーガに多大な損害を与えた事件など、ケン太君でなければ出来ない事であり、動機が「メカに悪い事はさせられないからやっただけだよ」というものであったにしろ、その活躍はグッドサンダーの他のメンバーにひけをとらないものであった。まさに、グッドサンダー五人目のファイターと呼ぶにふさわしいものであった。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

＊

　東京から始まったグッドサンダーの旅は、すでに五十回を超える瞬間移動で世界各地に姿を現し、その度に、ドクーガとの間で大なり小なりの戦闘を繰り返したにもかかわらず、ドクーガとグッドサンダーの存在を知る者はあまりに少なすぎた。ドクーガの報道管制を打ち破らぬかぎり、グッドサンダーの戦いは広がりも同志もない、孤独なものでしかありえなかった。
　私こと、イザベル・クロンカイトは、どんな事をしても、闇の組織ドクーガの実態をあばき、グッドサンダーの戦いを全世界にアッピールしたかった。そして、そのチャンスが遂にや

ってきたのだ。

――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

＊

北極地点付近の視界ゼロに近い猛吹雪の中、グッドサンダーはその巨体を休めていた。
ここ数日、ドクーガの攻撃はなりをひそめていたし、極寒の地ではあってもグッドサンダー内部のコンディションはベスト。ファイターたちは、それぞれのフリータイムを楽しんでいた。
だが、久し振りのリラックスタイムも長くは続かなかった。ファザーの警報装置が、グッドサンダーに接近してくる正体不明の飛行物体を感知したのだ。レーダーに写っている飛行物体は、ドクーガのものにしては、飛行速度があまりに遅すぎた。
やがて、司令室のビジョンは、吹雪の中をフラフラと飛んでくる旧式のセスナ機を写しだした。
「こいつは年代物だぜ」
「無茶だ。あんなポンコツで北極を飛ぶなんて」
「助からんな、この吹雪じゃ……」
ファザーが、セスナ機から発信される信号をキャッチした。
「SOS、SOS、只今より不時着、グッドサンダー、救助頼む」

❀「おい、なぜ、俺達の事を知っているんだ?」
真吾が驚きの声をあげた。
🐱「御本人に聞くよりなさそうね。強行着陸するつもりらしいわ」
レミーの言うとおり、息もたえだえなエンジン音を響かせて、グッドサンダーの甲板に突っ込んできた。
ぶざまな不時着だった。翼はデッキにぶつかり、へしおれ、ヨロヨロとバッグを肩に持ったパイロットが飛び出して来て、次の瞬間、セスナ機は爆発を起こし炎上した。
「しっかりしろ!」
甲板に倒れているパイロットを抱きあげたキリーは、次の瞬間息をのんだ。
キリーの後ろからのぞき込んだ真吾も、呆気(あっけ)にとられてつぶやいた。
「女!?」
パイロットのずり落ちたヘルメットの中から、ショートカットの二十歳前後の女の顔が現れたのだ。それも、かなり整った顔だちの美女だ。
「何、見とれてんのよ」
レミーが叫んだ。
「その子、死にかかってんのよ！　早く！」
「あ、ああ……」
キリーと真吾は、慌ててイザベルをグッドサンダーに運び込んだ。

病室で治療を終え、カプセルの中で眠っている女の調査結果をファザーは一同に知らせた。
「全治三日間……軽傷です。所持品による女性の身元……イザベル・クロンカイト……二十一歳……ピュリッツアー賞をとったジャーナリスト兼ニュースキャスター、アート・クロンカイトの一人娘」
病室へ入って来たレミーは、裸で寝かされているイザベルのカプセルをはずして、聞いた。
「御気分は？」
目をパチクリさせてレミーを見つめていたイザベルは、すぐに歓声をあげた。
「わッ、うそッ！　レ、レミーさんですね……会えて良かった。取材させて下さい」
「えッ？　ええ、でも、どうして私の名前を？」
「父から聞いたんです。父はドクーガとグッドサンダーの戦いを調査していました。レミー・島田、巨大なる悪ドクーガと戦い、地球の正義を守るために青春をかけた女性ファイター、素晴らしい人です、あなたは……」
興奮して喋るイザベルに、レミーはポカンとつぶやいた。
「ハア……わしゃ、ワンダーウーマンか」
「ぜひお話を」
イザベルはレミーの目の前にマイクをつきつけた。
「ハア……」
レミーは、あいた口が塞（ふさ）がらなかった。

＊

「どうやら怪しい所はなさそうです」
レミーはサバラスに、イザベルについてそう報告した。
「うむ、ファザーのデーターによる回答も同意見だ」
「でも、このまま一緒にはいられないでしょ」
「かといって、この吹雪の中、放り出す訳にもいくまい。生活エリア内だけでも自由にさせてやれ」
「いいんですか？」
「生活エリア内に、知られて困る秘密はない」
イザベルは生活エリア内の自由行動を許された。だが、ファイター達には、知られて困る秘密を持った男もいるにはいたのである。キリーの秘密……それは、自らの半生を描いた自伝を執筆している事だった。
今日もキリーは、プライベートルームの中で葉巻をくわえながら、難しい顔でタイプを打っていた。
「キリー・ギャグレー作、ブロンクスの狼……第一章……俺には何もなかった。親も兄弟も、友達も何もかもなかった……ウーン、駄目だ！」
キリーは原稿を丸めて床に投げた。部屋中は紙屑の山……ここ半年、自伝の出だしの部分がどうしても書けないでいたのだ。と、部屋をノックする音がした。

「あん？」
ドアが開いて、イザベルが入って来た。
「あのう、キリーさんですね。あらっ……？」
イザベルはめざとく床の原稿をみつめ、拾いあげた。
「あっ、そ、それ……」
キリーは頭を抱えた。
「キリー・ギャグレー作、ブロンクスの狼……凄い！……自伝をお書きなんですね。暗黒街の狼と怖れられたあなたが、今や、正義のために戦い続ける我らの星……素敵！　完成したら、ぜひ読ませて下さい……きっとベストセラーですわ！」
キリーは頭をかきむしって、イザベルに詰め寄った。
「あのな」
「はい！」
イザベルはマイクをつき出した。キリーは咳ばらいをすると、続けた。
「正義のために戦い続ける希望の星が今、君に望んでいる事を教えましょう」
「はい！」
キリーはニヤリと笑って、イザベルの肩に手をおいた。
「君がここから出ていくか、それともここにいて俺に抱かれるか、二つにひとつさ」
「えっ？」、イザベルは頬を赤らめた。
キリーはイザベルから原稿を取りあげ、部屋の外へ押し出した。

■「その気がないなら、バイ、あちら」
イザベルの鼻先でドアが閉まった。

真吾はリビングエリアで、日課のジョギングをしていた。マイクを持ったイザベルが走ってきて真吾と並んだ。
「さすがですね。こうやって毎日体を訓練する。それがドクーガから地球を守るヒーローの心掛けなんですね」
真吾は立ち止まった。
✿「あのね」
「はい……」
✿「これはね、腹を減らしているの、飯がうまく食えるようにね」
「はあ……」
✿「考えすぎは体によくないよ」
真吾はイザベルの肩をポンと叩いて走っていった。
レミーもキリーも真吾も、イザベルがかねがね思い込んでいたグッドサンダーのヒーロー像とはどこか様子が違っていた。

プレイルームで、夕食後、卓上電子マージャンを楽しんでいる三人に、イザベルは熱っぽく語りかけた。

「夢みたい。嘘みたい。信じられません。グッドサンダーのファイターが私の目の前にいるんですね。皆さん、世界中の人達に呼びかけて下さい。共に地球の平和のために戦おうって」

レミーが叫んだ。

「それ、当たりィ」

「はあ？」

レミーはマージャンのスイッチを押した。

「平和（ピンフ）のために悪を打つ。はい、キリー、平和（ピンフ）よ」

平和（ピンフ）の和（あが）り手が卓上に写し出された。キリーが悲鳴をあげた。

「あいた。ドラが三つ。レミーの平和（ピンフ）は高い。くう〜、泣ける！」

イザベルの話など誰も聞いてはいなかったのだ。イザベルは咳ばらいをし、続けた。

「共に立ち上がり、ドクーガと戦おう、みんな、あなた達の呼びかけを待ちうけています」

ただでさえレミーに振り込んでしらけていたキリーが、たまらずに言った。

「ちょっと静かにしてもらえませんかね、ベイビー」

レミーもうなずいた。

「私達、ＳＦ映画のヒーローなんかじゃないのよね」

真吾も続けた。

「そう。悪いけど、正義とか平和とか関係ないんじゃない」

「はあ、じゃあ何のために」

「乗りかかった船……ちゃうか、乗りかかったグッドサンダー。ここはデカもいないし、俺を

追っかけるうるさい女もいないからな」
「まあ、こうなってると戦わなきゃしゃあないのよね」
「俺達は三人共ファイターだ。戦うのが仕事でね」
イザベルは三人に抗議するように言った。
「困ります。絶対、それ、困ります」
困るのはキリー達も同じだった。
「おいおい、君の取材のために俺達は戦ってんじゃないのよ」
イザベルの声は泣き声に変わった。
「私の取材のためじゃありません。これじゃパパとママが可哀相です」
「パパとママ？」
イザベルはポツリと言った。
「ドクーガに殺されたんです、パパとママ……」
三人は、初めて真面目にイザベルを見つめた。
「パパは五年前から、世界中を牛耳る陰の組織ドクーガを調べていました。そして今から八カ月前のある日、レギュラーのニュースショーに出演する前の夜、パパは私にこう言いました。『イザベル、わしは明日、全世界のTVネットワークを通じて、世界最大の悪の組織ドクーガの存在を発表する。ここに過去五年間のドクーガの悪事を記したマイクロフィルムがある。わしにもしもの事があれば、これを持ってドクーガと戦うたったひとつの組織グッドサンダーを探しなさい。そして、グッドサンダーの戦士達を取材し、正義と悪の存在を私の報道網を通じて全世界に知らせるんだ。

そして、全世界の人々にドクーガと戦うよう呼びかけるんだ。分かったね』。でも、翌日、TV局に向かったパパとママの車は何者かに爆破され、パパとママは亡くなりました。ドクーガはパパとママを殺したんです。私はパパの資料を元にして、二カ月間、グッドサンダーの移動地点を調べました。そして、いつか、この辺に来るだろうと待っていたんです……半年間待ちました。でも、まさか、こうしてグッドサンダーに助けられようとは思ってもみませんでした」

イザベルの話を聞き終えた一同は顔を見合わせた。やがて、レミーが優しくイザベルに話しかけた。

「取材、取材といってたけれど、結局、あなたは御両親の敵を討ちたいのね」

「えっ？」

「なるほど、そのためには、ドクーガの敵の俺達が正義の味方じゃなきゃ格好つかない」

「……いいえ……違います。私、報道の力でドクーガを……」

「無理しないの」

「そんな！　あんまりです」

イザベルは涙をこらえて、プレイルームを飛び出していった。真吾が咎めるように一人に言った。

「レミー、キリー、言いすぎたな」

「どうして？　みんなだって自分の都合で喧嘩しているんじゃない？」

「そういう事。自分の都合に御大層な能書きはいらないさ」

「フフ、私、あの人が好きになれそう」

「そうか、俺ァ、とっくだぜ」

「おまえらなあ……」
「あら、真吾ちゃん、あなた、ああいうタイプ、お嫌い？」
「エッ……そりゃその……」
真吾はニッと笑った。
「ほらほら」
「いや、だから、そういう問題じゃないだろう」
「あら、そうかしら」
「俺なんて、そればっかしよ」
「ねえ」
少し離れたテーブルで、ＴＶゲームをしていたケン太は、そんな三人のやりとりをあきれかえって聞いていた。

＊

イザベルは、客室のベッドにマイクを放り出ししょげていた。と、その時、ドアが開いて、おずおずとケン太が入ってきた。
「あの、イザベルさん……気にしないで……」
「えっ？」
「僕達、みんなそれぞれ、別々の理由（わけ）でドクーガと喧嘩しているんだ。他の誰のためでもないよ。でも僕達、別々でも友達なんだ。イザベルさんとも僕らきっと友達になれるよ」

イザベルはにっこり笑ってベッドの上のマイクをケン太に突きつけた。
「では、グッドサンダー最年少のケン太君に一言、インタビューを」
ケン太は目を白黒させ、手を振った。
「えっ？　いや、僕はそういうのいいよ……じゃあね」
ケン太は転がるように客室から出ていった。
「ケン太君、ありがと……」
イザベルはマイクを握りしめた。

イザベルの所持していたマイクロフィルムは、さすがに超一流のジャーナリスト、アート・クロンカイトの作ったものだけに、ドクーガの存在を実によく調査してあった。マイクロフィルムを見終えた真吾は、サバラスに言った。
「隊長、今まで俺達の戦いは、闇から闇へ消されていましたよね。このデーターとグッドサンダーの存在が明らかになれば……」
「霧のむこうのドクーガが、世界中に見え見えになっちゃう」
「初めてこちらからの攻撃か……」
「問題は、世界を動かせるほど、報道の力が強いかどうかだが……」
サバラスは眉をくもらせた。だが、イザベルはクロンカイトネットワークに絶対の自信を持っていた。

「任せて下さい。パパの残した報道網で、絶対ドクーガを叩いてみせます」

イザベルは、世界中の報道網に通信するためキリーの操縦するグッドサンダーの通信艇スカイウオークに乗ってグッドサンダーから飛びたった。グッドサンダーの位置を逆探知されないように、スカイウォークで、離れた場所から通信しようというのだ。

グリーンランドの北部に降りたスカイウォークの中で、イザベルは慣れた手さばきで無線機のプッシュボタンを押した。

「このコールサインで世界中の放送局を呼びだせます」

「やれやれ、これで俺達も有名人か……サングラスなしじゃ歩けないぜ」

「まあ、キリーさんたら……」

イザベルは、この一見粗野だが、意外にフェミニストでナイーブな面を持っている、キリーの言葉遣いが嫌いではなかった。

イザベルは、報道の公平を期するために、恋愛関係にはのめり込まないという、古臭いモラルをモットーとしていた。しかし、いくら一流のジャーナリストを目指すとはいえ、年頃の女性である事に変わりなかった。そして、大学の同年代の男性達の持つ青くささが無い大人のキリーに、何か魅かれるものを感じていた。ふっと頭に浮かんだ、そんな思いをイザベルは慌てて振り払った。今はもっと大切な事をしなければならない時だ。

イザベルは、マイクに向かって話し始めた。

「こちら、クロンカイト、こちら、クロンカイト。重大発表です。臨時ニュースの回線を開けて下

さい」

だが、イザベルのコールサインは、ドクーガにただちに知らされていた。

「残念ながら、すでに地球上の放送局は我がドクーガの意のままだ」

「答えるかわりに、一発ぶち込んでやれ」

「それもよかろう……フフフ」

イザベルは、プッシュボタンを押し続け、応答を持った。しかし、答えがあろう筈がなかった。

「どうしたの？　ねえ、答えて……こちらクロンカイトです……」

キリーはイザベルの懸命さが痛ましかった。

「もういい。君のマスコミは当てにならないらしい」

「そんな筈ないわ……こちらクロンカイト、クロンカイトです」

その時、スカイウォークの緊急ブザーが鳴った。ビジョンにサバラスが写った。

「キリー、そっちへミサイルが飛んでいく」

「了解。行くぞ、イザベル」

「もう少し……もう少し待って！」

イザベルはマイクを離そうとしなかった。キリーは顔をくもらせた。そして、意を決したように、イザベルの肩に手をやり、力をこめて振り向かせた。

「いい加減にしろ！　君と君の父親の信じた報道の力は、もう死んだんだ！」

イザベルにとってその言葉は、死刑宣告より激しく胸を貫いた。

「行くぞ！」

スカイウォークは雪煙をあげて上昇した。

だが、ドクーガの放ったミサイル群は目前に迫っていた。通信艇スカイウォークには武器は装備されていない。

「チッ！　逃げきれない」

が、次の瞬間、ミサイル群がはじけ飛び、爆煙の中からレミーのクイーンローズが姿を現した。

「サンクス、レミー」

「どういたしまして。それよりキリー、お嬢さんの具合はどう？」

イザベルは目も虚ろにしょげ返っていた。

「俺、ちょっと言いすぎちゃったみたい」

レミーがビジョンの中からイザベルを励ました。

「イザベル、元気を出してね。勝負はこれからよ」

「えっ？」

顔をあげるイザベルに、キリーがウインクした。

「放送局が駄目なら、俺達が放送すればいいのさ」

「えっ？　どういうこと？」

「真吾とケン太が雲の上でお待ちかねだ」

ザベルには訳が分からなかった。

「さあ、宇宙へ行くぞ！」

スカイウォークとクイーンローズは、加速してみるみるうちに大気圏を離脱した。

大気圏外には、数しれぬ無人の通信衛星が地球を回っていた。そのうちの一つに、宇宙服を着た真吾とケン太がとりついて、衛星の外部から部品を組み込んでいた。

作業を終え、キングアローに二人が戻った頃、クイーンローズとスカイウォーク、そして自動操縦のゴーショーグンとジャックナイトが姿を現し、衛星の前にゆっくりと止まった。

「真吾、あんばいはどうだ？」

「そいつは、技術担当者に聞いてくれ」

ケン太がVサインを見せて言った。

「ばっちしOK！　イザベルさん、クロンカイト放送局開始だよ」

イザベルは目を丸くした。

「エーッ？　うそォ」

キリーがイザベルに言った。

「嘘じゃないよ。今、僕がそこの通信衛星に細工して回路を開いたんだ。世界中に放送できるよ」

「メカは友達坊やの奴、最近、俺達よりよっぽど役に立ってる。さ、イザベル、デビュー早々、時間に遅れちゃいけないぜ」

キリーはにっこり笑ってウインクした。

「現在、イギリスは午後八時のゴールデンタイムだ……放送を開始せよ」

ビジョンの中のサバラスが言った。

＊

ロンドンのビッグベンの鐘が午後八時を告げたとたん、イギリス中のテレビ受像機がキリーの顔を写しだした。視聴率百パーセントだった。

「オホン、テレビを御覧の皆様、お楽しみのところ誠に恐縮ではございますか……エーッ、臨時ニュースを行わせていただきます。では本日のメインエベンター、イザベル・クロンカイトを御紹介したいと思います」

キリーはスカイウォークのTVカメラを指さし、イザベルに、

「あそこに目線ね。はい、Q！」

イザベルは幾分あがっているのか、上ずった口調で視聴者に語り始めた。

「イギリスの皆さん、私は、八カ月前に暗殺されたアート・クロンカイトの娘イザベルです。父が五年にわたって調べた闇の組織ドクーガの実態と、ドクーガと果敢に戦い続けるグッドサンダーの存在を皆さんに知っていただきたいのです」

ドクーガにとって、この電波ジャックは予期せぬ出来事だった。ドクーガ宇宙衛星から雲霞のような宇宙船隊が発進し、ゴーショーグンと衛星を取り囲んだ。

「おいでなすったぜ」

「通信衛星が地球を一周するまで、三時間頑張るのね」

❀「キリー、イザベルさんを頼んだぞ！」
🐺「ＯＫ！　バッチリ放送してやるよ。そのかわり俺のジャックナイト、大事に使ってくれよ」

三機の戦闘機を収納したゴーショーグンは攻撃を開始した。ゴーショーグンは、スカイウォークと衛星を守って阿修羅のように暴れまわった。三時間経って、世界中にイザベルの放送がゆきわたるまで、スカイウォークと衛星に指一本、いや銃弾一つ触れさせなかった。ヨーロッパからアフリカ、アジア、太平洋、オーストラリア、南北アメリカ、大西洋と、衛星とスカイウォークは地球を一周し、再びイギリス上空に戻ってきた。放送終了の時が来た。

「イギリスを皮切りに、世界中の人達にドクーガの実態を知っていただきました。皆さん、グッドサンダーと共に立ち上がりましょう。そして共に戦い、諸悪の根源ドクーガを打ち破りましょう。……グッドサンダーチームとイザベル・クロンカイトがお送りしました」

イザベルの姿がブラウン管から消え、テレビは通常の番組に戻った。

ケン太が心配そうに言った。
「オバ、ちゃんとビデオに撮ったかなあ」
キリーがイザベルに聞いた。
🐺「俺の顔写り、どうだったかな」
「キリーさん……わたし……」
涙ぐむイザベルに、キリーはウインクした。

「よくやったよ、イザベル」
そして、もう一度ウインク、ウインクの大安売りである。

*

ゴーショーグンとスカイウォークが地球に戻るのを待ちかねたように、宇宙船隊は衛星に襲いかかった。
「人工衛星、打ち落としました」
誇らしげに報告するスナイパーにカットナルは怒鳴り散らした。
「バカめ、いまさら遅いわ！」
「わしらの事は世界中に知れわたってしまった。とっとと戻って来い！」
「フフフ……こうなっては仕方がない。ブンドル、かねての指示通り……」
皇帝がブンドルに次の作戦の決行を告げた。
「分かりました。日陰に咲く花が陽にさらされるのです。守らねばなりますまい……全世界に同時放送を！」

同時放送の内容はこうだった。
——只今より、全世界を陰で操ってきたドクーガより全世界の人々に告げる。我々は全世界の全てを操っている。そしてドクーガの隊員は世界の隅々まで行きわたっている。もしかしたら君がドクーガかもしれないし、君の両親が、兄弟が、親友が、会社の上役がドクーガかもしれない。むろ

ん、聞いても無駄だ。それは誰にも話してはならない秘密なのだ。話せばそれは死を意味する。もしもあなたが今の生活を守りたければ、動かぬ事だ。そして、我々に無謀にも立ち向かうグッドサンダーの事は忘れるのだ……今の幸福を続けたければ。我々ドクーガとともに生きるのだ。我々は君であり、君のすぐ傍にいる」

グッドサンダーのビジョンでこの放送を見たイザベルは拳を握りしめた。

「脅迫だわ！」

真吾は肩をすくめた。

「きつい脅しだな」

「さすがドクーガ、簡単には転ばないって訳か」

ドクーガの皇帝ネオネロスは、世界地図を見つめ高笑いした。

「そう、この勝負、我々の勝ちだ。世界中の人々は、ドクーガの存在におびえ、逆らう素振りすら見せぬだろう……それほどドクーガは強大なのだ」

*

グッドサンダーとイザベルの別れの時が来た。五人以上の人間を乗せて瞬間移動する事が出来ないグッドサンダーに、イザベルを乗せる訳にはいかなかった。

「私のやった事、無駄じゃなかったと思います」、イザベルはきっぱりと言った。

「だといいが……」

「ドクーガの脅迫に負けるほど人間は弱くない。いつかきっとグッドサンダーと一緒に戦う人が現れると思います」

「少なくとも、あなたはその一人よね」

「イザベル、有名人になるのは御免だが、この戦いが終わって、もし俺が生きていたら、自伝は君に送るぜ」

「キリー……」

この人とだけは別れたくない……イザベルはそう思った。しかし、ファザーの声が冷たく聞こえた。

「瞬間移動、準備完了……」

「……わたし、わたしの戦いは止めません。ペンの力で必ずドクーガを……」

「楽しみにしてるぜ」

「さあ、私達には私達の戦いがある」

「そういう事……グッドラック、イザベル」

「シーユー、アゲイン」

「また、フフフ、会おうぜ」

(あら?)

レミーはキリーの別れの言葉に、イザベルとキリーの心のふれあいを感じて微笑んだが、何も言わなかった。何を言っても別れの慰めにはならないと思ったのだ。

イザベルを残し、グッドサンダーは上昇していった。イザベルは遠ざかるグッドサンダーにカメラを回し続けた。グッドサンダーの姿が消えてもイザベルはカメラを離さなかった。

第八章 浮上する地底の謎

グッドサンダーの電波ジャック以後のドクーガの対応は、よく知られている通りである。人々の前にその全貌を現したドクーガは、もはや闇に隠れようとはしなかった。組織の力を大々的に誇示し始めたのである。毎日放送されるテレビのCMには、必ずドクーガグループのマークが入っていた。

ケルナグールなどは、図々しくも自分からCMに出演し、ケルナグールフライドチキンを連呼した。カットナルに至っては、経営する製薬会社のCMに便乗して大統領選挙用のイメージCMを放送した。

——彼は幼い頃、当時アメリカ大統領だった父を爆弾テロで殺され、また爆弾の破片で自らも片目を失い、しかも最愛の母はアラブの大富豪の下へ、子供を捨てて嫁いで行った。残されたカットナルは、父と同じアメリカ大統領になろうと心に誓った。父への弔いを兼ねて——

——父ちゃん、僕はいつかきっと、アメリカの星になるんだ！——この自伝風のイメージCMは、アメリカの女性層に特に受けた。二年後の大統領選には、当確とさえ噂された。

人々は、世界中の国家、並びに企業が、何らかの形でドクーガの翼の下にある事を知った。

——明るいドクーガ、豊かな暮らし、皆様の幸福はドクーガの願いです——この白々しいCMに怒りを感じる者も、ドクーガのあまりの巨大さに怒りのやり場がなかった。

ブンドル局長は、ドクーガのこの居直りともいえる自己宣伝を快く思わなかったのか、この時期、ブンドル系列の会社のCMは一切流れなくなった。

——悪の紋章は、闇の中でこそ光り輝く——と豪語していたブンドルにとって、CMなどと

いう大見栄切ったやり方は、恥ずべき行為なのかもしれなかった。
グッドサンダーが旅に出てから、やがて二年が過ぎようとしていた。ドクーガがグッドサンダーから被(こうむ)った損害は、直接、関接に係わらず莫大なものになっていた。
——ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より——

＊

マザーは皇帝とブンドル達に、二年間のグッドサンダー関係の決算を報告した。
「この二年間でグッドサンダーからドクーガが受けた損害は一京ドルを超えました」
♂「一京ドル？　あまり聞かん値段だな……」
🌹「無知は罪……美しき金の単位も知らんのか？」
♂「なにを！　わしとて電算機くらい持っておるわ」
ケルナグールは、ポケットからちっぽけな電算機を出した。
♂「一京ドル？　そんな値段は見あたらんぞ」
🐦「イラつく奴だな、見せてみろ……なに？　八ケタまで計算可能……ケルナグールフライドチキン・マダガスカル支店開店祝い……なんだ、こりゃ」
♂「うん、うちのカミさんがやっているフライドチキンの開店祝いの景品じゃ。近くに行ったら

寄ってくれ、これがチラシだ」
ケルナグールはカットナルとブンドルにチラシを渡した。
「開店祝いの景品か。さすがケルナグール、果てしなく無残なまでに美しくない……ん？」
ブンドルの目がチラシに釘づけになった。清楚な美女が、ケルナグールと並んでフライドチキンを持っているではないか。
「この女性は？」
「グフフ、うちの大事なカミさんだばさ」
「な、なにッ？」
ブンドルの長い金髪が逆立った。
「なるほど、なかなかに美しい。だがわしの母にはかなうまい」
チラシを覗き込んだカットナルが、ペンダントを出して見せた。これまた清楚な美人がペンダントに入っていた。
「まさか……これがカットナルの母親？」
カットナルは遠くを見る目でつぶやいた。
「母は美しい人でした……」
「こういうのを〝美しい〟というのだ」
ブンドルはよろめいた。
「何やらめまいが……」
マザーが三人のやりとりに呆れ果てたように言った。

「めまいを起こすなら皆さん、額の重さ、一京ドルにめまいを起こしなさい」
ビジョンに一京ドルの数字が出た。
♂「な、なんと八ケタ以上もある!」
「当たり前だ……これは想像を絶する損害だぞ」
皇帝がつぶやいた。
「といって、下手に攻撃すれば、グッドサンダーのビムラーもろとも、我々も破滅する状況は少しも変わっていないのだ」
「いまいましい。いつまでこんな状態が続くんだ」
「そう長くは続きませぬ」ジッター博士がそう言いながら誇らしげに入って来た。
「御覧下さい。私の創りましたビムラー感知レーダーを……」
ビジョンに新型のレーダーが写った。
「このレーダー一台で、地球の四分の一の面積にわたってビムラーエネルギーを感知致します。このレーダーを四基、地球の各地に備えつけましたので、グッドサンダーがどこに瞬間移動しようと、たちどころに判明致します」
「居所が掴めても、下手に手を出せんのでは同じ事ではないか」
ジッターはニヤリと笑って言った。
「手など出さなくてもいいのです。その代わり予め、移動地点付近の水、食物の一切を汚染するのです」
「フーン、連中は食い物や水が手に入らなくなるわけだ」

ジッターは続けた。

「グッドサンダーはメカでも、乗っているのは生身の人間……一年と持ちますまい」

ケルナグールが頷いた。

「人間、腹が減るのが一番まいるからな……」

ブンドルが元気なく言った。

「兵糧攻めか。美しくない作戦だが、美というもの、少し考え直してみたい気もしてきた」

「で、グッドサンダーは今、どこに……」

「はい、マダガスカルの辺り……」とジッター博士は言いかけた。

「なに！」

ケルナグールは飛び上がった。

＊

マダガスカルの南部の海岸で、グッドサンダーチームは、ビーチパラソルを広げて海水浴気分でリラックスしていた。フライドチキンをかじりながらキリーがぼやいた。

「青い空、青い海、南海の楽園、マダガスカル……はいいけどさ……こんな所まで来てフライドチキンしか食えないのかね？」

「それも、ケルナグール印だとさ」

「仕方ないわ。ここんとこ、ドクーガとのチャンバラ続きで落ちついてお料理してる暇ないもん」

「今なんて暇そうじゃん。どう、フランス料理でもお作りになったら」
「たまの休みだもん、私、食べる人……」
そこにオバが大きなケーキを持ってやってきた。
「私、作るメカ……どうぞ召し上がって下さい」
キリーが真吾にささやいた。
「オバの料理は誉めない方がいいぞ」
「言える」
ついこの前、オバの作ったコロッケをうっかり誉めたために、二週間もコロッケ漬けの憂き目にあった事を二人は思い出した。しかし、ケン太はそんな事はすっかり忘れて目を輝かせた。
「ワーッ、凄いケーキ。どうしたの、オバ！」
「忘れたの？　ケン太君、今日が何の日だか……ほら、ローソクが十二本……」
レミーがパチンと指を鳴らした。
「あっ、そうか……ケン太君、今日十二歳になったのね」
「そう。誕生日おめでとう、ケン太君……」
「ありがとう、オバ」
「そういう事なら私、お料理作る人になっちゃおうかな……」
「オッ、嬉しいね。レミーちゃん、やる気でてる」
「十二歳か……俺達の旅が始まったのはケン太が十歳の時だから……もう二年もたつんだな……」

「これから先、いつまで、こんな暮らしをしなければならないんでしょう」
しんみりとオバが言った。
「じめつかない、じめつかない」
オバはしょんぼりと言った。
「ケン太君の今後の教育を考えると不安です」
ケン太は元気に答えた。
「大丈夫！　僕にはオバがついているもん」
「でも……私が教えられる事はもう、そうは残っていません」
レミーがオバの肩をポンと叩いた。
「オバ、元気出して。せっかくの誕生日、パーッとやりましょ、パーッと！」
その時、グッドサンダーの警報ブザーが鳴った。
「敵メカ来襲！　敵メカ来襲。全員、乗船せよ」
「チッ！　こっちがハッピーな時は、遠慮して欲しいんだよな」
「ケーキは敵さんをやっつけた祝いも兼ねて後でゆっくりといただこうぜ」
「しゃあないわね。行きましょ」
マダガスカルに現れたのはケルナグール軍団だった。
「グッドサンダーめ、わしの店の鼻先に現れるとは……さあ、ゴーショーグン出てこい、特製のフライドチキンにしてやる！」

「戦闘準備完了！」
真吾達はコクピットに坐って発進命令を待った。
「よし！　発進せよ」
サバラスの声が聞こえた。しかし、次の瞬間、ファザーが叫んだ。
「待て！　戦闘している時間はない。直ちに瞬間移動する」
「なに？」、サバラスが訊き返す。
「我々は呼ばれている。アイスランド……アイスランドに来いと……」
「誰が……何のために……ファザー、答えろ！」
サバラスがファザーに詰問した。
「回答不能……」
キリーが肩をすくめた。
「おい、またファザーのわがままが始まったぜ」
「もう！　グッドサンダーのリーダーはいったい誰なのよ」
サバラスは目を閉じた。
「……好きにしろ、ファザー」
「ビムラー融合、瞬間移動開始！」
ケルナグールはやる気十分だった。

♂「ゴーショーグンめ、何をグズグズしている。早く来い！」
しかし、「グッドサンダー、消えます」と、部下が意外な報告をした。
♂「なにッ!?」
ビジョンに写ったグッドサンダーが消えていく。
♂「うぬぬ。戦わずして尻尾をまくとは、卑怯な」
ケルナグールのビジョンにブンドルが写った。
「ジッターのビムラーレーダーが、グッドサンダーの行先をキャッチした。敵はアイスランドだ。カットナルはすでに向かっている」
♂「アイスランド？　こりゃまた、えらく遠い所に……ならば敵はカットナルに任せ、ここまで来たついでだ、うちのカミさんとこ寄って行くか……」
指令ボードに置かれた妻の写真にケルナグールは笑いかけた。ブンドルは怒って、
「マイホームぶりおって。そんな場合ではない……敵はアイスランドなのだぞ」
♂「それがどうした」
「アイスランドには、ドクーガ最大の地熱基地があるのを忘れたのか」
♂「なに？」
「時はダイヤモンドより貴重だ。アイスランドへ急げ！」
アイスランドは地球の割れ目とも呼ばれ、現在最も火山活動の激しい場所。この土地で地下の溶岩流をコントロールすれば、全世界の火山活動を自在にコントロール出来た。
ドクーガは、全世界の火山の噴火、地震を思い通りに操るために、ここに地熱基地を作ったのだ。

地震や火山の噴火によって起きた災害で物価が上昇し、ドクーガが得た収益は五千兆ドルを超えていた。したがってこの基地が破壊されれば、ドクーガの年間収益は重大な危機を迎える筈だった。
ドクーガは、ただちにグッドサンダー応戦態勢をとった。

*

アイスランドのドクーガ地熱基地上空に現れたグッドサンダーの面々は、迎え撃とうと待機しているドクーガのあまりの数の多さに目を見張った。
「なんてこった。ここは敵のド真ん中じゃないか」
「どういう事よ。これじゃまるで、こっちから喧嘩仕掛けた感じじゃない」
「ファザーもやきが回ったか……」
サバラスは三人に指令した。
「真吾、レミー、キリー、ゴーショーグンで持ち堪えるんだ。どうやらビムラーは第三段階を迎えるらしい」
「第三段階？……」
「一年前、ツングスカでビムラーが第二段階を迎えた時、ファザーは今日と同じように動いた。いずれにせよ、あと一時間で分かる。そうだな、ファザー」
ファザーの答えは同じだ。
「回答不能……」
キリーがわめいた。

「隊長！　俺ァもう、わけの分からんメカ野郎の言いなりになるのは真っ平だぜ」
「そうよ。いくらメカでも、私達人間ってもんをちょっと無視しすぎじゃない！」
サバラスがいつになく優しい口調で言った。
「レミー、キリー、君達の気持ちはよく分かる。戦うも逃げるも君達の自由だ。だが私はここまで来た以上、ビムラーがなんであるかを最後まで見届けたい」
真吾が真面目な口調で続けた。
「レミー、キリー。俺も隊長と同じ気持ちだ」
「真吾……」
「うまく言えないが、ここで降りたらもったいないって気がしてきた。じゃ、お先に！」
真吾の椅子が床に吸い込まれていった。
「もったいないか。確かに言えてるな」
「せっかくここまでお嫁に行くの我慢したんですものね。今まで無駄な事したと思うのシャクだわ」
真吾のキングアローを追って、ジャックナイトとクイーンローズが飛び出した。
真吾はニヤリと笑った。
「やっぱり来たのか」
「損な役だぜ、俺達はよ」
「三人お手々つないで、手早くやりましょ」
「よーし、ゴーショーグン、Go！」

ゴーショーグンを迎え撃つのはカットナルの戦闘メカ、機鋼戦士ドスハードだった。ゴーショーグンはドスハードとの戦闘を開始した。その戦いを彩（いろど）るように、地熱基地付近の火山が噴火を始めた。

＊

その頃、ドクーガに新しい情報が入った。
「ビムラーエネルギー反応……アイスランドとは別地点です」
「なに」
「ビムラーレーダー、四カ所が全て反応……位置はそれぞれの設置地点です」
「ジッター、どういうことだ」
ジッター博士は当惑していた。
「こんなバカな……グッドサンダーの他にビムラーがある筈がありません……それに、四カ所全てが反応するなど考えられません」
「故障か……見苦しい」
マザーが答えた。
「考えられる可能性がひとつ。四つのレーダーは、ビムラーまでの距離を六千三百七十キロ台と指しています。六千三百七十キロは、ほぼ地球の半径、ビムラーが存在するとしたら、それは地球の中心です」
ビジョンに地球の中心に位置するビムラーが図示された。

「地球の中心？」

「ビムラー反応、移動……」

地球の図の中心から、ビムラーの反応が移動していった。マザーは続けた。

「ビムラーは、このまま直進すれば、三十分後にアイスランドへ浮上します」

「アイスランド……なんということだ。一年前、宇宙の彼方より飛来し、今また地球の中心よりグッドサンダーに向かって動いていくビムラーとはいったいなんなのだ」

ブンドルの声は未知なるものへの好奇心に震えていた。

*

グッドサンダーのファザーは、近づきつつあるビムラー反応を感知して叫んだ。

「ニュービムラー、受け入れ準備！」

噴火はさらに激しさを増した。ゴーショーグンとほぼ互角のパワーを持っているドスハードは、ゴーショーグンを火口の一つに叩きつけ押さえつけた。

「熱いなあ。敵さん、結構やるじゃん！」

「おいおい、なんか本当に熱いぜ」

「サウナじゃないのよ、これ以上痩せたくないわ」

「よし、ゴーフラッシャーでケリをつけよう……」

「待ってました。やって、ひと思いにやって！」

「ゴーフラッシャー！　ん？」
レバーを引いても反応がない。
「どうしたの、真吾！」
「発射しない！　ファザー、どうしたんだ」
ファザーが答えた。
「ニュービムラー受け入れ態勢のため、ゴーフラッシャー使用不能！」
「おい、よせよ！　打ち止めはないだろ」
次の瞬間、噴火が起こり、ゴーショーグンとドスハードは宙高く吹き飛ばされた。「ワーッ！」。
噴火は激しくなる一方だ。
「こりゃ堪らんぞ。敵にやられる前に、噴火でやられちまう」
「触らぬ火山に祟(たた)りなしだ」
「ちょっと、やだ。見て、グッドサンダーが……」、レミーが悲鳴をあげた。
グッドサンダーが、巨大な火口へ降りて行くのだ。
「バカな。身投げでもする気か？」
グッドサンダーは、どんどん火口を降りていった。
「ビムラー受け入れまで十分！」
ケン太とサバラスは、ファザーのなすままに任せるよりなかった。
ファザーがケン太を呼び、
「真田ケン太君……私の所へ来て下さい」

「えっ？　ファザーの所へ」
オバがサパラスの前へ来て、
「隊長、私もついていっていいでしょうか」
ファザーは冷たく言った。
「オバはそこにいるのだ……」
「ファザー。ケン太君は、私の大事な教え子です。たとえあなただって好きにさせません」
「オバ、ケン太君を呼んでいるのは私ではない。真田博士なのだ」
「真田博士、御主人様が……」
ケン太の目が輝いた。
「父さんが！……」
サパラスはオバに言った。
「オバ、行かせてやるんだ、ケン太君を」

コンピュータールームに来たケン太に、ファザーは、ジェッターエースに乗ってファザーの上に飛んで来るように指示した。
「ファザーの上？　ＯＫ」
ケン太のジェッターエースは、ファザーの頭の上に浮上した。ファザーの頭部が開き、ケン太を招き入れた。
ファザーの体内の暗闇の中で、立体映像の真田博士が浮かび上がった。

「ケン太、十二歳の誕生日おめでとう」
「父さん……そうか、これも立体映像だね」
「ケン太、この二年間は、ひとりぼっちのお前にとってさぞや辛い旅だったろう……だが、この旅はあと一年で、お前が十三歳になった時に終わるだろう」
「十三歳？」
「ビムラーは、あと五分後に第三段階を迎える。そして、お前が十三歳の誕生日に第四段階を迎え、完璧な存在になる」
「待って。ビムラーと僕と、いったい何の関係があるの？」
「今は知らなくていい。いや、知らない方がいいのかも知れない。ケン太、ここに呼んだのは、お前にプレゼントしたい物があるからだ」
「プレゼント？」
「見るがいい」
　真田博士の背後に大きな扉が立っていた。
「この扉の向こう、ファザーのシンクタンクの世界には、人類が今まで積み上げてきた知識の全てがつめられている。もしも、お前がそれを知りたいと思うなら、扉の向こうを旅してみないか？扉を開ける開けないはお前の意志だ……誰も強制はしない……」
「父さん……父さんのプレゼント、ありがとう。僕、知らない事は知りたいよ」
　真田博士は頷いたかのように続けた。
「扉を開くがいい」

開かれた扉の向こうには、大宇宙が広がっていた。「わァー!」、ケン太は吸い込まれるように大宇宙を飛んだ。もの凄い勢いで、様々な人類の知識が目の前を通り過ぎて行った。宇宙の誕生、細胞の世界、原子核の分裂、芸術、歴史、宗教、公式、自然の景観、科学、動物の進化……めくるめくトリップ感覚がそこにあった。ケン太の表情には歓喜があった。知識欲に満ちたその顔——苦痛の表情はまるでなかった。そして気がつくと、ケン太は青白い光の海を漂っていた。

「ここは……」

真田博士の声が聞こえる。

「ビムラー炉の中だ……ビムラーは第三段階を迎える、あと十秒で」

やがて遠くからファザーのカウントダウンが聞こえてきた。

「ニュービムラー、グッドサンダーまで、テン、ナイン、エイト……」

ケン太の前方から青白い火の玉が飛んで来た。

「セブン、シックス、ファイブ」

グッドサンダーが降りていった火口が大爆発を起こした。

「フォー、スリー、ツー、ワン……」

ビムラー炉の中のケン太の体を、青白い光が貫いた。

大爆発の中から、青白い光に突き上げられたように、グッドサンダーの巨体が、急速に浮かび上げられていった。その光こそ、ビムラーだった。ビムラーの光は、グッドサンダーの中へ、ぐんぐん吸い込まれていった。

ビムラー炉の光が、炉の四分の三の部分まで輝いていた。そこに、瞬間移動したかのようにケン太の姿が浮かび上がった。
ファザーが叫んだ。
「第三段階終了！」
「僕は……僕はどうしてここに……」
炉の前のケン太は、フラフラと歩き出した。

司令室の中では、ファザーがサバラスにビムラー第三段階を説明していた。
「第三段階に入ったビムラーにより、グッドサンダーは、地上のいかなるところにも移動可能、移動可能時間に制限なし、ただし太陽系を破壊するエネルギーは持続中、一年後まで消滅せず」
「なに、一年後には、無害なエネルギーになると言うのだな」
「はい、その時がビムラーの最終第四段階、ビムラーに太陽系破壊のエネルギーが無くなれば、ドクーガは躊躇する事なく我々に襲いかかって来るでしょう」
「我々が生き残るか、ドクーガが生き残るか、この一年が勝負という訳か……」
司令室に入ってきたケン太がつぶやいた。
「あと一年、あと一年たったら僕は……」
「あと一年か……」
サバラスが遠くを見る目で言った。
ビジョンに真吾とキリー、レミーが写って怒鳴った。

「隊長！　あと一年はいいけど……今の敵をなんとかしなきゃ！」
「一年どころか、三十分ももたないぜ」
「ファザー、ビムラーだの第三段階だの、そっちばかり楽しまないで、なんとかしてよ」
ドスハードと地熱基地の軍団に攻撃を受けるゴーショーグンは傷だらけだった。真吾はファザーに聞いた。
「ファザー、ビムラーを受け入れたなら、もう、ゴーフラッシャーは使える筈だな」
「ビムラー第三段階で、ゴーフラッシャーも新しい段階を迎えました」
「よし、ゴーフラッシャー！」
ゴーショーグンの背に光が燃えあがり、その中からきめの細かい光の針のような物が、ほとばしり出た。ドスハードは、光のシャワーに包まれた。
「やった！」
だが、光のシャワーがおさまると、ドスハードは、そのままの姿で立ちつくしていた。レミーが呆気にとられて叫んだ。
「やだ！　ぜんぜんききめがないじゃない」
「おいおい、派手なのは格好だけかよ」
真吾は頭をかいた。
「まいるな。ファザー、どうなってるんだ」
「あら！　真吾、キリー、敵の様子が変だわ」
レミーは、ドスハードの異変に気づいた。ドスハードは、じっとその場を動かないでいるのだ。

カットナルは部下を怒鳴りつけた。

「どうした、ドスハードは、なぜ攻撃せん」

「分かりません。操縦不能です」

「なにッ？」

驚きは真吾達も同じであった。

「敵さん、どうなっちゃったんだ」

「張り切りすぎて息ぎれしたのかしら」

「インターバルタイムか……チェッ、ボクシングじゃあるまいし、偉そうに……」

だが、ケン太にはその訳が分かっていた。ケン太には、ドスハードの中に光る青白い物が見えた。

「あっ!!　見える！　何だろうあれは……」

オバが心配そうにケン太に聞いた。

「ケン太君、どうしたの？」

「あいつ、何かを言っている。聞こえない？　ほら、嫌だ、戦うのは……戦うために生まれてきたんじゃない」

それはケン太にだけ聞こえる声だった。

「敵メカが言ってるんだ。戦いたくない……戦うぐらいなら……死んだほうがましだ……！」

突然、ドスハードは頭を抱え苦しみ出した。体に細かいヒビが走った。そして大爆発。ドスハードの破片が飛び散り、地熱基地のドームにぶち当たった。爆発が噴火を呼び、地熱基地全体を溶岩の海に変えた。

「アイスランド地熱基地、完全崩壊……原因、カットナルの攻撃用メカ、ドスハードの命令無視……我々への反乱か……」

マザーの報告にカットナルはうなった。

「反乱？　バカな。メカが人間に反乱を起こしてたまるか！」

その時、とぼけた顔をしてケルナグールが、ビジョンに写る。

♂「オーッ、カットナル、今、地中海上空だ。あと二時間でそちらに行ける。頭張っとれよ」

「うるさい、もはや終わった。ただでさえ熱いのに、お前の暑苦しい顔など見たくもないわ！」

カットナルは、精神安定剤をむさぼり食べた。それは三度の食事よりも多い量だった。

第九章 僕には見える

ビムラーが第三段階を迎え、グッドサンダーは地球上での瞬間移動が自在になったものの、あと一年で太陽系を破壊しうるエネルギーが消滅するという事は、新たなる問題であった。ビムラーの破壊力が消えるという事実をドクーガが知れば、容赦なくグッドサンダーを攻撃してくるのは目に見えていた。

グッドサンダーが生き残るのか、ドクーガが生き残るかは、この一年で決まるといえた。

一方、ドクーガの内情も厳しいものがあった。アイスランドの戦いで破壊された地熱基地は再起不能……損害はドクーガの年間予算ではとても補いきれなかった。ドクーガは世界連合を通じて、各国政府に税金の二十パーセント値上げ、物価指数も十パーセント上げる事を強要した。この暴挙によって、全世界に社会不安をもたらす事は必至であったが、ドクーガの体制を維持するには、これより他、手段はなかった。

ビムラーの破壊力が消えるまで後二百日余りになった時、グッドサンダーは北スコットランドの荒涼とした原野に姿を現した。だが、この移動もアイスランドに現れた時と同様、グッドサンダーの誰も、その理由(わけ)を知らなかった。

——ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より——

*

風が吹き荒れ、雲が飛ぶ北スコットランドの荒涼とした原野を、グッドサンダーの一同は見つめていた。

「ファー、ひどい所ね」

オバはレミーの言葉に追い打ちをかけた。

「この地方は、イギリスでも最も不毛といわれる地帯で、年中強い風が吹き荒れ、作物もろくにとれません」

「隊長、なぜこんな所に移動したんです？」

「ファザー、答えろ」

「私にも分かりません」

「やだ。またまたここに来た訳、誰も知らないの？」

「おい！　あれを……」

ビジョンに、ジェッターエースに乗って原野を走っていくケン太が写っていた。

「ファザー、なぜケン太を外に出した？」

「分かりません。いつの間にか扉が開いてしまって……」

真吾が立ち上がった。

「俺が連れ戻してこよう」

「いかん。敵は我々の位置をすでに感づいている筈だ。二人は待機しろ！　オバ、ケン太はお前が

連れ戻せ」
サバラスがそう命じた。
「はいッ！」
オバはジェットを噴射させて飛び出していった。ジェッターエースに追いついたオバは、ケン太に叫んだ。
「ケン太君、どこへ行く気なんです」
「呼んでいるんだ。僕を呼んでいるんだ」
「呼んでいる？　誰が……」
「分かんない。でも、確かに呼んでいるんだ」
ケン太は小高い丘の前まで来て、ジェッターエースを止めた。
「誰、僕を呼んでいるのは誰……」
オバのセンサーには反応がなかった。
「聞こえません。何も聞こえません」
ケン太はぐんぐん丘を昇っていった。
「ケン太君、止めて下さい。今日のケン太君、どうかしてます」
「オバ、この山はなんなの？　何があるの？　ね、教えて！」
「ここには何もありません。地理の上でも歴史の上でも……ただ奇妙な伝説が残っているだけです」
「伝説？」

「言い伝え、お伽噺です。大昔、このあたりは妖精達が住んでいるといわれていました」
「妖精？」
「谷を吹き抜ける風と話をし、野原の花とお喋りし、森の木々、小川のせせらぎと語り合える不思議な人達です。妖精達は人間達とも仲良く暮らしていましたが、いつの時期からか……そう、人間が知恵を持ち、神様を拝むようになると消えてしまいました。でも、この土地には、今も妖精達が生きているという言い伝えがあるのです」
ケン太は、我が意を得たりというように、満足そうに微笑むと、
「それならいるよ、今も。ほら、そこに……ほら、あそこにも、うわっ！　いっぱいだ」
ケン太にだけは、キラキラと様々な色に光る無数の火の玉が見えたのだ。
「君達だね、僕を呼んだのは……君達、妖精なの？」
「ケン太君、誰に、誰に話しているんです」
「見えないの、オバ。とってもきれいだよ」
「見えません。いえ、わたしのセンサーには何の存在も感じません」
「そう……でも、僕にははっきり見えるよ、はっきりと……君達、何を、何を言いたいの？」
光の火の玉は不思議な音を出して光り出した。まるで、豪華なクリスマスツリーのようだった。
「えっ？　と・も・だ・ち……仲間……ともに・と・べ・る・日を・待っている……一緒に飛べる日を待っている？」
光の火の玉は、まるではしゃいでいるように一際キラキラと光った。
「気持ちが……通じる……嬉しい？……僕だってさ……でも、一緒に飛ぶってどういう事？」

ケン太のポケットの中でブザーが鳴った。
光の火の玉は、その音に慌てるように上昇し、素早く雲の中へ消えていった。
「あっ、どこへ？　どこへ行っちゃうの……あ～あ、行っちゃった」
オバに急かされ、ケン太はポケットから通信機を取り出し応答した。
「こちらケン太」
「敵が接近している。早く戻って来るんだ」
「了解！　行くよ、オバ！」
ケン太は走り出した。オバはその後ろ姿を追いながらつぶやいた。
「ケン太君……何が起こったんです、あなたに……」

北スコットランドの原野に現れたケルナグール軍団は、ジェットヘリで煙のようなものを撒き散らした。ガスに触れた草木がみるみる枯れ、川には死魚が無数に浮かび上がった。
✿「なんだ、あの煙は！」
ファザーが答えた。
「敵のガスは、昔、アメリカが局地戦で使った不毛ガスを強化させた物です。土地を不毛にし、住民を飢えと渇きで死に至らしめる恐ろしい兵器です」
✿「俺達を飢え死にさせる気か……」
「なあに俺達ゃ、瞬間移動でパパッと別の土地におさらばさ」
「おそらく敵は、我々が移動した先々でこの作戦を使うつもりだろう」

サバラスが思案気に首を振った。

「待って。じゃあ、これから行く所、行く所、みんなハゲ山？　冗談よしてよ。そこに住んでる人達はどうなっちゃうの？」

レミーの問いにサバラスは答えた。

「それも敵の狙いだ。住民の事を考えれば、グッドサンダーはやたらな所には移動できん」

「汚ねえ、いつになくダーティだぜ」

「所詮、美しくない奴らさ」

「よーし、いっちょう叩き落としてやるか」

その時、ケン太とオバがグッドサンダーに戻って来た。オバはケン太に言い聞かせた。

「いいですか。もうこんな勝手は許しませんよ」

「でも、でもさ……あっ！」

ケン太は耳をすました。

「呼んでいる。また誰かが呼んでいる」

オバには何も聞こえなかった。

「行くよ、僕、君の所へ！」

ケン太の声に答えるように、ファザーが言った。

「ビムラー作動、瞬間移動開始」

グッドサンダーは北イングランドから姿を消した。

*

ドクーガのマザーは、ただちにグッドサンダーの位置を感知した。
「グッドサンダー、瞬間移動地点、ニューギニア中部ボサビ火山」
霧のたちこめた巨大な山に向かって、グッドサンダーは飛んでいった。
オバはボサビ火山の資料を一同に告げた。
「ニューギニアの魔の山と呼ばれるボサビ火山。いつも厚い霧と雨雲がたちこめ、有史以来、誰一人、山の全体を見た人がいないという火山です」
「だけど、なんだってこんな所に……」
キリーと真吾は、もうどうでもいいといった感じで肩をすくめた。サバラスがファザーに問いつめた。
「ファザー、誰の命令で動いた」
「分かりません。私自身にも理解不能です」
ファザーが測り知れない大きな意志によって動かされた事をサバラスは感じとった。
突然、ケン太がつぶやいた。
「僕、見えるよ、山の形が……ほら、青白く光って見えるよ」
ケン太には確かに、山の影が光って見えた。納得出来ないオバは、改まって問いかけた。
「メカの私には見えません。隊長、人間には見えるんですか」
真吾達はかぶりを振った。サバラスがつぶやいた。

「私にも見えぬ。だが、ケン太には……大人には見えぬものが子供に見える時もある」

オバにとっては満足のいく答えではなかった。

「オバ、この山に言い伝えはないの？　教えて、オバ！　お願いだよう！」

サバラスはオバに、知り得る限りの事をケン太に話すよう命じた。

「は、はい。この辺りは未開の土地です。つい最近まで、一年中、裸で暮らしている原始的な原住民しか住んでいませんでした。だから、言い伝えといっても……」

「何もないの？」

「文字すら知らない人達です」

「何もないのか……」

「ただ、一部の人達には山についての歌が残っていたそうです」

「歌？」

「その内容は……昔、山と話せる人がいた、森と話せる人がいた、雨と歌える人がいた。みんなみんな消えちゃった。山へ登って消えちゃった……アッ！」

オバは、妖精伝説と歌の共通点に気付いたのだ。

「それだ！」

ケン太は、そう叫ぶと飛び出して行った。

「あっ、ケン太君」

「オバ、ケン太を守れ」

サバラスが叫んだ。

「はい！」
オバはケン太を追って飛び出して行った。ブザーが鳴り、ファザーが敵の接近を告げた。
「真吾、キリー、レミー、ゴーショーグンで迎撃しろ」
サバラスは即座に、三人に命じた。
「了解！」
三人は戦闘機に乗り込み発進した。
遠くでゴーショーグンとドクーガの戦う爆発音が聞こえる霧の中を、ケン太を乗せたジェッターエースとオバは走りに走った。
「ここだ」
停止したジェッターエースの前に、巨大な洞穴が口を開いていた。ケン太とオバは洞穴に入っていった。オバに内蔵されたサーチライトが照らす洞穴の壁に、穴居人の絵が描かれていた。突然、洞穴の奥で、無数の炎がキラキラと光り出すのをケン太は見た。
「君達だね、僕を呼んだのは……山と話せる人は誰？」
炎の中の一部がボーッと、一際燃え上がった。
「森と話せる人は？」
別の炎がきらめいた。
「雨と歌える人……」
さらに別の炎が燃え上がった。しかし、オバには何も見えなかった。
「もう止めて下さい、変なお芝居は……」

「じれったいなあ。オバには見えないの？　どうして……」

と、その時、洞穴の入口にゴーショーグンとドクーガの流れ弾が当たった。洞穴が揺れた。

「さ、ここは危険です。行きましょう」

光の炎が、一際輝いた。

「待って！　何？　君と飛べる日を待っている！　そう言ったんだね」

光の炎は、答えるようにカーッと燃えた。

オバは、ケン太が病気になったとしか思えなかった。

「ケン太君！」

光の炎は宙を舞って、洞穴の奥の縦穴に吸い込まれていった。

「早くいけ！　助けてあげる、オバ、みんながそう言っているよ」

「早く、ケン太君！」

オバにせかされて洞穴を出ようとしたケン太は、壁の前で立ちすくんだ。

「ゴーショーグンだ！」

黒い墨で書かれた鬼のようなものが壁に描かれていた。その背には光の輪が描かれている。

「そんな、これはただの原始時代の絵です」

「違うよ。これはゴーフラッシャーだ！」

「古い時代の絵は、似たようなものです。さ、早く行きましょう！」

地鳴りがして、洞穴は崩れ落ちていった。かろうじて洞穴から逃げたケン太とオバは、グッドサンダーに急いだ。

その時、ケン太は霧の中でゴーフラッシャーを放つゴーショーグンの姿を見た。
「あれだ。あの壁画はやっぱりゴーショーグンだ！」
ゴーフラッシャーを浴びたドクーガのメカは、ドスハードと同じように全く動かなくなった。

旗艦の中でメカを操作するカットナルは、部下にわめいた。
「なぜ動かん？　被害を受けたのか？」
「全く損傷はありません」
「では、なぜ動かん」

ゴーショーグンのコクピットでも、同じような会話がかわされていた。
「本当、これが不思議なんだよな」
「この前と同じだと、後、三秒待つのよね」
「3、2、1、0」
ドクーガのメカは粉々に崩れ散った。

「ど、どういう事だ！」
その時、ビジョンにブンドルが写った。
「カットナル、地熱変動を感知した。気をつけろ！　その火山は噴火する」
「なにッ！」

グッドサンダーがケン太とオバ、そしてゴーショーグンを収容し、瞬間移動した直後、ボサビ火山は大爆発を起こした。それは、有名なクラカトワ火山の爆発の数十倍の規模の空前絶後の大噴火だった。カットナル軍団は一瞬のうちに消滅した。ブンドルの情報でかろうじて難を逃れたカットナルは、一粒一粒安定剤を噛みもせず飲み込み、つぶやくだけだった。

「クックックッ、火山まで奴らの味方か……」

マザーが、グッドサンダーの瞬間移動先が目と鼻の先のバリ島付近だと告げても、もうカットナルはグッドサンダーを追う気力がなかった。

＊

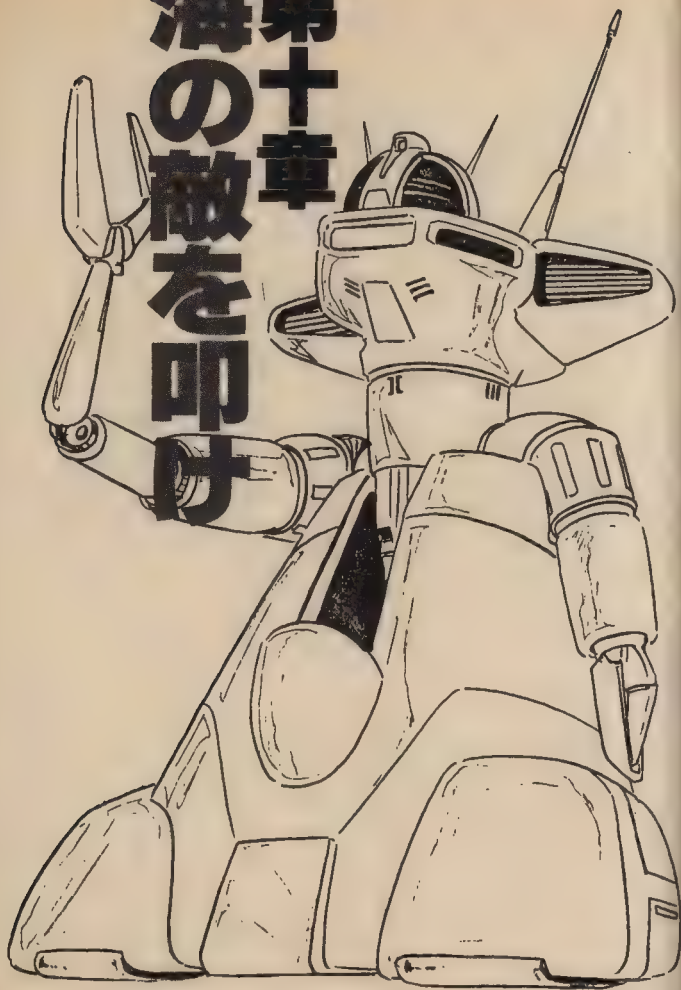
リビングエリアのテーブルの上で、ケン太は洞穴で見た壁画を思い出しながら描いていた。

「あの絵はゴーショーグンだよな。でも、僕に見える妖精達が、どうして他の人には見えないんだろう。まいっちゃうな」

ケン太の、踏み込む事の出来ない新しい領域を感じとったオバは、いてもたってもおられないという様子だった。見兼ねてか、そんな様子を察してか、サバラスは優しい表情で語りかけた。

「オバ、今はそっとしておけ……昔、風と話せる人がいた。川や森や山や海と話せる人がいた。今まで地球のどこかに潜んでいたそんな人達の魂と、ケン太は交信を始めたんだ」

やり場のない思いにかられているであろうオバに、サバラスは頷いて見せるのだった。

第十章 海の敵を叩け

ケン太少年がニューギニアのボサビ火山の洞穴で見つけたゴーショーグンに似た古代の壁画とゴーショーグンとの関連は定かではない。壁画の像の背中から放たれている、ゴーフラッシャーにそっくりな光は、神や仏の尊厳を表現するために描かれる光輪、あるいはオーロラ、ハローとかアーリオウル、仏教では光背などと呼ばれる、宗教画や像によくあるデザインといってしまえばそれまでの事であった。

しかし、ゴーフラッシャーを発射するゴーショーグンを古代人が見れば、巨大な神像と見紛(みまが)っても無理からぬ事だろう。

事実、強大なドクーガに対して密かに反感を抱く者にとっては、ゴーショーグンは反ドクーガのシンボルといえる存在だった。

——ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より——

*

今日もゴーショーグンはドクーガとの戦いを続けていた。

「相変わらず、いつもながらのワンパターンだな……」

❀「あと半年でケリがつくさ」

「正確には、あと百八十二日と十時間二十三分十五秒」

「詳しいな……レミー」

「ウェディングタイマーかけてんの」

「ウェディングタイマー？……」

レミーの目の前に、教会型をした逆算式のタイマーが置いてある。

「ほんとはね、結婚式が決まったらね、この時計に日どりをセットしておくの。結婚式まであと何日か、バッチリ分かるわけ……あと百八十二日と十時間……二十二分五十九秒……」

教会のデジタルが無表情に時を食べていく。

「でも、この時計、お遊びに終わりそう。この教会の鐘が鳴った時は……」

「やれやれ、結婚式どころか……」

「そう、私達が生きるか死ぬかが、はっきりしてるわけ……」

直情型の真吾は、こういう話に弱い。柄になくしんみりとつぶやいた。

「レミー……」

キリーは明るく言った。

「じめつかない、じめつかない」

「そう、やるだけやりましょう」

「よっしゃ、ゴーフラッシャー！」

真吾の声に、ゴーショーグンは快調にゴーフラッシャーを発射した。

*

ドクーガ司令本部のビジョンに写るゴーショーグンを見つめながら、ブンドルはいつもながらにつぶやいた。
「ますます磨きがかかって、美しい……」
「それしかないのか、ワンパターンめ！」
「ゴーショーグンがあの武器を使い始めてもう半年になる。なんとかならんのか？」
マザーが答えた。
「あの光を浴びるとメカの機能に異常が起こり、操縦不能になります。あの光には想像を超えた能力があるとしかいいようがありません」
「どうしようもないというのか？　これ以上、イライラさせられるのは沢山だ」
「しかし、一つだけ我々にも希望があります。我々のビムラーレーダーが感知したデーターの結果、ビムラーエネルギーの破壊力にわずかながらの変化が見られます。第二段階を迎えたビムラーの爆発力は太陽系を完全に破壊できました。しかし、第三段階を迎えた現在の反応から計算すれば、天王星付近までしか破壊できません」
皇帝がうなるようにつぶやいた。
「破壊力が弱まっているのだな」
「それも急速にです。計算によれば、あと百八十日と二時間でビムラーの破壊力は消えうせます。その時がおそらくビムラーの第四段階です」

「第四段階？　その時、何が起こるというのだ」

「分かりません、今は……」

♂「いずれにしろ、百八十日たてば、地球が壊れる心配もなく、心おきなく戦える訳だ。楽しみだな」

「それまで我々が持つかどうか……」

ブンドルがかぶりを振ってつぶやいた。

「なに!?」

皆の驚きを背に受けながら、ブンドルは黙ってビジョンを指さした。そこには子供の書いたゴーショーグンの絵が写っていた。

♂「なんだ、これは……」

「今年の世界児童絵画コンクールで優勝した子供の絵だ。ゴーショーグンが描かれている」

「バカな、なぜこんな絵を優勝させた」

「仕方あるまい。コンクールに送られた絵のほとんどにゴーショーグンが描かれてあった。今やゴーショーグンは子供達のアイドルだ」

ネオネロスは怪訝（けげん）なおももちで問うた。

「だが、世界中の人間達を我々は押さえてある筈だ」

「はい。しかし、大人達の気持ちを押さえる事は可能でも、子供まではムリ……そして今や大人達ですら……」

ブンドルはビジョンのボタンを押した。

ワラづくりのゴーショーグンの人形の回りを踊りまわる未開部族や、ゴーショーグンのプラカードを持って行進するヒッピー達の姿が、アトランダムに写しだされていった。

「最近、世界各地に、竹の子のように新しい宗教運動が生まれています。我々がいかに迫害を加えようと、その数は増える一方です」

「世の中、不景気になると、こういうのが増え出すものだ」

カットナルは吐き捨てるように言った。

「その通り。しかし、その不景気を作り出したのは我々ドクーガ……そして、彼らが決まって叫ぶ合い言葉は……〝ゴーショーグン〟……今や、ゴーショーグンは奴らの神です」

＊

グッドサンダー格納庫で眠るゴーショーグンに、オバはつぶやいた。

「ゴーショーグン……あなた達とこの旅を始めてもう二年半になるのよね……これが十歳のケン太君……」

オバは格納庫の隅で、隠れるように小型アルバムビジョンを見つめていた。ビジョンにパタパタと十歳の頃のケン太とオバが写し出されていった。

「十一歳のケン太君……」

勉強を嫌がってオバのマジックハンドから逃げ回るケン太が写し出されていく。

「十二歳の誕生日……」

ケン太とバースデーケーキを囲む、グッドサンダーの面々が写っていた。

「早いわ……月日のたつのって……」
そんなオバにサバラスが声をかけた。
「オバ、ここにいたのか？　一人でいるとは……珍しいな」
「私だって一人になりたい時もあります」
「ケン太は？」
「この頃は、ファザーのコンピュータールームに入りびたりです。あの子、私からどんどん離れていってしまうようで……」
「子供は時が来れば親から離れて行くものだ。その時、黙って暖かく見送ってやるのが親の務めじゃないか？」
「黙って見送る？」
「そう。子供の行く末に余計な口をはさまない事だな……それはもう親の責任ではない、子供の責任なんだ」
「それは分かります……でも」
「オバ、君は立派な母親だよ」
サバラスの慰めもオバの淋しさを晴らしてはくれなかった。
「ケン太君、私が君に教える事はもう無くなった」
ファザーの中で学習を続けるケン太に、優しくファザーは語りかけた。
「これから真田博士の新しい遺言をお見せしよう」

暗闇の世界に、ぽっかりと真田博士の立体映像が浮かんだ。

「ケン太、お前に、これから宇宙の始まりを見せよう。我々が存在する宇宙が誕生したのは、今から二百億年ほど昔の事だと考えられている。人の知識の及ばぬ大きな力、そう、大きな魂、ビッグソウルとでも呼ぶよりない何かが起こした巨大な爆発、ビッグバンによって、ある日、ある時、突然、この世に現れたのだ。

やがて、その爆発の中から様々な星雲が生まれ、その中から星が生まれた。

五十億年ほど昔、銀河系の渦巻きの先の一つから、やはりビッグソウルというよりない、ある巨大な力によってガス状の雲が作られた。これが我々の太陽系の始まりだ。

そして、宇宙に漂う小さな星くずが集まって、太陽系の三番目の惑星、地球が四十六億年ほど昔に生まれたのだ。生まれたばかりの地球は、空気も水もないただの岩の塊だった。だが、地球が生まれた時、内部に埋めこまれた得体の知れぬ放射性元素が、地球に目醒めをもたらした」

「分かった……その放射性元素がビムラーなんだね」

真田博士の映像はそれに答えず続けた。

「地球は放射性元素によって、目醒めの活動を始めた……地球の内部に閉じこめられていた様々の気体が火山の活動と共に地球の表面に吹き出され、空気を水を海を作り出していった。そして三十五億年前、遂に地球に生命が誕生し、長年月を経て人類まで進化したのだ。地球の生物は、三十五億年の長い道のりの後、人間まで行きついた。だが、これはほんの始まりにすぎない」

「はじまり？……」

「いや、もしかしたら、これで終わりかも……」

「うーん、始まりだの終わりだの、もったいぶらずに早く話してよ」
「そして一九〇八年、地球上の生命が新たなる段階へ向かう足がかりともいえるエネルギーが、宇宙の彼方から飛来した……それが、ツングスカのビムラーだ……だが、未開の土地に落ちたビムラーは、地球の生命が新しい段階に向かうための素材を見つけ出せなかった……。ケン太、お前に出会う前まではな」
「じゃあ、僕はビムラーに選ばれたのかな」
「私がビムラーを手に入れた時、たまたま私に子供が生まれた……それがビムラーが意図した事か、たんなる偶然なのか、それは分からない」
ケン太は不満そうに口をとがらして言った。
「偶然だったら迷惑じゃん」
「お前は、知能的にも体力的にも人並秀れているとは思えなかった。だが、お前は三つの時、母さんが亡くなってから、淋しさのせいか、ある物を友達と思うようになった。お前は機械を友達にして育っていった」
「それが他の人と違うの？」
「子供が人形や動物を友達として可愛がるのは普通の事だ……だがお前は可愛がるのではなく、友達として付き合い続けた。お前には、メカと心を通じ合える素質があった」
「心を通じあう……」
ケン太は、その時、何か特別な感覚に捉えられ、ハッとした。
「呼んでる……ファザー、今日はここまででいいよ」

「どうしました？」
「誰かが、また僕を呼び始めた」
「分かりました……場所は？」
ケン太は、呼び声の聞こえてくる位置、西経七十一度、南緯五十三度をファザーに告げた。次の瞬間、ビムラー炉が光り、グッドサンダーは瞬間移動を開始した。
その時、レミーはバスルームでシャワーを浴びていた。突然、お湯が止まったので、レミーはシャワーバルブを覗き込んだ。次の瞬間、グッドサンダーは瞬間移動した。
キリーは疲れていた。何も考えずに寝たかった。すぐさまベッドにダイビング……その時だった。キリーは宙に浮いたまま、瞬間移動した。
真吾といえば、射撃室で銃で的を撃とうとしていた。絶好調だった。引き金を引いたとたんの瞬間移動だった。

ドクーガのビムラー感知レーダーは、ただちに移動先をマザーに知らせた。
「グッドサンダー瞬間移動……場所は南アメリカ、マゼラン海峡……」

大荒れに荒れているマゼラン海峡に現れたグッドサンダーは、大波に揺られ海峡の崖に激突した。瞬間移動を解いたとたんの出来事だったからたまらない。
シャワーバルブを覗き込んでいたレミーの顔に水が飛び出した。「キャー！」、激突の衝撃で倒れたレミーは、顔からシャワーを浴び濡れねずみになった。

キリーはといえば、ベッドにダイビングした恰好で現れ、ベッドを通りすぎて床に落ちる始末。
真吾は衝撃によろめき、天井のランプを撃ち、絶好調もどこ吹く風。足元に落ちてきたランプに肝を冷やした。

訳の分からぬグッドサンダーの移動に、レミー、キリー、真吾は、慌てて通路に飛び出した。
「なんだ、いったい」
「地震か？」
「いやん、地震とカミナリに弱いんだ」
真吾とキリーは、レミーを見て呆然となっていた。
「俺も弱いんだ、レミーちゃんの、そーゆースタイル」
レミーは、バスタオル一枚で飛び出して来ていた。
「あ、やだ。見ないで」
バスタオルを二人の頭にパッと投げつけると、レミーは部屋にかけ込んだ。
「見た？　初公開……」
「スロービデオがあればな……」
キリーと真吾には若干の余禄があったものの、いきなりの瞬間移動には腹を立てていた。三人はサバラスに喰ってかかった。
「瞬間移動も結構ですけどね、ひとこと声をかけてくれませんかね」
胸元をおさえてレミーも続けた。

🐱「ほんと、プライベートタイムは大事にして欲しいわ。最近、ファザーちゃん、人権無視が目立ちません？」

✿「いったい何のための瞬間移動です。しかも、こんな嵐の海に……」

「ケン太がやった……何かに呼ばれてここへ来たのだ」

サバラスが答えた。

✿「ケン太が……」

と、ビジョンに大慌てのオバが写った。

「大変です。ケン太君を止めて下さい」

「オバ、大丈夫だったら。行かせてよ」

格納庫の潜水艇にケン太は乗り込もうとしていたのだ。

「いけません。こんな嵐の海に出るなんて！」

「呼んでるんだ、僕を！　海と話せる人が……」

「こんな荒れた海に、そんな人がいる筈がありません」

「いるんだよ、確かに」

サバラスはオバに言った。

「オバ、行かせてやれ」

✿「待って下さい。いくらなんでもムリです」

真吾が止めに入った。

「真吾、我々の旅の成否はケン太次第で決まる。自由にやらせるんだ」

キリーは呆れ果てたと言わんばかりに肩をすくめた。
「おいおい、あのチビッ子が鍵だっていうのか？」
「キリー、難しい話はパス……女は理屈は嫌いなの……隊長、私があのメカを操縦するわ……野次馬……野次馬……参加しなくっちゃ」
「よし、野次馬なら俺も負けない」
「真吾とキリーは敵に備えて待機しろ」
サバラスはキリーを押し止めた。
「そういう事。じゃあね」
レミーは格納庫へ急いだ。

レミーとケン太を乗せた潜水艇が進むマゼラン海峡の海中には、人工のものとも自然のものとも思えぬ不思議な城のようなものがいたる所に広がっていた。荒れた海面が嘘のように静かだった。
「ウーン……ファンタスティック……私好み……」
「あっちへ向かって――」
ケン太が海底の一方を指さした。
やがて、海草の森の向こうに、城のような岩山が見えてきた。すると突然、ケン太は海底の暗闇に向かって語り始めた。
「やあ、君達だね……僕を呼んだのは……」
「誰？　誰と話しているの？」

「見えないの、あれが……あ、そうか、僕にしか見えないんだよね」
ケン太には光り輝く無数の炎が見えていた。
「昔々ね、海の言葉が分かって、海と話が出来る人がいっぱいいたんだ」
「知ってる。子供の頃、お伽噺でよく読んだわ、そういう話」
「お伽噺じゃなくて、本当にいたんだよ。でも、いつの間にか人の前から姿を消したんだ。けれど、その魂（ソウル）は、今もここにこうして生きているんだ」
「フーン。でも、凡人の私には見えないって訳ね。ま、いいわ。代わりに通訳してちょうだいね」
「レミー、信じてくれるの」
「うん。わたし、占いとか魔術とか、ほら、オカルトっぽいの好きだもん。おやんなさい」
「なんのこっちゃ……」
ソウルが光り始めた。ケン太はソウルの言葉をレミーに通訳した。
「私達は君を待っていた。君にお願いしたい事がある……何を？　何をさせたいの？　この僕に……」

*

同じ頃、ブンドルとケルナグール、カットナルは、ドクーガの控室にいた。ブンドルはタロットカードを玩（もてあそ）んでいる。檻（おり）の中の熊のようにうろついていたカットナルが、じれて叫んだ。
「ブンドル、最近お前、たるんどりゃせんか？　マゼラン海峡へ行って、一発ぶち込んで来た

らどうだ」
「無駄な戦いは美しくない。どうせあと百八十日でケリはつくのだ」
特大のフライドチキンを頬ばりながら、ケルナグールが同意した。
「うむ。そういえば、わしもこの戦いでは予算を使いすぎたからな、休みでもとるか」
「いらいらさせる奴らだ。こら、精神安定剤！」
カットナルはむさぼるように薬を食べ始めた。いくら副作用はないとはいえ、これでは薬ぶとりになってしまう。ブンドルはそんな事は意に介せぬように、タロットカードをめくった。
「大凶か……星占いは天中殺……不吉な……」

「ベーリング海峡へ向かえ？」
怪訝そうに聞きかえすサバラスに、レミーはケン太とソウルの話を要約して話した。
「要するに、ベーリング海峡にドクーガの基地があって、世界中の海流を自由に動かしているんですって。そうでしょ」
レミーはケン太に確認した。
「うん。そのせいで、海の自然や気候がおかしくなって海が泣いているって言うんだ」
「誰が言うんだって？」
キリーがレミーに聞き直した。
「その海と話をできる何とかさん達」
真吾も呆れて聞いた。

「レミーは見たのか、聞いたのか？」
「ノン。でも、グッドサンダーの瞬間移動だって、知らない人が聞いたら信じると思う？」
「まあ、信じないでしょうナ」
「でしょう。だから、信じられない話。でも、私、信じちゃう」
「女の直感？」
「それ、それ」
「ベーリング海峡への攻撃、しかけてみるか」
サバラスがおもむろに言った。
「子供のお伽噺を信じるの？」
「ＳＦだもん」
「お伽噺がＳＦかよ？」
「シンプル・ファンタジー」
「分かってんのかなぁ……」
ケン太は、溜息をついてつぶやいた。

＊

ベーリング海峡へ瞬間移動するグッドサンダーの情報を知ったドクーガ司令本部では、いつにない緊張が走った。
「ベーリング海峡基地を破壊された場合、損害はドクーガの年間予算三年分に相当します」

「また税金や物価を上げれば良いではないか」
カットナルの無神経さをしかるように、マザーは言った。
「これ以上の値上げは、社会不安、パニックを世界中にまきおこすでしょう」
ブンドルが他人事のようにつぶやいた。
「美しい地球の自然を変えてまで儲けようとする、もともと賛成しかねる計画だったが……」
♂「今回は誰がいく？」
ネオネロスの声が響いた。
「ドクーガの全軍を使え！」
「それは、ちともったいないのでは」
「ドクーガ破滅は、お前達の破滅だ……それが分からぬお前達ではあるまい」

＊

ベーリング海峡にグッドサンダーが現れたとたん、ドクーガ海峡基地はフルパワーの防衛態勢をとった。海底から次々と浮上してくる要塞。しかし、ゴーショーグンの敵ではなかった。ゴーショーグンは片っ端から要塞を叩きつぶしていった。
やがてベーリング海上空に、「ウィリアムテル序曲」を響かせて、ブンドル、カットナル、ケルナグールの合同部隊が現れた。ブンドル、ケルナグール、カットナルの旗艦を囲んで、空の全てがドクーガの戦闘機という感じだった。
「おい、久し振りのお出ましだぜ」

「ガンガン鳴らしちゃって。ヤケッパチなんじゃない？」
「それにしても、オーバーな数……」
サバラスが、ビジョンの中から真吾達に注意した。
「それだけ、この基地が敵にとって大切だという事だ。心してかかれ！」

ドクーガの三幹部が命令を下した。
「全軍、徹底的にやれ」
「全軍攻撃開始！」
「全軍攻撃開始……消耗戦か……空しい」

ゴーショーグンは敵機を次々に落としていくが、敵の数は一向に減らなかった。
「チェッ、これじゃキリがない」
「基地に突っ込んで、一気にケリをつけよう」
ゴーショーグンは海面に降りようとしたが、
「ゴーショーグンを海に入れるな。体当たりで食い止めろ」
無人機とはいえ、ゴーショーグンに体当たりするドクーガ機は、悲愴ですらあった。
「ねえ、この戦い、ちょっと悲愴じゃない？」
「メカ好きのケン太なら、泣いて怒るぜ」

✿「ああ……まいるなあ」
「そこから海底に向けてゴーフラッシャーを撃て……」
サバラスが真吾に命じた。
✿「しかし、海の中で通用するかどうか……」
「花火や火縄銃じゃない……水に入れて消えはしまいよ」
「切り札は景気良く使いましょ」
✿「よし、やったろ！」
真吾の発射したゴーフラッシャーは、海面に吸い込まれていった。

海底基地がゴーフラッシャーに包まれ、
「海底基地、機能停止……」
というマザーの声を聞くやいなや、ブンドルは部下に命じた。
「ブンドル軍、全艦帰還する」
ブンドル艦のビジョンにカットナルが写った。
「ブンドル、戦いはまだ……」
「勝負は決まった。退き際はいさぎよくせよ」
ケルナグールが割り込んだ。
♂「しかし……基地は壊れたと決まった訳ではあるまい？」
「さらばだ」

ブンドルは二人との交信を絶って、去っていった。
やがて海面に、轟音と共に海底基地が浮上した。どこにも損傷は見られなかった。
「ほら、見ろ。基地はビクともしてないぞ」
「さすが、我らがドクーガの誇る基地だ……ん!?」
だが、次の瞬間、基地は粉々に吹き飛んでいた。
「やはり、こうなるのか……」
ケルナグールはフライドチキンをむさぼり食った。
「薬、くすりだ」
カットナルの台詞はいやになるほどワンパターンだ。だが二人には他になすすべがなかった。

メカの残骸が漂う海辺で、ケン太はソウル達と話していた。
「そう、これで海は元通りになるんだね……」
ソウル達はひときわ光って、ケン太の回りを飛び回った。
「でも、またメカが沢山死んじゃった……僕、きっとメカ達を助けてやる……」
ソウルは、ケン太に同意するように光った。そんなケン太を見つめる真吾達は、ケン太と交信する目に見えぬ得体の知れぬソウルの存在を、もう、信じざるを得なかった。

第十一章 決戦への秒読み

ビムラーが第三段階を迎えて十カ月がたった。ドクーガは組織を維持するために無謀に物価を上昇させた。ニューヨーク、ロンドン、パリ、モスクワ、東京……世界各国の大都市で反ドクーガデモが同時発生し、ゴーショーグンを旗印にする新興宗教が反乱を起こした。
物価の上昇はこの一年で二百倍、第一次世界大戦敗戦時のドイツの物価上昇もかくやと思われるものだった。町には失業者が溢れ、食べ物が手にはいらず、飢死する者も続出した。しかも、私とグッドサンダーの宇宙中継で、物価の値上がりと重税をもたらしたものがドクーガである事を、世界中の人々が知りすぎるほど知っていたから、反ドクーガの反乱は無理からぬものだった。私ことイザベル・クロンカイトも、世界中の地下組織と連絡、反ドクーガの体制作りにやっきになっていた。
ブンドル局長の誇る情報網も、私の足どりをなかなか摑まえる事が出来なかった。ドクーガ以外の、私を匿ってくれる人々がそれだけ増えたという事である。
――ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より――

＊

ドクーガ司令本部では、ゴーフラッシャーを十カ月の間分析した結果が、マザーによって知らさ

れていた。
「あの光線には破壊エネルギーらしきものがなんら存在しない事が判明しました。人間や生物には全く無害です」
カットナルは怪訝そうにマザーに聞いた。
「しかし現実には、あの光を浴びたメカはことごとく破壊されているではないか」
「破壊されたのではなく、破壊したのです。メカ自身が自らを……」
ブンドルが眉をくもらせた。
「メカ自身が自らを……メカが自殺したというのか？」
「メカに気持ちや意志があるとしたら、そういう言い方も出来るでしょう」
「メカが意志を持ってたまるか……」
ケルナグールが叫んだ。
「そうとも……人間のわしだって、今までいくら負けても自殺しようなどとは思わんかったわい」
「それは当然だ。おまえの単純さはメカ以下……人間の美しき悩みなど持てる筈もない」
「言える」
「むむッ！　ケルーナ！」
ケルナグールの鉄拳が、ケルーナの首をはじき飛ばした。いつものパターンだった。二人にバカにされるたびに、ケルナグールはケルーナをいじめるのだ。ブンドルは、そんなケルーナを見つめて言った。

🌹「ケルナグールのやつ当たり用メカ……叩かれるだけが目的のメカ……このメカに気持ちがあるとすれば、ただ叩かれるだけの存在では我慢できまい……メカに気持ちなど……思いすごしだ」
それまで黙して何も語らなかった皇帝が口を開いた。
「もうよい。ゴーフラッシャーとゴーショーグンには構うな。それより、ただちに反ドクーガのデモと宗教活動を制圧しろ」
♂「しかし、グッドサンダーの方は……」
「放っておけ。ビムラーの破壊力はもうすぐ消える。その日まで待つのだ。今は足元の火事を消せ」
ビムラーの破壊力喪失まで、残るはあと六十日と一時間だった。

＊

ケン太は、今日もファザーの中に入りびたっていた。
サバラスは、ケン太以外の一同を集めて言った。
「あと六十日で我々の運命は決まる。ビムラーの破壊力が消えたその日から、ドクーガは全力で攻撃を仕掛けてくるだろう」
✿「それと知ってか、今は全然攻撃してこないものな」
🐱「でも、このままやられるのを待つだけなんて……どうにもならない？」
✿「残る六十日間でドクーガの息の根を止めるより他、手はないな」
🐱「一気に本拠地を叩いたらいいのよ」

「おいおい、気楽に言うけど、どこにあるのよ、その本拠地……ドクーガ最大の秘密でしょ、それ」
「待つよりない……いずれにしろ、勝負は最後の一日で決まる」
「六十日……」
オバは思いつめた声でそうつぶやくと、リビングエリアを出てファザールームに向かった。

「ファザー、ケン太君を返して下さい！」
オバは叫んだ。
「オバ、〝ケン太を返してくれ〟とはどういう事かね」
「あと六十日して敵が攻めてきたら、私達は全滅です。たとえ逃げても、敵は私達の息の根を止めるまでしつこく追って来るに違いありません」
「おそらくそうだろう」
「でも、ケン太君は子供です。敵も子供の命までは狙わないと思います」
「どうかな、それは……」
「ケン太君だけは生きのびて欲しい……私達が殺されたら、ケン太君はひとりぼっちです。せめて一人で生き抜いていく知恵を教えたいんです」
「ケン太は私の中で、もっと大切な事を教わっている」
「生き抜く以上に大切な事なんてあり得ません。ケン太君を返して下さい！」
ケン太の声がファザーの中から聞こえた。

「オバ……もういいんだよ。僕はちゃんと生きていける。それより、今、ファザーの中で知りたい事がいっぱいあるんだ」
ファザーの声が冷たく響いた。
「オバ……悪いが邪魔はしないでくれ……」
「邪魔……そう邪魔なんですね、わたし……」
オバは、うなだれて出ていくしかなかった。

ファザーの中では、真田博士の立体映像がケン太にビムラーの謎を話していた。
「ケン太、もう気付いただろうが、ビムラーとは、広大な宇宙に生命を芽ばえさせ、育てていくエネルギーなのだ。この宇宙を生み出した巨大な意志・ビッグソウルは、ビムラーからの交信で、太陽系の生命が宇宙に進出する能力を持つまでに成長した事を知った……だが、人類は本当に宇宙に進出する宇宙人としての資格があるだろうか……宇宙には様々な生命体が存在している。人類はそういった生命に悪意を持たず、意志、魂を通じ合い、共に生きる事が出来るだろうか？」
「出来ないとしたら？　どうなるの？」
「そんな悪質な生命は、ビムラーと共に消した方がいい。地球上の悪の組織ドクーガとの戦いに勝てぬような人類なら、宇宙に進出する資格はない。我々はドクーガとの戦いでためされているんだ。私は、ツングスカで手に入れたビムラーの波長を解読して、この事を知った。そしてビムラーの波長は、ゴーショーグンとビムラー炉の作り方を教えてくれた」
「あれは、父さんが作った物じゃないの？」

「私は手伝っただけだ。ビッグソウルの意志をな……」

その頃、グッドサンダーの甲板でオバはしょんぼりと夕陽を見ていた。振り向くオバにレミー達が明るく声をかけた。

「どうしたの。元気ないぞ、オバ……」

「ケン太君、もう私を必要としないようです。人間の母親にも、こんな日が来るんでしょうか……」

「親はなくても子は育つさ、オバ」

「そりゃ、言いすぎだぞ、キリー」

「ん？　真吾、レミー、お前達は親の顔を覚えているか？」

「いや……子供の頃に飛行機事故で二人共死んだ――」

「わたしも……写真の中でしか覚えてないわ」

「俺なんか根っから一人ぼっちだ。親の〝オ〟の字も知りゃしない……それでもこうやって、俺達は生きてきた。――でもよ、オバ。いてくれたらいいと思ってたよ」

意外そうに見つめるオバに、

「親さ……何もしてくれなくていい……いてくれるだけでいいってな」

「俺もだよ、オバ」

「キリーなんていいほうよ。捨てられたにしろ、どこかで生きている可能性があるんでしょ。わたしや真吾の両親なんて、死んだ事がはっきりしてるんですものね」

❀「オバ、教える事がなくなったからって、ケン太が一人歩きするようになったって、オバはケン太の母親だ。いるだけでいいんだよ」
🐈‍⬛「ケン太は羨ましい奴だぜ」
🐱「私、オバみたいな母親になれるかな」
オバは嬉しかった。メカでなければ涙で見えなかったに違いない夕陽を、オバは黙って見つめた。
しかし、その少しだけ暖かい時間も長くは続かなかった。
緊急ブザーがけたたましく鳴った。
司令室に駆け込んで来た真吾達を待っていたのは、敵攻撃の報ではなく、世界中の都市から発せられたグッドサンダーへのコールサインだった。
❀「コールサイン？」
サバラスは頷いて、ビジョンのボタンを押した。
イザベル・クロンカイトの姿がそこにはあった。一年のうちに、その表情からは幼さは消え、どこかレミーに似た逞しさが感じられた。
「ハーイ、グッドサンダーの皆さん、お元気ですか？」
キリーは、自分の姿がイザベルには見える筈もないのに手で合図した。イザベルは、カメラににっこり笑いかけ、続けた。
「このコールサイン、ドクーガに私の位置を知られぬように、世界中の都市から送っています。今、世界中でゴーショーグンを旗印に反ドクーガデモが湧き起こっています。ドクーガの制圧は厳しいですが、日に日に我々の仲間は増えていっています。

グッドサンダーの皆さん、どの都市でも構いません、ゴーショーグンで反ドクーガデモを守って下さい。我々を勇気づけて欲しいのです。そして、このコールサインをお聞きの世界中の皆さん、ドクーガの魔の手から自分自身を守りましょう。この戦いは、誰のための戦いでもありません。自分自身を守る戦いです。では、皆さん、いつかどこかで、またお会いしましょう」

イザベルがそう言い終えると、画像はプツンと切れた。真吾がおもわず、イザベルを称してこう言った。

「まるで二十一世紀のジャンヌ・ダークだな」

「負けそう……」

サバラスはニヤリと笑い、

「みんな、出発だ……お呼びとあれば行かねばな」

キリーが肩をすくめて、

「出発って、どこへ。世界中の都市って言ったって、雲を掴むような話だぜ」

「何のための瞬間移動だ。我々は、どの都市にも一瞬にして飛べるのだぞ。ファザー！　瞬間移動、開始だ」

*

反ドクーガデモや運動を守るゴーショーグンとグッドサンダーの戦いは、パリで、ニューヨークで、ロンドンで、東京、北京、モスクワで……瞬間移動を駆使して全世界のいたる所で続けられた。

「おお、なんと美しい姿。君は見たか、この輝き。ゴーショーグンはまるで神のようです。正に現

代の神であります」

ゴーフラッシャーを放つゴーショーグンの姿を、ドクーガに造反する地下放送局のアナウンサーは、こう言って称賛した。

❀「神だか何だか知らないが、目いっぱい派手にやるぜ」

真吾達は、ある時はパリの凱旋門を戦闘機でくぐり抜け、またある時はモスクワの赤の広場で赤旗を振り、ワシントンでは星条旗を振った。

「真吾、やりすぎでないかい？」

「きのうは東、今日は西。ちと、節操がないんじゃない」

❀「いいの。敵はドクーガなんだから。思想や主義はどうでもいいの」

「さすが、日本人」

❀「あん？」

「無主義、無宗教……おやんなさい」

ゴーショーグンとグッドサンダーの、この大デモンストレーションといっていい、ドクーガとの戦いが功を奏すのに、そう長い時間はかからなかった。ゴーショーグンの圧倒的強さに同調して、ドクーガからの離反を宣言する国が次々と現れた。

そして、わずか一カ月の間に、世界各国政府の四分の三が反ドクーガ勢力になっていた。

ドクーガ司令本部は、日に日に暗鬱（あんうつ）な空気が増していた。

「これでは、ビムラーが威力を失うあと一カ月まで、ドクーガ本体がもたんではないか！」
「ご安心下さい。この私にお任せを……」
地団駄踏むカットナルの前に、無精髭をはやし放題にして、フケを振り撒きながら、ジッター博士が現れた。
「私、新しいゴーフラッシャーを目の当たりにして以来、月面の秘密研究所で寝る間も惜しんで研究を続けてまいりました。ご覧下さい、私のターンフラッシャーを……」
ビジョンに、巨大な反射板をつけたメカ、ターンフラッシャーが写った。
「この巨大な反射板がミソ……ゴーショーグンの放ったゴーフラッシャーをそのまま反射、ゴーショーグンはゴーフラッシャーをもろに浴び、一瞬のうちに我らのメカと同じ運命に……それで全て終わりでございます」
ケルナグールが珍しく頭をひねりながら、まともな事を言った。
「しかし、敵は反ドクーガ運動の応援で世界中を飛び回っている。今度、どこに現れるか分からんぞ」
ブンドルが、バラを弄び（もてあそび）ながら入ってきて言った。
「おびき出す手ならある。我々の情報網はここ二カ月、全力でたった一人の小娘を追いかけて来た。そして遂に……」
ブンドルはバラの香りをかいだ。

＊

アフリカ、コンゴのジャングル地帯。
かつて人が足を踏み入れた事もないその密林の中に、見なれない大型のテントが張ってあった。
ドクーガの目を避けて全世界にコールサインを送り続けているイザベルのテントだ。イザベルは仲間達と地図を見つめながら、にっこり笑った。
「世界の四分の三が反ドクーガに回ったわ……あと一週間もすれば、ドクーガの味方は無くなり、ドクーガは孤立無援になるわ」
その時、テントの外から澄みきった声が聞こえた。
「そうはいかぬ。やっと見つけたよ、二十一世紀のジャンヌ・ダークくん」
それは、イザベルが初めて聞くブンドルの声だった。
次の瞬間、テントが開かれ、スナイパー達がなだれ込んできた。イザベルは慌てなかった。この日の来る事を覚悟していたのだ。
「私の戦いは終わったようね……」
イザベルは机の上の銃をとり、自分の頭に向けた。
「みんな、さよなら……後は頼みます」
引き金に指をかけたその時、手に熱いものが走り、銃がこぼれ落ちた。
銃を持ったブンドルがテントに入って来た。
「今、死なれては困る。君の墓場はこの私が決めよう」
ブンドルは部下にイザベルの傷の手当てを命じると、イザベルの顎を軽く持ち、つぶやくようにささやいた。

「それにしても、レミー・島田といい君といい、ドクーガに逆らう女性はなぜかそれなりに美しい」
イザベルは、ブンドルの瞳に射すくめられ、顔をそむける事も出来なかった。

＊

「我々は、ドクーガに逆らう張本人、イザベル・クロンカイトを遂に逮捕した。明朝夜明け、オーストラリア・エアーズロック頂上で処刑する。なお、処刑の模様は見せしめのため、全世界に中継する」
ジャンヌ・ダークといった衣装を着せられて柱に縛りつけられているイザベルの姿が、ブンドルによって全世界に放送された。
「誘いだな……これは」
サバラスが冷静につぶやいた。
✿「えっ？」
「いまさらイザベル一人を殺しても、反ドクーガの運動は収まりはしない。奴らは我々の来るのを待っているんだ」
真吾が意気込んで言った。
✿「隊長、罠だと分かったとしても……」
「言うまでもない」
キリーはビジョンのイザベルを見つめ、一言だけ言った。

「俺がやる」

＊

大平原に陽が昇っていった。
オーストラリア・エアーズロック——この世界一巨大な岩の塊に、朝の陽が複雑な影を描き始めた。
イザベルの処刑の時が来た。
太鼓が鳴り、イザベルの前に銃殺隊が並んだ。ブンドル好みの旧式な処刑法だった。
上空ではケルナグール旗艦がターンフラッシャーと共に待機している。
♂「早く出て来い、ゴーショーグン。ん？　オーッ!!　あれは」
地平線に大きく広がった陽の光の中に、黒い影が浮かび上がった。その黒い影から二つの光がどんどんエアーズロックに向かって来る。
それがゴーショーグンの目だと分かった時には、エアーズロックの銃殺隊はたちまちのうちに倒されていた。
ゴーショーグンの足から、キリーの操縦するジャックナイトが飛び出し、イザベルの処刑台に接近していく。キリーはコクピットから身を乗り出すと、イザベルを縛ってある綱を銃で撃った。柱から落ちるイザベルの手を摑むと、抱きあげた。
「キリー！」
イザベルは鋭く叫んだ。

キリーは照れ笑いをして言った。
「まだもったいないぜ、その若さで死ぬのはな」
ドクーガのスナイパー達の銃弾が機体ではじけた。
「おっととと……再会の喜びはおあとでたっぷり」
キリーはイザベルをコクピットにひきずり込んだ。
上空のケルナグール艦とターンフラッシャーがゴーショーグンの前に降りてきた。
真吾がキリーのビジョンの中で叫んだ。
❀「キリー、カンバック。敵の本命さんらしいのが現れた」
「オイヨ！」
ジャックナイトは、素早くゴーショーグンの足に収納された。
「可愛い子ちゃんをいじめるような悪い子は……」
「ひと思いにやっちまえ」
❀「分かってる。ゴーフラッシャー！」
ゴーショーグンは、ゴーフラッシャーをターンフラッシャーに浴びせかけた。
ケルナグールが叫んだ。
♂「今だ！　ターンフラッシャー！」
ゴーフラッシャーの光の針を、急激に開いた反射板がゴーショーグンに突き返した。
ゴーショーグンは、ゴーフラッシャーを浴びた他のメカのように硬直して動かなくなった。
❀「しまった。ゴーフラッシャーをもろにかぶっちまった」

「やだ、ゴーショーグン、もうすぐ粉々だわ」
「脱出用意だ！」
「待て！　変だぞ……」
真吾の前で操縦桿が自動的に動き出したのだ。
キリーが真吾に聞きかえした。
「どうしたんだ、真吾」
「操縦桿が勝手に動いている」
「本当！　こっちもだわ」
ゴーショーグンは再び動き出し、手に剣が握られた。
「ワッ！　キリー、勝手な事をするな」
真吾が叫んだ。
「俺は何もしとらんよ。レミーじゃないのか……」
「リーダーは真吾でしょ」
「そんな……するとゴーショーグンは、おい！　勝手に動いてるぜ」
ゴーショーグンの行動は、意志を持ったとしか思えなかった。剣でターンフラッシャーの反射板を叩き割ると、ケルナグール艦へゴーフラッシャーを再び放った。

「ケルナグール旗艦、機能停止」
ゴーフラッシャーの青白い光を浴び、ケルナグールは悲鳴をあげた。

♂「し、しまった……急速降下……脱出する」
ケルナグールとケルーナが脱出したのとケルナグール艦が粉々に自爆したのは、ほぼ同時だった。
我が身の無事を確認すると、ケルナグールはわめき散らした。
♂「なぜだ……敵のメカはバラバラにならず、なぜ、わしのメカだけが……」
その時、ケルナグールはケルーナも無事な事に気づいた。
♂「よりによってお前なんぞが助かりおって。いまいましい、ぶん殴ってやる」
ケルナグールはケルーナに殴りかかった。だが、ケルーナは信じられない行動をとった。ケルナグールの拳を、フットワークよくかわしたのだ。
♂「ん!?　なぜ逃げる!」
♂「バカな。このッ」
「ケルーナ、ケルーナ」と、ケルーナはケルナグールを非難するように同じ言葉を繰り返した。
さらに殴りかかるケルナグールに、ケルーナの足蹴りが飛んだ。
♂「な、なにをする」
「ケルーナ、ケルーナ」、ケルーナは明らかに反抗していた。
♂「よくも……よくも……」
ケルナグールは銃を抜き、ケルーナを撃った。ケルーナは銃弾を飛び上がってよけると、頭を抱え逃げ出した。
♂「メカが主人に逆らうとは……チッ!」
ケルナグールは銃を地面に叩きつけた。と、その銃がくるっとケルナグールの方に向き暴発した

のだ。銃は自分の意志でケルナグールを狙ったかのように見えた。
♂「ヒッ！」
今度はケルナグールが、頭を抱えて逃げる番だった。

戦いを終え、着地しているグッドサンダーの前に、行き場をなくしたケルーナはやってきた。ケルーナは、じっとグッドサンダーを見上げた。何かを必死に語りかけようとしている様子だった。

グッドサンダーの一同に、一年振りのイザベルとの再会を喜んでいる時間はなかった。
ゴーショーグンの応援を待つ反ドクーガ運動は、世界中の至る所で起こっている。
「イザベルを安全な場所に送ったら、ただちに瞬間移動する。いいね」
サバラスが皆に言った。
その時、ケン太が何かを感じて叫んだ。
「待って！　誰かが呼んでいるよ。グッドサンダーに入れてくれって……外で叫んでいるよ」
ビジョンにしょんぼりと立ちつくしているケルーナが写った。
「幼児向け暴力発散用メカ、戦闘能力なし……」、ファザーは、ケルーナが危険のないメカである事を一同に知らせた。
「ケルーナ、ケルーナ」
その言葉しか繰り返せないケルーナだったが、ケン太にはケルーナの意志が読みとれた。ケルーナもゴーショーグンと同じようにゴーフラッシャーを浴びて、一人歩きし始めたのだ。

ケン太がケルーナの思いを通訳した。
「ドクーガの暮らしはもう沢山だ……そう……ドクーガから逃げて来たんだね」
ケルーナは頷いて言った。
「ケルーナ、ケルーナ」
「なに、ドクーガの本拠地を知っている？」
サバラスの眉がピクリと動いた。
「どこだ、そこは」
「ケルーナ、ケルーナ」
「スイス・ジュネーブのオールワールドバンク本店……」
真吾が頷いて言った。
「よし、攻撃するなら今だな」
サバラスはかぶりを振った。
「いや、今は危険だ。ドクーガの皇帝ネオネロスは、敗北を喫するぐらいなら、グッドサンダーを破壊して、地球もろ共に自爆する道を選ぶだろう」
「地球の人、みんな巻き添えにして？」
「そういう男だ……あの男は……勝負はビムラーに破壊力の無くなったその日に決まる」
「二週間後……」
皆が息を呑んだ。
イザベルは眦(まなじり)をあげて言った。

「私、世界中に知らせます、この事を……」

＊

ドクーガ指令本部では、その頃、皇帝がドクーガ全軍に命令を下していた。
「あと十四日で、ビムラーの破壊力は消える。もうドクーガから離反する者は追うな。持てる力を貯え、最後の戦いに備えるのだ。最後に笑うのはこのわしだ……わしにはまだ切り札が残っている。フフフ……」
その自信を表すように、今まで誰一人見た事のなかった皇帝の顔にスポットライトが当たった。
それは、どこかサバラスに似ていた。

第十二章
果てしなき旅立ち

そして十三日間が矢のように過ぎた。最後の戦いを明日に控え、全世界の人々が固唾(かたず)を飲んでドクーガとグッドサンダーの動きを見つめていた。
ビムラーエネルギーがその破壊力を失うまで、あと十時間を残すばかりになった時、グッドサンダーは、夜のレマン湖に瞬間移動した。

——ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より——

*

イルミネーションの輝くオールワールドバンク本店と目と鼻の先の湖上に浮かぶグッドサンダーは、時を待って静かに対峙していた。
ケン太はファザーの中で、真田博士の最後の遺言を聞いていた。
「ケン太、これが私の最後の遺言だ。明日お前が十三歳になり、ビムラーが第四段階を迎えた時、お前は宇宙の意志、ビッグソウルから宇宙にはばたき、他の宇宙生命と共に生きる資格を与えられる」
「資格……？」
「そう。その資格を受けるか否かは……お前が決める事だ。私もビッグソウルも、お前に何の強制

もしない」
「僕が選べるの？」
「選ぶのはお前……そしてお前は、地球のソウルの代表として、地球の生命が宇宙にはばたくべきか否かを決めるのだ……」
「僕、僕、答えは決まってる！」

遺言を聞き終えてファザーから出てきたケン太を、ぽつんとオバが待っていた。
「ケン太君、夕飯です。みんなが待っていますよ！」
「オバ……僕、明日になったら……」
「何も言わないで……時が来れば、子供は親の下から巣立っていきます」
「オバ……」
「あなたのやりたいようにやりなさい。自分に責任を持ってね……」
ケン太がぽつんと言った。
「ありがとう……母さん……」
「えっ……今、なんて……」
「母さん……ありがとう……へへ、オバに一度、こう言ってみたかったんだ」
「…………」
「どうしたの、オバ……」
「いえ……何でも……さ、最後の夜です。みんながお待ちかねですよ」

「うん！」
「行きなさい。早く……」
ケン太は頷き、駈けて行った。
「……母さん……わたしが……母さん」
オバは今、ケン太の立派な母親だった。

オールワールドバンクでは、最後の戦いを前に、三人の幹部は自室でそれぞれの時を過ごしていた。
ケルナグールは妻のヨーコと並んでいる写真を見つめながら、遺言を音声ワードプロセッサーで書いていた。
「妻よ、もしかしたらわしは、明日死ぬかもしれぬ。我が最愛の妻よ……我が全財産を君に贈る。二人の間に子供が生まれなかったのが唯一無念だ……」
いくら美しいヨーコ夫人とはいえ、二人の間に子供が生まれたらどんな子供が生まれるか……ケルナグールは、そんな事を考えた事は一度もなかったのだ。

カットナルは、母の巨大な肖像画の前に立っていた。
「母よ、父と僕を捨てた母よ。僕は今もあなたを恨みはしません。ただひとこと、死ぬまでに〝お母さん〟と叫びたかった」
カットナルのただひとつの目から、涙が一筋流れた。

ブンドルは、楽譜とオーディオテープの山を前にして悩んでいた。
「散り際は美しく……ラストのクラッシックは……バッハかベートーベンか、グリーグか……ああ、最後まで迷う……」
が、ブンドルはしばらくして頭をあげた。
「私は芸大を退学以来、他人の芸術ばかりをめでてきた……だが私には芸術を生みだす力があった筈だ。最後の名曲は私が生み出すべきだ」
ブンドルはオーケストレーション・キーボードに向かった。このキーボードがあれば、どんな管弦楽も一人で作曲・演奏できる。その夜、ブンドルは二十五年振りに酒を断ち、作曲に没頭した。

一方、グッドサンダー側にも、それぞれの時があった。
キリーは遂に自伝の、一年を超える執筆期間を終えた。
「俺には結局何もなかった……ああ……何もないまま終わってしまうのか……キリー・ギャグレー自叙伝、ブロンクスの狼(ウルフ)……THE　END……終わった」

何もないのは真吾とて同じだった。
真吾は、ただひたすら射撃室の的を撃ち続けていた。

時計がビムラーの破壊力喪失まで、あと六時間を指した時、突然レミーの部屋の火災報知機が鳴

った。
駈けつけたキリーと真吾がレミーの部屋を開けると、肉の焦げた臭いと煙がたちこめ、その中に肩をすくめたレミーがフライ返しを持って立っていた。
「ハンバーグ、焦がしちゃった……」
「ハンバーグ？」
「こんな夜更けにか？」
「みんなのお弁当なの。戦いが長びくとおなかすくでしょ」
キリーが真吾に聞いた。
「お前、黒焦げのハンバーグ、好き？」
「いやあ、俺はミディアムじゃないと」
「だろう……」
レミーは肩を落として、真吾達に背を向け、
「いいの……食べてくれなくても……今日一日ぐらい女らしく過ごしたかったの」
それを聞いたとたん、二人の態度は豹変した。
「レミー、俺、食べるよ！」
「真吾、お前はミディアムじゃなかったのか？　俺がいただきましょ」
「お前はレアだろうが、タルタルステーキ並みの」
「俺だって、たまにはよく焼けたのを……」
二人は掴み合わんばかりの言い争いをし始めた。

「いい加減にしなさい！」
レミーが一喝した。
その声にキョトンとしてレミーを見つめた二人に、心をこめて彼女は、「ありがとう……」と言い、黒焦げのハンバーグを皿にのせて二人に差し出した。
こうなったら食べない訳にはいかない。
「おいしそう」
「それにしても、ダイナミックな焦げ方」
二人はハンバーグを口に入れたとたん、レミーに背を向け、目を白黒させ、それでも必死に「おいしい……」と言った。
レミーは、そんな二人の優しさがなにより嬉しかった。
司令室のサバラスはひとりだけで、ビジョンに写るオールワールドバンクをじっと見続けていた。
「……長い戦いだった……」
その顔には、いつもの冷静さを超えた、何かを期する覚悟が見てとれた。
ベッドに寝転がって天井を見ているケン太の目は輝いていた。
「旅立ち、宇宙の果て……僕は行くぞ！」

＊

やがて夜明け——

アルプスの谷間から陽が差し込んで、オールワールドバンクとグッドサンダーを明るく照らした。晴れあがった空は、いったい、どちらの味方なのか？

ドクーガ司令本部へ入ってきたケルナグールは、ビジョンを見て呆然となった。

♂「な、なんだ、この騒ぎは！」

ビジョンに、湖畔に集まった鈴なりの人々が写っているのだ。カットナルは吐き捨てるように言った。

「野次馬どもだ。いまいましい」

「ま、観客は多いほど、ショーは盛り上がる」

ブンドルは徹夜明けの赤い目で苦笑した。

鈴なりの人々の中には、三年の旅で、グッドサンダーの面々が出会い、そして別れていった人々のほとんどがいた。

何台ものTVカメラがグッドサンダーとオールワールドバンクを写し、アナウンサーが興奮を押さえきれぬといった様子で中継している。

「いよいよ、地球の運命を決める日がやってきました。ご覧下さい。彼らは世界中からこの地に集

まって来ました。ゴーショーグンを神と拝む者、救世主と慕う者、友と信じる者……それぞれの思い入れは違っても心は同じであります。ゴーショーグンよ、諸悪の根源ドクーガを打ち破ってくれ……この声は身の危険もかえりみず、この地に集まった我々……そしてこの放送を見る全世界の人々の声であります」

人々のどよめきがひときわ高まった。

上空に、カットナルとブンドルの旗艦、そして地上にはケルナグールの戦車隊が現れたのだ。やがて、空は雲霞のようなドクーガの空軍、陸上はスナイパー、コマンダーの大群で埋めつくされた。

真吾達のコクピットの前には、レミー大奮戦の弁当が、どこで見つけたのか、ミッキーマウスやピーターパンのキャラクターが描かれている、お子様弁当箱に入って置かれてあった。レミーのコクピットの教会型のウェディングタイマーが四分から三分五十九秒に時を縮めた。

「そろそろ、出番ね」

「了解。お弁当つきのハイキングだ」

「せめて、弁当食うまで死ぬなよ、お二人さん」

「どうせ一度死んだ命だ」

レミーは、真吾の台詞の続きを一瞬思った。「いつ捨てても平気さ……」。しかし、真吾はニヤリと笑って言った。

「二度も死んでたまるか。行くぞ！」

大空に飛び立った三機の戦闘機に、レマン湖の群衆は、怒濤(どとう)のような歓声をあげた。

「なんだか、ウケてるみたいね」

「客が多いからってあがるなよ、真吾ちゃん」

「俺、意外とこういうの、好きなんだよね。よし、最後だ、派手にやるか！　ゴーショーグン、合身、Go！」

三機は、群衆にショーを見せるかのように旋回を繰り返し、ゴーショーグンに収納された。一機一機が収納されるたびに歓声があがった。

「合身にバッチリ一分。あと三十五秒……」

「ＯＫ！　戦闘用意！」

ビムラー第四段階まで、あと三十秒。グッドサンダーでは、ファザーがカウントダウンを始めた。

ケン太とオバは、ビムラー炉の前に立っていた。

「オバ、新しい僕が生まれるのを……そこで見ていてね」

「ケン太……気をつけて」

「ありがとう、オバ……」

ケン太はビムラー炉のまだ輝いていない第四段階の部分にリフトで昇っていった。

ファザーが、第四段階まであと二十秒と告げた。サバラスはファザーに命じた。

「ファザー、時が来た瞬間に司令室を敵基地内に移動させる。いいな」

「了解！……10、9、8……」
ビムラー炉の第四段階の部分が、じわじわ光り出した。
「4、3、2、1、0」
第四段階を含めて、ビムラー炉の全てが光り輝いた。
オバの見守る中、ケン太の体がみるみる炉の中へ吸い込まれていった。

同時に瞬間移動したグッドサンダーの司令室は、轟音と共にドクーガの司令本部、ネオネロス皇帝の前に姿を現していた。
サバラスは、バズーカ砲を持って司令室からでてくると、ネオネロス皇帝と向かいあった。
「ネオネロス、ドクーガの時代は終わった」
ネオネロス皇帝は、サバラスを見すえて言った。
「サバラス、わしをよくここまで追いつめた。誉めてやる。だが、まだ終わった訳ではない。わしの切り札を見ろ」
ドクーガのビジョンに、空に向かって牙をむく核基地が写し出された。マザーが冷たく説明を加えた。
「世界各地に点在する核基地に設置された中性子爆弾、ならびに核兵器三億メガトン相当……同時に爆発すれば、地球は完全に滅亡します」
サバラスは叫んだ。

「いまさら、悪あがきはせぬ事だな。宇宙へははばたく地球の魂(ソウル)は、すでに誕生した」
「ケン太という少年か……だが、そのソウルにはお前がなる筈だった。この地球と人類を一万年にわたって陰で支配して来たこの私が生み出したお前がな」
「私にその資格はない。お前が宇宙へ進出する道具として、私は試験管の中で悪の申し子として作り出された。こんな私を宇宙は受け入れる筈がない」
「知っていたのか、お前は自分の生まれを……」

ネオネロスはツングスカ大爆発が起きた時、すでにこの日の来る事を予想していた。
そして、ビムラーの生み出すソウルになる可能性を持ち、自分の意志通りに動く人間を自らの手の内に作ろうとした。そして二十世紀になり、医学の発達により、ネオネロスの思い通りの人間が試験管の中で生み出せる時代がやってきた。その結果生まれて来た子供達の一人がサバラスだった。
子供達は、ドクーガの存在はもちろん、自分の生まれすら知らされなかったが、サバラスは生まれながらに仕組まれている宿命を敏感に感じとり、脱出を試みた。生まれ育った養育所から脱走したサバラスは、事あるごとにドクーガへの反抗を続けてきたのだ。

「悪の申し子として無理矢理生み出された私は、生み出したお前を倒すことでお前から解放される。それが私の生き方だ」
「わしは地球と共に生きてきた。お前達に倒されて、地球を他の誰かに委(ゆだ)ねる訳にはいかぬ。地球はわしのものだ……誰にも渡さぬ……渡すぐらいなら破壊した方がよい」

「そうはいかん」
サバラスは、バズーカをいきなり発射した。だが、砲弾はネオネロスの体を虚しく通り過ぎていった。
「人間と共に一万年を生きてきた私だ、武器では倒せぬ……フフフ……」
「一万年？……いったいお前は何者なのだ！」
「人間が生み出した、同じ人間に対する恐怖、怒り……悪魔であり神であり……、さあ、わたしはいったい何なのかな……」
その時、マザーがビムラーの破壊力が消滅した事をネオネロスに伝えた。
「時は来た……攻撃を開始せよ」
ネオネロスは、その時はじめて王座から立ち上がった。
「ビムラー第四段階完成……」、ファザーの声とともに、グッドサンダー・ビムラー炉の光が消えた。光の代わりに、別の青白く光る人の姿が浮かび上がった。オバのセンサーは、光の中にケン太の姿を感じた。
「ケン太君、ケン太君なのね」
「話はあと……メカを助けなければ……」
それは確かにケン太の声だった。
ブンドルはバラを高くかざし、叫んだ。

「ラストバトル！　攻撃開始！」
ドクーガ全軍はゴーショーグンへ襲いかかった。

真吾の声がレミーのコクピットに聞こえて来た。
「おいでなすったぜ。攻撃開……」
そこまで言って真吾の声がとだえた。
「どうしたの、真吾……」
レミーの耳に真吾のつぶやきが聞こえた。
「ケン太……」
キリーが聞き返した。
「ケン太？……真吾、なんの事だ……」
キリーのビジョンに写る真吾の顔が青白く照らされていた。
「ケン太、どうしてここに……」
ケン太の声が聞こえた。
「これ以上、メカを壊すことは出来ない……ゴーショーグン、ゴーフラッシャーを……」
真吾の目の前のボタンカバーが外れ、ボタンが自動的に押された。
ゴーショーグンから、今までと全く異なったオーラのような光がほとばしり出た。
ドクーガのメカニックの全てがその光を浴びた。次の瞬間、動き回っていたドクーガ軍の動きがピタリと止まった。

カットナルは指揮台を殴りつけほえた。

「うぬぬ……まただ。何故動かん……」

ケルナグールの声には、いつもの狂暴さがまるで失せていた。

「メカが俺達に逆らっているんだ」

ブンドルの顔には微笑がもれていた。

「メカがハートを持つ……ミステリアスな……だが、事実は小説よりも美しい」

やがてケン太の声が、ゴーショーグンの中から聞こえてきた。その声は、敵味方を超えて誰の耳にも届いた。

「メカが叫んでいる。戦いたくない……同じメカ同士戦うくらいなら死んだ方がましだって……ゴーフラッシャーはね、眠っていたメカの魂(ソウル)を呼び起こす光なんだ……」

ケン太は、動くことを止めたメカ達に語りかけた。

「でも、みんな！　戦いたくないからって何も死ぬ事はないよ。誰もみんなに命令する事は出来ないんだ……。君達は、自分の気持ちで戦いを止めればいいんだ。さあ、止めよう。もうこれ以上戦うのは……メカ同士で傷つけ合うのはよそうよ」

その声に答えて、メカ達は一機、また一機と地上に降りて行く。ブンドル艦もカットナル艦も……ケルナグールの戦車隊も砲身を下げ、コマンダーもスナイパーも銃を投げ、その場に座り込んでしまった。

「もはやこれまでか……だがなんというあっけなさ……せめて最後の名曲は……」
ブンドルはテープデッキのスイッチを押した。だが、テープデッキは狂ったように回り出し、テープを吐き出してしまった。
ブンドルはテープの山の中で溜息をついた。
「テープまで逆らうとは……しかし、ハートを持ったとて所詮不粋なメカ……わたしの美学までは分からぬと見えるな……フフフ」
ブンドルは自嘲的な笑いをもらすよりなかった。

「味方メカ部隊、戦闘拒否……いかなる操縦法をもってしても動きません」
マザーの報告を聞いたサバラスは、バズーカを肩から下ろした。
「終わったな、ネオネロス」
ネオネロスの目は怒りに燃えていた。
「許さん、機械であろうと人間であろうと、わしに逆らう者は許さん。サバラス、わしの本当の力を見せてやる」
ネオネロスの体から赤い火の玉が脹れあがった。巨大化した火の玉は、オールワールドバンクの建物を突きやぶって、青空に急上昇した。赤い火の玉から矢のような光が走り、次々とドクーガのメカを破壊していった。

ゴーショーグンの中からケン太の叫び声が聞こえた。
「よせ！　戦う気のないものをなぜ壊すんだ」
　ネオネロスの声が響いた。
「わしに背く者は許さん」
「ドクーガの好きにはさせない……真吾、レミー、キリー、ゴーショーグンから離れて……あとは僕がやる」
　さすがの真吾も事態の急展開にまごついた。
「いきなり離れろといっても……」
「行って！」
　ケン太の叫びと共に、ゴーショーグンの体内から三機の戦闘機ははじき飛ばされた。
　かろうじて体勢を整えたコクピットの中で、真吾は汗をぬぐった。
「おいおい、俺達はお払い箱かよ」
　キリーが肩をすくめた。
「真吾、ケン太君は？」
　真吾のコクピットにケン太はいなかった。

　ゴーショーグンの中で、ケン太の体がカーッと青白く光った。
「ゴーショーグン、ビムラー・アップ！」
　ケン太の体から光が飛び散り、ゴーショーグンを包んだ。

ゴーショーグンの表面が青白く光り、続いて表面の色彩が溶け落ちた。黒光りするその体は、観音像……いや怒りに燃える阿修羅のようにすら見えた。
「さあ、みんな、あれがみんなを破壊へ追いつめたドクーガの正体だ。行くぞ！　みんな！」
ケン太の呼びかけに、戦いを放棄していたドクーガの戦闘メカがむっくりと起き上がった。
「ドクーガ！　消えろ！　この星から！」
ゴーショーグンは火の玉へ突っ込んで行った。ドクーガのメカから青白い光が飛び出して、ゴーショーグンの後に従った。それは、メカの魂だった。ソウルは次々に、赤い火の玉をつらぬいた。火の玉はバラバラに飛び散り、やがてその破片のひとつひとつも、襲いかかるソウルによって消されていった。
最後の炎が消えた時、ネオネロスの断末魔の絶叫が聞こえた。
「わしの滅びる時、それは地球の滅びる時だ！」
音をたててドクーガ司令本部の壁が崩れ落ちると、サバラスの前に無数のビジョンが現れた。そのビジョンのひとつひとつに核兵器の発射状態が写っていた。地球上の核兵器ミサイルの全弾が発射されたのだ。
「ドクーガの滅亡と核兵器弾は同時セット……もう誰にも止められません」
マザーの声が無情に響いた。
誰もが、その時地球の滅亡を確信した。だが、ゴーショーグンの片腕を宙に上げさせると、ケン太が叫んだ。

「地球は滅びない。ゴーショーグン、ゴーフラッシャー!!」
柔らかなオーラのような光が、ゴーショーグンからほとばしった。
呆然と見つめる人々の前で、光はどんどん広がった。光は、レマン湖を、アルプスを、いや、みるみるうちに地球の全てを覆いつくした。
そして、それぞれの標的に向かって飛んでいた無数のミサイルは、その光の中で次々に溶けるように消えていった。

その頃、ジッター博士は、月面の秘密研究所で髪を振り乱して巨大なメカの製造に没頭していた。
「三十五身合体メカだぞッ、三十五身合体メカ……何がゴーショーグンだ。何が真田博士だ。わしこそキングオブメカなのだ」
その時、アラームが鳴った。
「ミサイル群接近、瞬間移動したものと思われます」
「何!?」
ビジョンに無数のミサイル群が写っていた。
「駄目だ。この距離ではとても逃げられん」
その言葉の終わらぬうちに、秘密研究所の回りにミサイル群がなだれ落ちるように突きささった。
それは、槍衾（やりぶすま）という表現すら超えていた。研究所付近はおろか、月面一体が針山のようであった。
突然の出来事に、一瞬目の前が暗くなったジッター博士は、やがて自分が傷ひとつ負っていない事に気付いた。

「なぜ生きとる。なぜ、わしは生きとるの！」
研究所のセンサーコンピューターが、事実だけを告げた。
「核兵器及び中性子ミサイル全弾不発、中性子反応ゼロ」
「全弾不発!? 嘘じゃ！　科学的根拠がない！　わしは信じないぞ！」
ジッター博士は、頭を掻きむしってわめき続けた。

レマン湖湖畔の群衆が呆然と見上げている青空に、ゴーショーグンがオーラのような光を輝かして浮かんでいた。その姿は、確かに、ケン太が見たニューギニアの洞穴の絵……いや、その他の仏像や宗教画に現れる神に似ていた。
やがて、丘の上にたたずむグッドサンダーのメンバーの上空に、青白い光に包まれたケン太が別れを告げに現れた。
「北斗七星の向こう、何もない宇宙の果てで、誰かが僕を呼んでるんだ。オバ、僕、行くよ。広い世界をこの目で見たいんだ」
オバは声をつまらせながら答えた。
「行きなさい。ケン太君、あなたはもうどこへでも、あなた一人で行けます」
真吾が弟に語りかけるように言った。
✿「誰もお前を止めはしない。ケン太、頑張れよ」
「ケン太、また会おうぜ。向こうで可愛い子に会ったらよろしく言ってくれよ」
キリーの別れの言葉は、いつものキリーそのままだった。

「ケン太君、サンキュー。本当に楽しい三年間だったわ」
レミーの別れは、仲の良い友達同士のようだ。
「みんな元気で……でも僕、さよならは言わない……あっ、ほら、僕と一緒に行く地球の仲間がやって来るよ」
ケン太は、物凄い速さで空を飛びはじめた。その飛翔（ひしょう）に答えるように、海の中から、ソウルが輝きながら飛んできた。
――海と話せた人達――
凪の中からソウルが光った。
――凪と話せた人達――
凪に揺れる森のざわめきの中からソウルがはじけた。
――森と話せた人達――
いつの間にか、雲の中のソウルとケン太は飛んでいた。
――雲と話せた人達――
雨の中にもソウルはいた。
――雨と花、野原、川、岩……そして地球にある全てのもの……――
花の中から、野原から、川から、岩から、雪の中、嵐の中、朝露の中、火山の中、様々なソウルがケン太と共に飛んできた。
やがてそれらは、ゴーショーグンとケン太達の回りに集まり、踊り、跳ねた。
その姿に、敵も味方も陶然（とうぜん）と見とれていた。それは幻かもしれなかった。だが、その場にいた者

は、確かに見えたような気持ちにさせられていた。
　ケン太が明るく叫んだ。
「さあ、もう行かなきゃ！」
　サバラスがケン太に頷いて言った。
「うむ。さあ飛べ、飛んでゆけ……ケン太」
「ああ……みんな行くよ！　僕らは飛べる、その気になればどこまでだって」
　ケン太とソウル達は、ぐんぐん上昇して行った。ゴーショーグンも、その後を追って、ゆっくり浮上して行く。
　やがて、行く手に広がる青空が門のように真っ二つに割れた。その向こうに無限の宇宙が広がり、北斗七星が輝いていた。
　ケン太達とゴーショーグンは、光る渦となって宇宙の果てへ消えていった。
「見ましたか！　見てくれましたか！　あの子の飛ぶ姿を！　わたし達が……わたし達が育てたんですね」
　オバの声は、子供を育てあげた母の自信にあふれていた。
　ブンドルはマントを翻（ひるがえ）して、ケン太の消えた宇宙を指さした。
「な、なんという飛翔……美について百万言の形容詞を並べたてたとて、あの姿を讃美しきれるものではない。だが、私はあえて言おう、ただひとこと。これこそ正に……美しい」
　やがて、宇宙への門が閉じられると、そこには何事もなかったように澄みきった青空だけが広がっていた。

レミーが溜息をついてつぶやいた。
「終わったのね」
サバラスはかぶりを振った。
「何も終わってはいない。ケン太の旅は始まったばかりだ」
真吾もうなずいた。
「そう、何も終わっちゃいないさ」
キリーが真吾の後に続けた。
「ああ、何も変わっちゃいないさ、俺達は……」
そう、飛び立って行ったのはケン太だけだった。
真吾もキリーもレミーにも、変化が起きたわけではなかった。分かっているのは、グッドサンダーを守り、ドクーガを倒すという目的がなくなった今、退屈で浮き草のような暮らしが待っているという事態だけだった。
レミーは肩をすくめ、つぶやいた。
「あ～あ、一年もたったらどうなっちゃってるのかしら、私達……」
そんなレミーを、遠くからブンドルが見つめていた。
「君はしなやかで、かつけなげだ……」
だが、何をつぶやこうが、今はどうなるものでもなかった。

＊

ドクーガとグッドサンダーの戦いは終わった。ちなみに、敵味方の一年後をここに記載しておこう。

――ジッター博士――
「中性子爆弾以上の最終兵器の研究に没頭、一度も部屋から姿を見せず」

――オバ――
「メカとしては世界最初の保育園園長として活躍中」

――ケルナグール――
「フライドチキン及びハンバーグ、牛丼の世界シンジケートのボスとして、妻と共に君臨」

――キリー・ギャグレー――
「自叙伝出版するも売れず。現在、〃ケルナグールフライドチキン〃、ブロンクス支店前でホットドッグスタンド開店」

――カットナル――
「アメリカ大統領就任。国歌を『双頭のカラスの下に』と変更し、ひんしゅくをかう」

――北条真吾――

「現在、無職。某ホテルバスルームで石鹼(せっけん)に滑って転び、複雑骨折、入院中」

――ブンドル――

「わずか三カ月で宇宙美学論を確立、以後、闇に消える」

――レミー・島田――

「求婚者続出するも、帯に短し襷(たすき)に長し……動物の方がましと、現在、アフリカの自然動物公園で保護官として密猟者を相手に戦っている。当分結婚の見込みなし」

――サバラス――

「グッドサンダーと共に行方不明――」

私ことイザベル・クロンカイトは現在、調査記録の整理に没頭している。この事件には、まだまだ調査不足のため不明な点が多い。たとえば、グッドサンダー基地はわずか五人しか人間を乗せられないのに、なぜ、あれほどの数の客室、その他の設備を必要としたのか……。

完璧な資料として発表するには、まだまだ時間を要するものと思われる。

——ジャーナリスト・故アート・クロンカイト、及びその娘イザベル・クロンカイトの調査記録より——

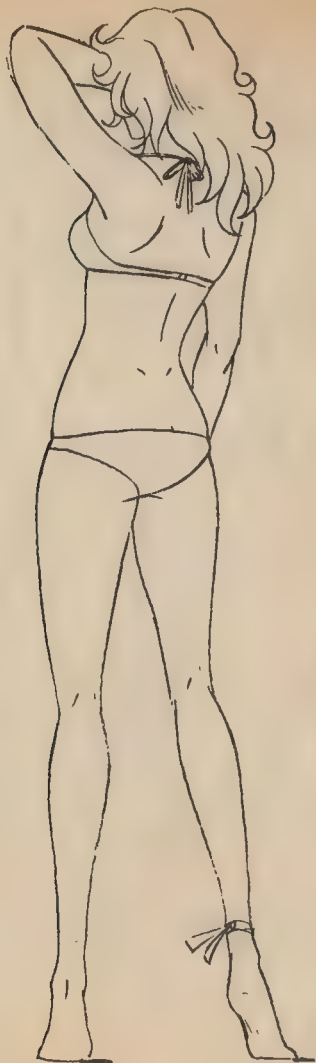
＊

戦いが終わって一年がたった。敵も味方も、それぞれの生き方をしていて、二度と出会う事はなさそうに見えた。
だが、そのバラバラな糸を紡ぐような事件の起こる日が、それから一年もしないうちに来ようとしているのを、まだ誰も気が付いてはいなかった。

戦国魔神ゴーショーグンPART　I（完）

YOU　AGAIN

●次回予告

ハーイ！　レミーです。机にひじついて、私のオシリばっかりながめてるキミ、小説版「ゴーショーグン」ちゃんと読んでくれたかな。ところで、ケン太くんが旅立っちゃってから、私はアフリカで動物相手の毎日。あいかわらず色っぽい話はマッタクナシ！　浮いた話のひとつぐらいと思っても、大自然が相手じゃね。そんな私のところへ、なぜかお呼びがかかったの。むかしのなかまがみんな集まって、大宇宙を舞台に大活躍。ハラハラドキドキの続編「その後の戦国魔神ゴーショーグン」は83年３月発売予定。原作者さんがんばってくれてるかなー？　今度は私の結婚相手をちゃんとみつけてほしいな……。とにかく３月にまた会おうね。

SEE

●製作スタッフ

企画　佐藤俊彦

プロデューサー　相原義彰
　　　　　　　　加藤　博

原案・文芸担当　首藤剛志

音響監督　松浦典良

美術設定　勝又　激

設定助手　市原勝義

キャラクター・デザイン　スタジオZ5　本橋秀之・平山智

色彩設定　永江由利

録音　高橋弘幸（整音スタジオ）

効果　伊藤道広（E&M）

タイトル・デザイン　安東光弘

制作担当　庄司　清

作画　増井　泉・大島利恵・橋本利彦・丹澤　学・村上鴨康・
　鶴山　修・飯牟礼詳子・南　全子・小原髮夫・桜井邦
　彦・小野浩一郎

仕上　マキ・プロダクション　井上育子・浅沼美智子・高橋
　恵子・ぱすかる・森田美也子・森美奈子・土居ひろみ
　二野宮理沙・井上邦雄・伊藤美穂子・黒岩優子・南
　共子・浅田久恵・杉田泰子

背景　スタジオ・コスモス　梶谷雅夫・上村協子・にしこプ

ロ・高橋正宗・ミニ・アート・田原優子・西浦雅裕・
斉藤幸市
制作管理　佐藤訓史・古林明子
制作進行　石川加寿美・木村健吾・松田喜明・本橋文雄・須貝　尚・杉浦　勉・馬場秀雄
撮影　スタジオ・ウッド　三晃プロダクション
編集　辺見俊夫・山崎昌三
現像　東映化学
声の出演
真田ケン太　松岡洋子
サバラス　小林　修
北条真吾　鈴置洋孝
キリー・ギャグレー　田中秀幸
レミー・島田　小山茉美
OVA／マザー・間嶋里美
ネオネロス　藤本　譲
ケルナグール　長堀芳夫
カットナル　木原正二郎
ブンドル　塩沢兼人
ジッター博士　寺島幹夫
製作　読売広告社　葦プロダクション

アニメージュ文庫

戦国魔神ゴーショーグン

N-002

1982年12月31日　初刷

著者　首藤剛志

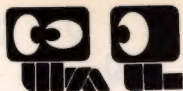
発行者　徳間康快

東京都港区新橋四—一〇—一　〒一〇五
発行所　株式会社徳間書店
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替　東京四—四四三九二番

印刷
製本　大日本印刷株式会社

〈編集担当　鈴木敏夫・片桐卓也〉

ISBN4-19-669502-7C0193（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

★この本を読んでの感想を左記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。〒105　東京都港区新橋4の10の1「アニメージュ編集部」AM文庫係

アニメージュ文庫は「アニメージュ」の弟です。

AMJuJuと呼んでねっ！

文庫の名まえを"エイエムジュジュ"と名づけました。「アニメージュ」のアイドル・マーク、ジュジュ虫のジュジュとAMをくっつけたのです。新しくできた弟のマークも、兄き同様よろしくね！

●JuJuには5つの部門があります。

NOVEL

アニメ作品の小説化が原則だけど、しばらくたったらオリジナルにも挑戦します。

CHARACTER

人気キャラクターの個人写真集。ピンナップや名場面がいっぱい載っています。

FILM

傑作アニメのフィルム文庫。コマを豊富に使用したオール・カラー版です。

PEOPLE

アニメーター、演出家、脚本家など、この1冊で、その人のすべてがわかります。

THE BEST

「アニメージュ」で、好評のうちに連載終了したものを、1冊にまとめます。

カバーイラスト＝なにわ♡あい
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷(株)